

研 究 紀 要

38

愛知文教女子短期大学

2017.3

目 次

原 著／論 文

保育者の資質としての感性

～保育学生の感性の在り方～

..... 真 下 あさみ… 1

研究ノート

オーストラリア医療福祉研修のまとめ 2012 年～ 2016 年

学生報告書とアンケート調査の結果から

.....小 川 美 樹 有 尾 正 子 鋤 柄 悦 子…19

入学前の思いと養成校で学ぶ中での保育者に対する認識の違い

－幼児教育学科の卒業学年へのアンケート調査から－

..... 柘 宜 佐統美 服 部 紗 樹 松 葉 みちる… 37

保育実習における要指導行動とソーシャルスキルとの関連

.....朴 賢 晶 村 上 浩 美 国 藤 真理子
星 野 秀 樹 玉 田 裕 人 伊 藤 久美子…49

2016 年度愛知文教女子短期大学学生実態調査報告

.....水 谷 久 康 朴 賢 晶…57

原著（論文）

保育者の資質としての感性

～保育学生の感性の在り方～

真下 あさみ

“Sensibility : capacity of perception or feeling” as qualities for nursery teachers
— what the sensibility of nursery teachers trainees should be —

Asami Mashita

Abstract

The colleges where the students learn to be nursery teachers have many new students every year. In recent years, we have found that the qualities of our students have changed. It is essential for nursery teachers to have a rich sensibility. However, these days we have some students who have poor sensibilities and some trouble at nursery school due to their lack of expression.

Sensibility is invisible, and that’s why there are many individual ways to define sensibility. It is difficult to set certain ways to determine sensibility that everybody understands. In this paper, in order to understand sensibility specifically and visually, I identified 3 main elements; (1) Antenna: the ability to be aware of something, (2) Image: the ability to form mental images of things or events, (3) Performance: the ability to express the mental images. There are 2 additional factors which influence the 3 elements above; (4) Character and (5) Experience. Furthermore, I developed the sensibility check sheet for nursery teacher trainees to measure the 3 elements and 2 factors. I selected some distinctive students and made a radar chart which consists of the 3 elements and 2 factors of those students. The chart will probably be useful to the trainees and college teachers. This study attempts to make abstract sensibility visual and to examine sensibilities as qualities for nursery teachers.

キーワード：感性、表現、保育者資質

1. はじめに

現代は、多くの女性が社会進出するようになり、生涯にわたって仕事を続けたいと希望する女性が増えている。しかし、核家族化がすすんだ日本においては、家庭養育機能が十分でなく、その補完が求められるが、地域によっては、結婚出産後に子どもを預けて働くための子育て支援対策が追いついておらず、その環境が整っていないところもある。ワークライフバランスを支援するためには、少子化の時代だからこそ、保育の拡充が必要なのだが、残念ながら、特に都市部では今でも待機児童の問題が大きく取り上げられている。なかでも3歳未満児の待機児童数が目立ち、このような地域においては、この状況を解消するために、小規模保育園や家庭的保育室等を増設して対応してきた。保育施設が増えるということは、保育にあたる保育者の増員も見込まれるわけで、早急に、それに見合った保育者を充足させなければならない。この状況を受けて、さらに多くの保育者を養成するために年々養成校は増え続け、現在、愛知県内でも専門学校を含めると養成校は40校にも上る。保育者養成校が増えたことは、全体として入学定員枠も増えたこととなり、つまり、高校生にとっては保育者養成校に入学できる可能性が高まったことになる。このことは、以前よりも保育に関わる学校や学科の選択肢が増えたということであり、能力を問わず誰もが受験しやすくなったことはもちろん、毎年、女性に人気のある職業の第3位までに必ずランクインする「保育士」に興味はあったものの、進学か就職かを迷っていたという学生までもが「私でも入れるかも」と軽い気持ちで入学してくるといった状況を生んでしまったとも考えられる。このようなことも影響しているのか、近年、保育者養成校には多様な学生が入学してくるようになり、保育学生の質は確実に変化しつつある。

養成校の教員になって、これまで多くの学生と触れ合ってきたが、最近では保育実践の授業で色々な表現をすることが苦手な学生が見受けられる。保育者には、例えば歌をうたったり、リズムののって踊ったり、絵を描いて楽しんだり、色々なものをつくったりなど、五感で感じた様々なものを表現しながら子どもと一緒に楽しむといった資質が必要になってくる。そこで表現することを嫌がったり、避けて通るといった学生に出会うと、この学生は保育者としてどうなのかと頭を悩ませてしまう。事前におこなう実習指導の授業では、たくさんの手遊びや絵本の読み聞かせ、パネルシアター、ペープサートなどを体験させ、学生の感性を磨きながら、子どもの前で実践する表現力を身に付けていくわけだが、ここでつまづく学生をいかに指導し、どのように感性を養っていくかが問題だと感じた。

2. 保育者に望まれる感性の捉え方

「感性」とは非常に曖昧で抽象的なものであり、人によってとらえ方が違う。一般的に広辞苑などにも、感性とは刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感受性などと示されているが保育をするうえで全ての基本となる保育所保育指針にも、「感性」という言葉は用いられている。

まず、第1章総則 3. 保育の原理 (1) 保育の目標のなかに、「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」として感性はあげられている。第3

章 保育の内容においても、表現の領域のなかでも「感性」という言葉が扱われ、保育者は、保育のなかで子どもの感性を育まなければならないことが示されている。では、子どもの感性を育む立場として、保育者に望まれる感性について考えてみる。

保育の視点からみた感性については、平成22年に改正された保育士養成課程の内容の教科目の名称変更等において、これまでの「基礎技能」が「保育表現技術」に変更された点にも注目すべきである。保育表現技術には、子どもの表現を広く捉え、音楽表現、造形表現、身体表現、言語表現に関する保育士の保育技術を、子どもや保育との関連で修得できるようにすることが示されている。保育者に望まれる感性は、これらにも配慮し、特に、表現技術を感性の表出として捉えながら、音楽、造形、身体、言語の各分野で活用し、子どもの感性を養っていくことが大切だと考えられる。

保育者には、特別な資質が望まれる。保育者の資質については、保育所保育指針第7章職員の資質向上において、(2) 保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通じて保育の専門性などを高めるとともに、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくこと等の事項が示されている。その資質として高めなければならない保育の専門性のなかにも感性は記されている。保育士の研修体系「保育士の階層別に求められる専門性」（第5回保育士等検討委員会資料6）をみると、そこには、初任者、中堅職員、リーダー的職員、主任保育士等管理的職員の階層別に、どのような専門性が必要であるかが各分野ごとに示されている。その分野は、

1. 専門職としての基盤
2. 専門的価値、専門的役割
3. 保育実践に必要な専門的知識・技術
 - (1) 子どもへの保育実践 (2) 保護者への関わり・ソーシャルワーク (3) その他
4. 組織性

の4つである。そのなかでも、保育者の資質として一番重要だとされる 1. 専門職としての基盤のなかには、責任感や行動力、達成意欲などといった項目がみられるが、そこに、「感性」も示されているのである。それは階層別に分けられることなく、初任者から管理職までの全ての保育士に求められる必須のものとして掲げられている。一般的に、責任感、達成意欲などといった項目は、社会人として、どの職業にも必要なものであるが、「感性」は必ずしも求められない可能性がある。例えば、職種によっては豊かな感性がなくても、大して困ることはなく、仕事自体はできるかも知れない。しかし、保育者という職においては、「感性」は重視されるものであり、全ての保育者にとって「感性」はなくてはならないものなのである。このことから、保育者養成校においても、将来、保育者となる学生には、保育の専門的知識や実践技術を指導するとともに、資質として、保育者に望まれる感性を、少しでも伸ばせるような教育内容と指導方法を、教員として工夫しななければならないと考える。

学生の感性を育てるにあたっては、まず、保育者に望まれる感性がどのようなものであるかを教員が認識し、学生にその内容や方向性を示す必要がある。そのうえで、授業における具体的な指導を実践していくものでなければならない。

まず、子どもの命を守り育てる保育者の仕事には、常に子どもの些細な異変に気付き、周りの環境にも細心の注意をはらわなければならない。また、日々の生活のなかで子どもの発達や遊びを促すために、保育者は様々なことに目を向け、気を配っている。第一の感性の要素は、様々なことに気付くための重要な役割を果たす「アンテナ A」であると考えられる。

感性とは、まず、人があらゆる刺激に対して何かを感じ取ることである。それは、主に目で見た花が綺麗だと感じたり、花の香りに癒されたりすることのように思われがちだが、その花があることに気付くということ自体が、まず感性だ。そして、時には枯れている花があること、近くに蝶が飛んでいること、鳥のさえずりが聞こえるなどといった、花のまわりの現象にも気付くこと、さらに、この花を見ている人の気持ちを考えたり、察したりすることも感性だと捉える。つまり、感性とは、まず、何かを感じるアンテナがあるかどうか、アンテナが敏感に働くかといったことが大切なのである。人の気持ちを察したり、共感することも感性なら、自分が人から愛されているという感覚や、心が傷つくこと、拒否する反応も、アンテナでキャッチしたもものとして考えれば感性なのだ。人は、その「アンテナ」がなければ何も感じることはできない。「アンテナ」は感性のなかで欠かせない要素である。つまり、保育者には「アンテナ」で色々なことに気付き、配慮する感性が必要なのだ。しかし一方で、それが過敏に反応し過ぎることは、保育者としては好ましくないことである。例えば、食事の場面で、子どもが食べ物をこぼしたり、服を汚したりすることに過剰に反応し、こぼさないこと、汚れないことに執着して、子どものスプーンを取り上げ、保育者が全部食べさせてしまうことがある。これは、明らかに良くない例だ。保育のなかでは、どの程度手を貸したら良いかの判断やそのタイミング、すなわち感性の表出＝パフォーマンスにも「性格」が大きく関わっていると考えられる。大学の授業では、絵本の読み聞かせについて一度注意をしたら、落ち込んで、そのあと読めなくなってしまう学生もいる。環境の変化や情報、人間の言葉や行動などをキャッチする「アンテナ」は必要だが、過剰に反応したり、気にし過ぎるといった傷つきやすさは「性格」であり、それは「パフォーマンス」に大きく影響を及ぼしている。

次に、感性を育む保育には、子どもの生活、保育実践の全てにおいて、「イメージ」する力が欠かせないものであると考えられる。例えば、季節感を味わうねらいで活動を考えた時、さて何をしようかと豊富にイメージできる保育者は、子どもに様々な体験を与えることができる。保育の計画は、子どもの姿や活動の展開をいかに予想して、効果のあるものに組み立てていくかが大切なのだ。第二の感性の要素は、ひらめき想像する「イメージ I」である。

感性は、アンテナでキャッチしたことを体験として積み重ね、それらが記憶され蓄積されたものが、ある瞬間に思い起こされて、形として表れ創出されるものである。思い起こされ、創り出されるものには演奏や舞踊、制作、執筆などあらゆる表現の形があるが、それには想像＝イメージすることが大きく関わっている。例えば、ピアノを弾く際に、嬉しい気持ちや喜びを表現して演奏するといった場合、人はこれまでに蓄積された色々な体験のなかから、何かを想起して表現しようとするが、それには、パッとひらめくものがあるか、イメージが浮かぶかどうかが決める手となる。創作ダンスでも、絵画でも、小説においても、それは同様である。嬉しい気持ち、喜びの表現について、ある人は、頭のなかを駆け巡る数々の体験の

なかから、大好きなケーキをスイーツバイキングでたくさん食べたときの気持ちを思い浮かべる。別の人は、念願のハワイ旅行に行って、海辺で思わずジャンプしたときの情景を思い出す。各々のひらめきを基に、そのイメージをどのように膨らますかは人それぞれだ。人によってイメージできるものや数には違いがあるが、ひらめきやイメージには、その人のなかに蓄積された記憶、つまり、これまでに積み重ねてきた経験の質や量が大きく関わっていると考えられる。「イメージ」は、感性のなかでも、何かを創造しようとするときに大きなパワーとなるものである。あらゆるイメージを巡らせ、ねらいに沿って安全かつ楽しく保育を行うためにどんな内容を考えるかは想像する力によるものが大きい。

さらに、保育では、気付いたことについてタイムリーに対応し、イメージしたことを形にしなければ意味がない。つまり、何かの表現や行動＝「パフォーマンス」を起こすこと、動くことが、保育の技術となり得る。保育のなかでは、配慮は主に心掛けること、気を配り意図することであるが、援助は、直接子どもに関わること、子どもに提供される技術のことを指している。注意や言葉掛け、食事や排泄の介助など、保育のなかでの援助も「パフォーマンス」とみなされる。また、保育者が絵本を読んだり、遊びをリードしたりする実践などの保育者が主体的に行う行動も「パフォーマンス」であり、どちらの「パフォーマンス」も、日常的に欠かせない保育の技術であり、感性の表出のひとつとして備わっているべきものである。感性の三つ目の要素は、保育者として表現すること、行動することの「パフォーマンス P」であると考えられる。

感性は、イメージを膨らませたら、それをどのように表現するかということが重要である。ピアノ演奏の例でいえば、喜びを表現しようとして何かひらめいて、イメージが次々に溢れてきたとしても、それを実際に表現するためには、どのように弾くかが問題なのだ。感性は、外側に表現しなければ、相手には伝わらない。例えば、喜んだ時にどんなふうに跳んだのだろうか、また、どんな歓声をあげたのだろうかイメージしながら、その時の気持ちを表現すること、そのイメージを、表現＝パフォーマンスとして外からもわかるように、行動として示すことが演奏となるのだ。強く弾く、短く弾く、なめらかに弾くなど、弾き方にも色々あるが、弾くことには演奏技術が伴う。自己流で色々な弾き方を試すという方法もあるが、一般的に演奏技術には、これまでの経験が少なからず影響するといえる。つまり、ピアノを習っていた経験があれば、強弱をつけて弾くことをはじめ、様々な演奏技術にふれる機会も多く、技術を習得している可能性が高いと考えられ、より高度な演奏技術をもって感性を表現することができるわけだ。ピアノに限らず、ダンスや身体運動等においても、体験や経験は豊富であった方が望ましい。

しかし、パフォーマンスには、技術的な経験や努力を要するものばかりではない。枯れそうな花に気付いた時、そこで何をしたら良いのかをイメージをし、水をあげようと行動を起こすこともパフォーマンスである。すなわち、思い浮かべたイメージを形にして表すこと、実際に動くことも感性である。細かいことに気を配ること、相手を思いやり、優しい気持ちを持って何かしようとする「パフォーマンス」は、人と上手く関わっていくことに必要な性格としても捉えることができる。枯れそうな花に水をあげることと同様に、元気のない友達に気付いて声をかけたり、人を楽しませようと心掛けることも、感性の表出である「パフォー

マンス」に強く影響を及ぼすものであり、毎日の生活のなかで、人間関係を良好に保つスパイスのような役割を果たしていると考えられる。

以上のように、私は、感性を「アンテナ A」「イメージ I」「パフォーマンス P」の3つの要素で成り立っているものと捉えて研究をすすめた。

また、これらに付け加えて、保育者の感性の在り方としては、感性の表出＝「パフォーマンス P」が安定したものであることが望ましく、感性としての「アンテナ A」「イメージ I」「パフォーマンス P」の3つの要素は、それぞれひとつだけでは成り立たないものであり、3つの要素が相互に絡み合っ、その人のなかに感性として存在している。そして、「アンテナ A」「イメージ I」「パフォーマンス P」には、その人の「経験 E」や「性格 C」が大きく影響を及ぼしていると考えられる。保育者として望ましい感性には、このことを加味して感性を捉えるべきである。例えば、感度良好なアンテナを持ち、色々なことに気付くとしても、性格的にあまりにも感じやすく過敏傾向がある場合には、イメージの広がりやパフォーマンスに支障をきたすと考えられる。また、ちょっとしたことにもすぐに気が付き、アイデア豊富で能力的にも優れているが、プライドが高く、人からどうみられるかをいつも気にするような性格の学生や保育者は、保育実践の場面では笑顔が少なく、表現力に欠け、子どもを十分に楽しませることができない可能性もある。豊かなアイデアを発想できたとしても、その性格が影響することによって、せつかくの感性も花開かないのだ。毎日長時間子どもと接し、育て見守るという保育の性質上、子どもに対して大きな影響を及ぼす保育者は、その責務として、常に安定した保育を提供しなければならない。そのためには、保育者として、保育の技能＝感性の表出という面からみると、安定した性格や豊かな体験を整えることが望ましいのである。

また、保育は保育者の内的な心の状態に左右されやすい。保育者に望まれる感性は、最終的に保育の技術となって表れる「パフォーマンス P」を安定したものとするために、自身

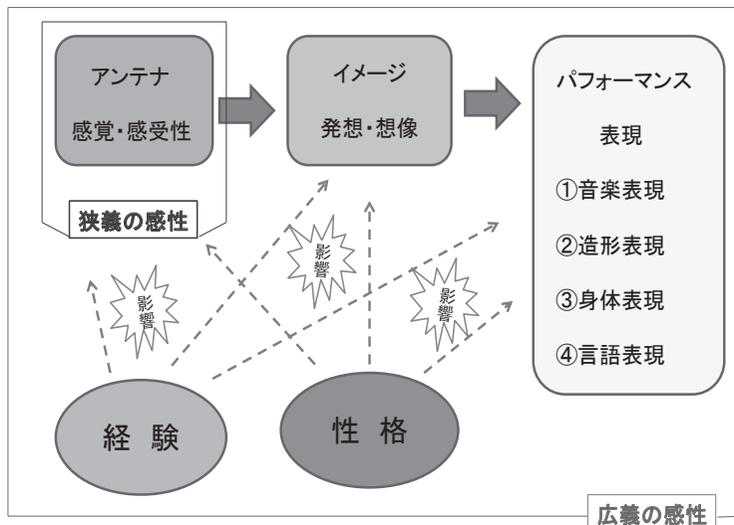


図1 感性の表出

の性格を自覚し、調整することや、豊富な体験を培っていくことが重要であり、それらについて学生に伝え、指導していくことが、保育者資質としての「感性」の育成には必要であるとする。この研究では、感性を具体的かつ可視的に理解するために、三つの要素と二つの要因で捉えたところが最大の特色である。①様々なことに気付く「アンテナ (Antenna)」②ひらめき想像する「イメージ (Image)」③表現する「パフォーマンス (Performance)」さらに、それらの要素に関わり影響を及ぼす要因として、保育者を目指す学生の④対人関係のなかで示す「性格 (Character)」⑤これまでの「経験 (Experience)」の5つを「感性の表出」として図式化したものが図1である。

そして、図式化した「感性の表出」の5つの要素および要因を、数値化して測るための「保育学生のための感性チェックシート」を作成し、A・I・P・C・Eの要素・要因からなるレーダーグラフに表し示すことにより、学生自身が自分の感性を見つめ直すとともに、指導する教員も学生の状態を把握することで、今後の指導に活用出来るものとした。

さらに、これまでの考察をもとに、「アンテナ」「イメージ」「パフォーマンス」「性格」「体験」をカテゴリ化し、保育者として望まれる感性として具体的な項目をあげ、それらを個別にチェックすることで、それぞれの感性の在り方を評価できる内容として、A、I、P、E、Cを測るための表1「保育学生のための感性チェックシート」を作成した。チェックシートは、学生が自らの感性の在り方を自覚し、調整が必要と思われるものを見出せることに意義があり、教員は、学習の過程で学生の感性を客観的に把握することができ、指導に活かすこともできる。チェックの方法は、出来る、出来ないといった能力評価のような形ではなく、「思う」「少し思う」「思わない」の3段階で☺マークに色を塗っていく形式とし、絵を用いることで保育色を出し気楽にチェックできるものとした。このシートは、学生が保育者養成校に入学した初年度に、保育者に望まれる感性とはどのようなものなのかを教員が伝えるとともに、学生がチェックを行うことで、まず、学生に感性の在り方について考えさせる。その後、保育実習等を考慮しながら、必要な保育実践の内容に合わせて指導を行い、卒業前にもチェックを行って、保育者として望まれる感性に少しずつ近付けるよう学生及び教員が効果的に活用していくものとする。

最近、保育実践の発表等についても、学生の苦手意識や過度の不安、緊張といった性格が影響して、感性が変化して表出されることがある。緊張のあまり、ピアノが上手く弾けなかったり、お話を読む時に声が小さくなってしまったりするのがこれにあたる。これは、保育の技能としてみると問題であり、指導には内在する感性の表出との関連を考慮する必要がある。

最近の学生は、感じやすく傷つきやすい。実習に対する不安も大きく、それは保育実践に関することだけでなく、対人関係や生活に関する不安の強い学生も多く存在する。不安意識、緊張感、過敏さといった感情や性格は、学生が本来持っている感性の表出に大きく影響を及ぼすものであると考えられ、軽視出来ない問題である。

さらに、学生の感性には、学生のこれまでの経験が大きく関係している。特に、保育実践としてのパフォーマンス＝表出においては、経験の有無が影響する。例えば、ピアノ演奏を主とした音楽的表現や、絵画・工作等の造形表現等には経験が多ければ多いほど感性が養わ

れていると考えられる。絵本の読み聞かせについても、原体験があるかどうかで、学生の保育実践そのものが変わってくる。それぞれの経験の質や量は、学生が育った環境によって違うものであるが、まさに、その違いによって感性は左右されることがある。その意味からすると、実際には、内面にある感性が表出されたもの＝パフォーマンスが感性として捉えられるため、保育の実践は、感性と密接に関わっているといえるだろう。つまり、経験することによって表現自体が変わってくる。豊かな表現には経験の質や量が重要な鍵となる。

「感性」という言葉は多様される。その言葉の使い方、捉え方は人それぞれであり、それを統一することは出来ない。「感性」は生まれ持ったものであるとか、大人になってから磨くことは難しい、大学に入学してから感性を育むことなど出来ないという意見もある。しかし、保育者の資質として身につけるべき感性については、その在り方を学生にしっかり伝えることで感性は伸ばせるものとする。保育者は、日々子どもと関わり、その発達を促すことが使命であり、子どものあらゆる可能性を伸ばしていくことが大切である。その意味でも、保育者を目指す学生自身が、保育者に望まれる感性がどのようなものであるかをしっかり自覚し、教員とともに共通認識したうえで感性を磨いていくことが望ましいのである。

表1 保育学生のための感性チェックシート

A アンテナ	I イメージ	P パフォーマンス	C 性格	E 経験
人より色々なことに気付く ☺☺☺	情景が次々と思いつく ☺☺☺	音楽表現は上手くできる ☺☺☺	感情・愛情が豊かである ☺☺☺	音楽的経験が豊富である(ピアノ楽器等) ☺☺☺
敏感に変化を感じ取れる ☺☺☺	ふと、ひらめくことが多い ☺☺☺	造形表現は上手くできる ☺☺☺	思いやりがあり共感できる ☺☺☺	造形的経験が豊富である(絵画工作等) ☺☺☺
気遣いや、心配りができる ☺☺☺	次々とイメージが広がっていく ☺☺☺	身体表現は上手くできる ☺☺☺	過度な不安や緊張は感じない ☺☺☺	身体的経験が豊富である(舞踊・運動等) ☺☺☺
何事にも興味や関心を持つ ☺☺☺	ひとつのものから色々なものを想像する ☺☺☺	言語表現は上手くできる ☺☺☺	人の目を過敏に気にし過ぎない ☺☺☺	言語的な経験が豊富である(絵本等含む) ☺☺☺
色々なタイミングの調整ができる ☺☺☺	アイデアや工夫がたくさん出てくる ☺☺☺	気付いたら、すぐに行動する ☺☺☺	人間関係は良好である ☺☺☺	自然体験が豊富にある(動植物など) ☺☺☺

3. 調査方法

(1) 対象

短期大学幼児教育学科の女子学生18名

(2) 時期と場所

時期：2014年4月 ～ 2016年12月

場所：短期大学内

(3) 方法

2014年～2016年12月までの期間に抽出した学生18名の回答した「保育学生のための感性

のチェックシート」を使用し、その結果をもとに、それぞれの学生がいったいどのようにポイントしているのかを表に示した。さらに保育者に望まれる感性をどのように育成したら良いかを、わかりやすく理解するために、感性の要素「アンテナ A」「イメージ I」「パフォーマンス P」「性格 C」「経験 E」のポイント数をレーダーグラフに表し、その違いをみながら各学生の感性の表れ方について考察した。グラフにおいては、「アンテナ Antenna」をA、「イメージ Image」をI、「パフォーマンス Performance」をP、「性格 Character」をC、「経験 Experience」をEと表記するものとする。その後、一人一人にインタビューを行い、さらに、学生と触れ合い指導するなかでの保育実践の様子やクラスでの姿、授業参加態度、友人関係、普段の言動およびインタビュー等を通した各自の性格や過去の経験などを参考に考察を深めた。なお、調査においてはその目的を十分に説明し同意を得たうえで行ったものである。

4. 結果と考察

18人の学生の感性のチェックシートを転記して表2のようにまとめると、それぞれに違うことがわかる。一人一人の経験の差、性格の違い、気づきや感情の在り様など、学生が自己をしっかりと見つけながらチェックした内容には、それぞれの個性が感じられる。この一人一人のポイント数をレーダーグラフに表して分析し、学生へのインタビューとともに、教員との日常的な関わりのなかから見た個々の性格や言動、保育実践の様子などを考慮して検討していくと、保育者の資質として捉えた学生の感性の在り方は、おおよそ4つのタイプに分けられるのではないかと考えられる。

表2 学生別のポイント

学生	A アンテナ	I イメージ	P パフォーマンス	C 性格	E 体験
A	5	5	6	6	5
B	12	7	6	12	13
C	6	10	8	9	12
D	13	15	15	15	15
E	13	14	13	14	12
F	7	7	7	11	8
G	5	5	5	5	5
H	6	5	6	8	5
I	10	12	12	10	12
J	7	5	5	7	5
K	7	7	6	9	10
L	5	5	5	5	5
M	12	5	10	9	10
N	5	5	5	8	6
O	13	13	11	8	11
P	13	7	6	10	6
Q	7	14	6	10	12
R	15	15	15	11	14

＜タイプ 1＞ 経験が豊富で、全般的に感性豊かなタイプ

(学生D 学生E)

このタイプには、特別な指導や調整は必要なく、保育実践の練習を積み重ねることで、さらに学生の感性を伸ばせるものと考えられる。このようなタイプは人間関係も良好で、人からアドバイスされたことや指導されたことを素直に聞き入れる学生も多く、経験を積み重ねれば積むほど努力が実りやすく、その成果が得られるため、より実力アップできるような助言をしたり、計画的な実践演習を行うことが望ましい。

しかし、そのなかには、やや思いやりに欠け、自信過剰であるタイプの学生がいることにも注意が必要である。

(学生Q 学生R)

こういった学生は、色々な経験が豊富であるため、実践にも優れているのだが、自分の実践に自信を持っており、他者の意見を軽視する傾向があり、相手の気持ちを思いやることなく、自分の思うままに進めようとするところがある。つまり、思いやりの気持ちといった部分では人の思いを汲み取ろうとせず、やや協調性に欠ける部分があるため、どんなにアイデア豊富で、表現力に優れていても、それが保育の場面では子どもにとって心地良いものにならないことを伝える必要がある。また、こういった学生には、特にグループワーク等の活動において、人の意見や発表をよく聞いたり、他者の良いところを見つけて認めたり、共感するといった経験をさせていくことが、保育者の資質としての望ましい感性に近づけるためには有効であるといえる。

＜タイプ 2＞ 経験が乏しく、全般的に感性が未熟なタイプ

(学生A 学生N)

このタイプでは、これまでの経験の少なさが感性の表出に大きく影響を及ぼしている。そのため、まずは、音楽、造形、身体、言語などに関する様々な経験を積むことが必要である。このような学生には、いわゆる実践の練習を急ぐよりも、とにかくたくさんの経験をさせることが先決であり、経験することでイメージがしやすくなり、気付きも増えていくと思われる。また、経験することによって不安な気持ちや自信のなさも軽減することができ、意欲を育むことも出来る。このタイプには、出来るだけさまざまな体験の機会を与えたい一方で、自身の感性を自覚させながら、具体的な目標を示した実践演習を確実にこなしていくことが、保育者としての感性の向上には効果的である。

＜タイプ 3＞ 経験はほどほどにあるが個人差が激しく、感性が伸びていないタイプ

(学生B 学生F 学生P)

このタイプでは、性格や経験に個人差があるため、アンバランスな感性を持っており、このような学生には個別に細かく対応した指導の計画を立てる必要がある。このタイプは、本来、もっと感性豊かに表現出来る可能性があるのだが、なぜ、それを発揮できないのか、個別に面談するなどして原因を探ったうえで、保育者としての望ましい感性について自覚させる必要がある。そこから、どのような努力をするべきなのか、個別に対応策を検討し、教員とともに自分自身でその原因を解決する方法を見い出していくことが、今後、保育者に望ま

れる感性を発揮するために効果的であると考えられる。それにはまず、教員と学生との信頼関係を築くことも大切である。

＜タイプ 4＞ 性格や感情が強く影響して、感性が変化してしまうタイプ

(学生C 学生I 学生K)

このタイプは、性格的に激しさを持っていたり、逆に自分の気持ちを抑えこむことで表現自体が変化する傾向があり、時として本来の感性を発揮できていない場合がある。

このような学生には、まず、保育者には安定した保育が望まれることを認識させ、保育実践においても同様に、自己の性格等が影響すれば、それが問題となり得ることを伝える必要がある。そのうえで、こういった学生が実践する機会には意識して性格や感情をコントロールすることを何度も積み重ね、安定した表現を成すことが保育者としての感性を調整することにつながることを実感させる。このタイプには、自分の感情や性格を自覚したうえで、コントロールして保育実践をするトレーニングが必要である。

また、学生のなかには人の目や評価を気にし過ぎて、これが実践や表現に影響して感性の在り方に変化が生じる場合もある。

(学生H 学生M 学生O)

このような学生は、ある程度の経験もあり、おおむね人間関係も良好なのだが、とにかく評価や人の目を過度に気にする傾向があり、それが障害となって感性の表出を抑えてしまったり、変化させている可能性がある。まず、こういった学生には、自分が人からどう見られるかを気にして保育を行っているのは、子どもの想像を広げ、感性を育むことは出来ないということを認識させることが重要である。それと同時に、評価を気にする不安な気持ちを軽減し、自信の持てない部分を強化するために繰り返し実践を積み重ねるとともに、教員が良いところを認め賞賛したり、励ましの言葉掛けをすることが、保育者として望ましい感性を形成していくことにつながると思われる。

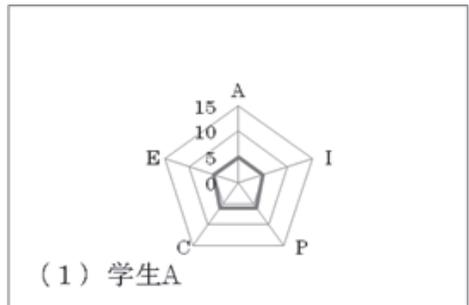
さらに、このタイプのなかには特に人間関係に問題があり、保育者としての感性が形成されにくい学生がいることにも注目したい。

(学生G 学生J 学生L)

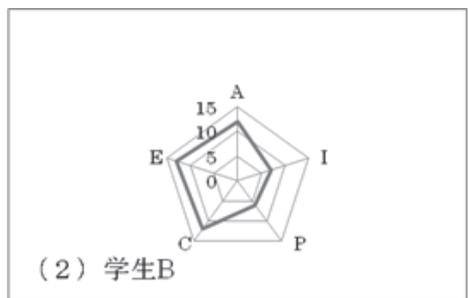
こういった学生は、人と関わることが苦手であったり、友人関係に問題を抱えている場合も多い。日頃から周りとのコミュニケーションが不足しており、グループワークなどにも消極的である。このような場合は、まず、学生に保育者の資質として望ましい感性とは何かを伝え、それをしっかり自覚させることが大切である。そのためには、保育者の使命や責務についても再認識させ、保育の仕事は人と触れ合い関わる力が必要であることを伝えたい。自身の状態を自覚させ、足りない部分や未熟な部分を補い努力していく必要性を説く。こういった学生は、教員とのコミュニケーションも取りにくい状況にあることも多いが、対人恐怖や緊張感を取り除くためにも、積極的に他者と関わる機会を持たせるとともに、ケースによっては、大学の学生相談室のカウンセラー等の職員と連携を取るなどして指導方法を検討することも必要である。また、傷つきやすい性格を持っている学生も多いため、仲間との関係を築くうえでは無理強いすることなく、個々に応じて細かく配慮しながら助言したり指導をすすめていくことが大事である。

＜レーダーグラフから見る学生の感性＞

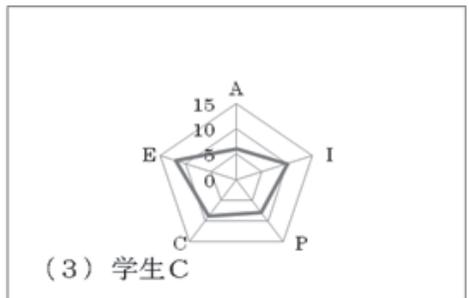
学生Aは、全てのポイントが低い。日常から、興味・関心を示すことがほとんどなく、気付きも少ない方である。また、性格もさめていて愛情や思いやりに欠け、喜怒哀楽が表れにくいように見受けられる。これまでの体験についても、何も長続きすることがなかったようで経験も十分ではない。Aは、性格が感性の要素の全てに大きく影響していることが特徴であり、そのために保育者としての感性は全体的に乏しい。



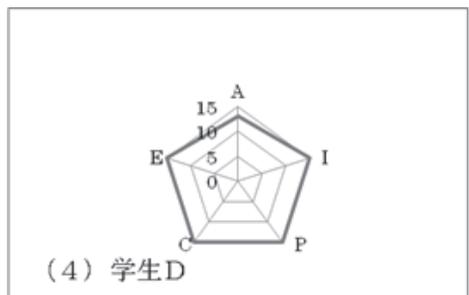
学生Bは、おっとりした性格で友人関係も良好である。優しい性格で思いやりがあり気も利くほうである。しかし、理解力に乏しく、物事を多角的に捉えることができず、想像を広げることが苦手な傾向があり、イメージのポイントが低い。また、不器用なところがあり、多くの経験があったにもかかわらず、上達するものがなく身に付いたものが少ないためにイメージやパフォーマンスのポイントが少ないと考えられ、保育者の感性としてはバランスが悪い。



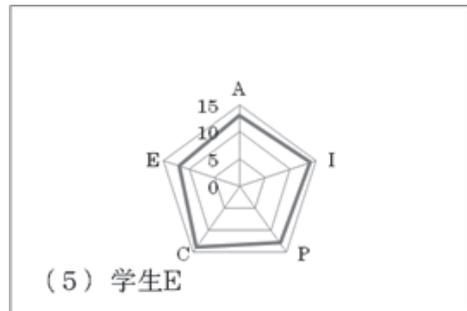
学生Cは、何かを想像する時に自分の感情が入り乱れ、好き嫌いやこだわり、気性の激しさ等が関係してイメージに影響している。また、パフォーマンスのポイントが低いことは、ある程度の経験があるにもかかわらず、表現する際に自分の感情や気分などが障害となって変化が生じていると考えられる。Cは、その性格ゆえに気付きや感性の表出にもむらがあり、調整を要するものである。



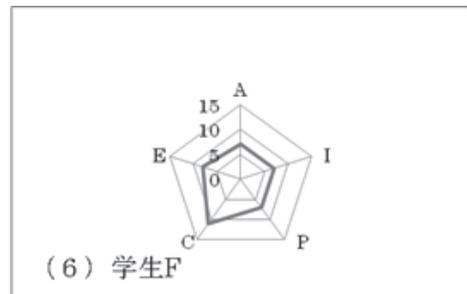
学生Dは、全てのポイントがほぼ満たされている。友人も多く、リーダーシップがとれる学生であり、色々な経験が豊富である。また、何事も楽しむ意欲的な性格で、あらゆる表現力に優れている。Dは、思いやりの気持ちにもあふれており、保育者として望ましい感性を持ち合わせている。



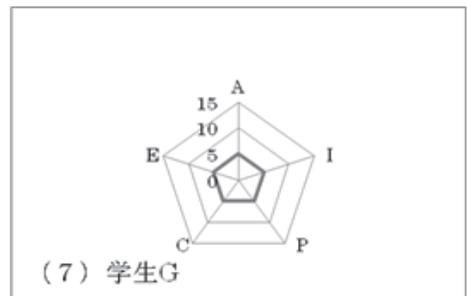
学生Eは、愛情にあふれた優しい性格で、常によく気が付き、気遣いのできる学生である。ピアノを習った経験がないことから、音楽経験のポイントが低い以外は幼い頃からたくさんの絵本を読み聞かせてもらったり、豊富な経験がある。多少緊張する性格もあるが、想像力、表現力も豊かで、Eは、保育者として望ましい感性を持っている。



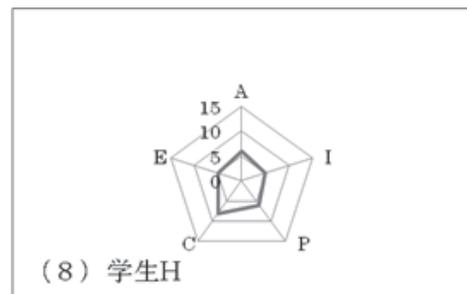
学生Fは、大変真面目であり、明るく友人関係も問題ないのだが、幼少期の経験に偏りがあることから経験のポイントが低い。それが障害となって、表現すること＝感性の表出を変化させている。しかし、Fは、幼少期に一人遊びをする頃から、色々想像して遊びを工夫することが得意でありイメージを膨らませることは好きだという。Fは経験の偏りによって感性の表出がうまく出来ていないケースだと考えられる。



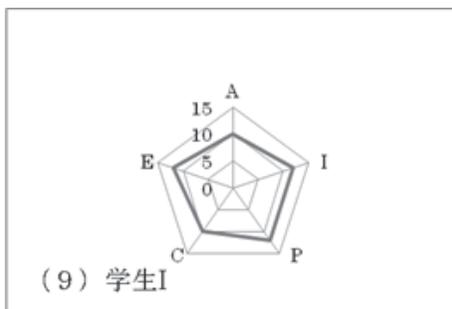
学生Gは、全てのポイントが低い。Gは、不登校を経験しており、人間関係に問題を抱えている。一般的に考えられる経験をしてこなかったようで、集団生活に慣れていない部分もあり、常識やルールが身に付いていないところも見受けられ、人前で普通に話すことも苦手である。Gの保育者の感性は、今後、大幅に調整する必要がある。



学生Hは、人一倍プライドが高い。気が強く負けず嫌いである。これまでの経験が少ないことから想像することも苦手であり、人の目や評価を気にし過ぎて表現が変化する。Hは、イメージやパフォーマンスに自分の感情や気分が強く影響して、感性の表出が変わるタイプであり、保育者としてみると不安定で未熟な感性を持っている。

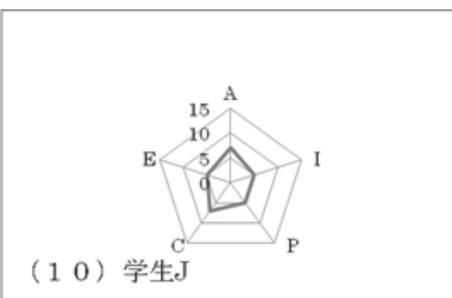


学生Iは細かなことに気付き繊細な性格であるが気分がむらがあり、興味のあることにしか取り組まない。ピアノが未経験である以外には幼少期からの経験が非常に豊富で、人前で表現することに自信を持っている。また、想像力にあふれ、表現することを楽しんでおり、そのためポイントが高い要素も多いが、Iは、激しい気性から気分によって感性が歪んで表出されるため、保育者としては問題のある感性を持っている。



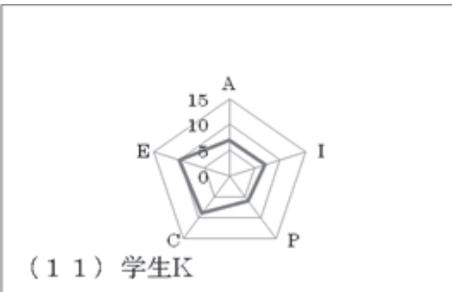
(9) 学生I

学生Jは、真面目でおとなしい性格である。友人も多いほうではなく、対人関係が苦手である。常に緊張が強く、おどおどしていて、人と関わったり、話したりすることに恐怖を覚えるという。Jは傷つきやすく、人の目や言われたことを気にする過敏な性格が感性の形成を妨げている。Jは、普段から笑顔が少なく、感性が表出することを自分で抑えこんでいるようにもみえ、保育者の感性として見ると問題がある。



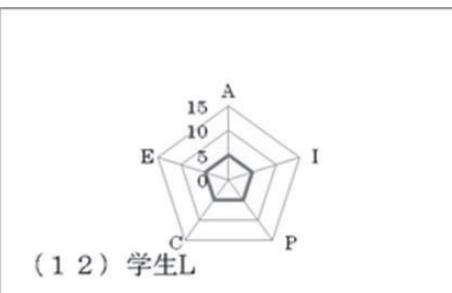
(10) 学生J

学生Kは、非常に几帳面な性格である。器用で色々な習い事等の経験も豊富であるが、受け身的で言われたとおりにこなしてきたタイプで、自ら想像したり創造した経験がないため、ポイントが低いと考えられる。また、Kは評価を気にし過ぎて自分が感じたままに表現することに消極的になっている。子どもの感性を引き出すには、自由に感性を表現し、自分自身も想像を楽しむことが必要であり、望ましい感性としてはKの性格の調整が必要である。



(11) 学生K

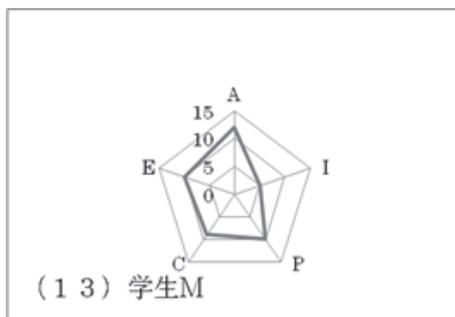
学生Lは、全てのポイントが低い。対人関係が苦手でありクラスの中でも孤立して自分から話しかけたり関わったりしない。理解力も劣り、何に対しても人より後れをとって個人的に指導を要する場面が多い。かつて不登校を経験したことがあり、様々な経験が乏しいことに加え、集団授業についていけないところもあり全ての要素が育っていない。



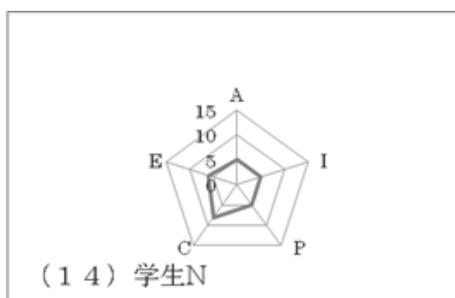
(12) 学生L

Lの保育者としての感性には、全般的に問題があるといえる。

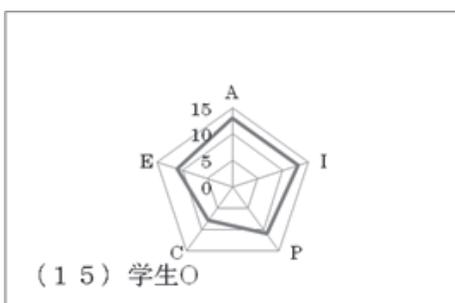
学生Mは、明るく何に対しても積極的に取り組む性格である。笑顔が多く、友人関係にも大きな問題はない。しかし、人の目を気にし過ぎるところがある。特に造形絵画の表現については過去の経験から自信をなくし、表現することに消極的になっている。Mは気づきも多く、ある程度の経験があるにもかかわらず、自由に想像することやイメージを広げることをどこか抑えているようで、保育者としての感性は、まだ未熟であるといえる。



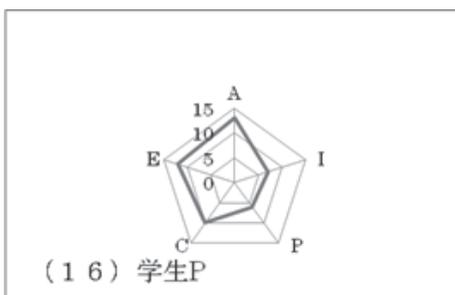
学生Nは、全般的にポイントが低い。クラスでも特別目立つほうではなく、大人しい性格で、人前では特に緊張するタイプである。おっとりした性格だが、気づきも少なく、友人との関わりもあまり多い方ではない。また、習い事や部活動等、過去の経験が少ないため何をすることも自信がなく、それが感性の表出を抑えている。Nの保育者としての感性はまだ未熟であるといえる。



学生Oは、活発な性格で非常に器用である。ピアノ未経験以外は、様々な体験をしてきており、器用で裁縫等は得意である。しかし、成績や評価を気にし過ぎるところがある。イメージやパフォーマンスのポイントも高いが、特に人の目を引こうとすることに必死で、人からどう評価されるかにこだわり、それによって感性の表出が偏っている。保育者には安定した感性の表出が望まれ、Oは性格やこだわりの感情を調整する必要がある。

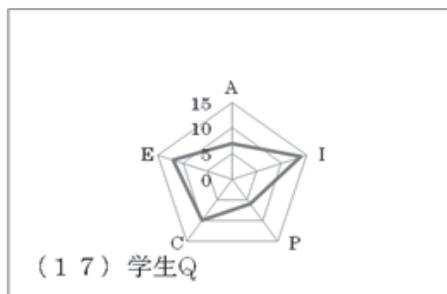


学生Pは、真面目でよく気が付き、友人も多い。しっかりと計画を立て、よく練習もしてくるのだが発想力、表現力に乏しい。常に既存のものを参考にしたり、台本に頼りすぎる傾向にある。Pは性格的にも経験的にもそれほど問題はないが、真面目さゆえに、上手くやろうとして型にはまった表現をし、自由な発想に乏しく、保育者の感性と

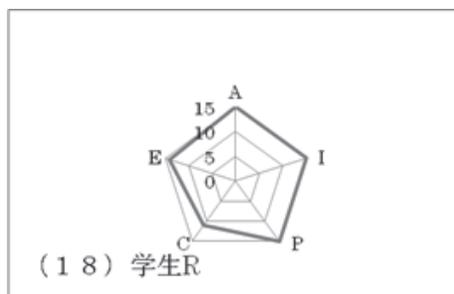


してみると、まだ未熟なものである。

学生Qは、成績上位で、勉強熱心な学生である。生活態度も良く、模範的な学生である。しかし、感情に乏しく、行動にも思いやりを感じられないところがある。気付きやパフォーマンスのポイントが低いのは、人の気持ちに気付いたり、共感することが少ないからだと考えられる。保育者としての表現は自分が完璧だと思うことよりも、相手の立場にたったものでなくてはならない。Qの感性の在り方は調整を要する。



学生Rは特待生である。クラス委員を務め、常に中心的な存在である。様々な経験も豊富で全てのポイントが高い。自分に自信を持っており、表現力にも優れているが、目立つことが好きで自分の意見を押し通し、他人を支配する傾向にある。これは子どもに対して押しつけの保育や指導がなされる危険性がある。Rは優れたパフォーマンス力を持つが、自分の思う通りに誘導してしまう可能性もあり、保育者の感性としては性格の微調整が必要である。



5. まとめ

これまで、色々な保育者に出会ってきた。頭の回転が速く、テキパキと仕事をこなして機転もきくが、気性が激しく、感情の起伏によって子どもへの対応が変わる保育者もいる。自分の思った通りに保育をすすめる傾向があり、例えば、自分の指示通りに製作ができない子どもに対してヒステリックに怒鳴ったり、気分がのらないと、そっけなく絵本を読んだりする保育者もいる。非常に残念なことだがこれは真実だ。純粋な子どもたちが、日々、長時間を一緒に過ごす保育者から受ける影響は大きく、のびのびと育まれるべき子どもたちが、時として委縮している様子を真近にみて私は胸がつぶれる思いがした。子どもの豊かな感性がいかにか育まれるかは、まさに保育者の在り方しだいであると実感する。

本来、全ての保育者には、その資質として、愛情や思いやりにあふれ、豊かな感性が備わっているべきである。したがって、保育者養成に携わるにあたっては、感性豊かな保育者の育成について思考錯誤を繰り返してきた。しかし、いざ、感性の育成について検討するも、それがどのようなものであるか明らかではなかった。また、保育の実践指導には、保育者としての感性を育む一面があるが、集団授業における実践指導の場面では、まだ未熟な学生の実

態があるにもかかわらず、それを改善することができないまま、養成教員として早急に何らかの手立てを打つ必要性を強く感じていた。これが、今回の研究の大きな動機である。

研究をすすめるにあたっては、まず「感性」そのものが曖昧で抽象的なものであるため、これをどう捉えていくかが一番の難題であったが、今回、これまでの研究や養成校での経験を基に保育者として身につけて欲しい感性とは何なのかという「保育者に望まれる感性」をいくつかの要素にまとめることが出来た。「保育者に望まれる感性」とは、色々なことに気付く「アンテナ」、ひらめき想像する力である「イメージ」、保育の実践技術としての実際の行動・表現である「パフォーマンス」の3つの要素を持って指導を検討することができる。また、それらには、学生の「性格」や「経験」が大きく影響するものであり、これらの影響を受けた「感性の表出」を感性として捉え、考慮しながら育成することの重要性に改めて気付かされた。

また、これまで関わってきた多くの学生を通してみえてきたものを、実際の養成現場における学生のケースとして検討することによって、保育者に望まれる感性の視点から、その育成についてより深く考察することが出来た。学生はひとりひとり性格が違い、また人間関係能力等の問題も浮き彫りとなったことで「保育者に望まれる感性」との関連性を見出し、さらに、保育の実践には学生のこれまでの経験が大きく影響していることもわかってきた。

これらのことから「保育者に望まれる感性」とは何かを追究し、学生自らが自分の感性の在り方を目でみてわかりやすく自覚できるよう「保育学生のための感性チェックシート」を作成したことが、今回の一つの成果である。さらに、18名の学生がチェックしたポイントをグラフにあてはめ、それを検討することによって、現在の保育者を目指す学生の感性の在り方として、おおよそ4つのタイプが見いだされ、この4つのタイプが示されたことによって、それぞれの指導についても検討しやすくなった。今後は、この4つのタイプ別に考えられる指導方法を検討し、さらに具体的な指導計画として立案することが課題である。

感性豊かな保育者の育成にあたっては、これまで具体的な方法が見つからず、どこから手をつけて良いものか、実践指導にも行き詰まりを感じていたが、この感性のチェックシートを作成したことで、育成に向けての一步を踏み出すことができた。このシートを実際に活用することによって、保育者の資質として望ましい感性を身に付けた学生を送り出せるものと期待している。今後も、常に感性の育みを意識しながら保育者を養成していきたい。

<参考文献>

- 馬場康宏・宮下恭子・金城悟・武石仁美・杉本亜鈴 2010、「保育者養成校に通う学生の「感性」に関する認識」『東京成徳短期大学紀要』 第43号 p31-36
- 厚生労働省 2010、「保育士の研修体系 保育士の階層別に求められる専門性」 第5回保育士養成課程等検討委員会 資料
- 厚生労働省 2010、「保育士養成課程等の改正について(中間まとめ)案」 第6回保育士養成課程等検討委員会 資料
- 広辞苑第六版 2008、「感性」波書店 p636

保育所保育指針解説書 2008、フレーベル館 pp 218-249

真下あさみ・太田由美子・国藤真理子・早矢仕清貴・星野秀樹・朴賢晶 2011

「保育者を目指す学生の想像力について－絵の刺激による反応分析から－」

『愛知文教女子短期大学研究紀要』 第32号 pp63-76

真下あさみ・太田由美子・国藤真理子・早矢仕清貴・星野秀樹 2011、

「保育者を目指す学生の想像力と保育実践に関する意識について」

『第64回保育学会発表要旨集』 PC-088

研究ノート

オーストラリア医療福祉研修のまとめ 2012年～2016年 学生報告書とアンケート調査の結果から

小川 美樹 有尾 正子 鋤柄 悦子

**Summary of Australia training 2012 ~ 2016
The results of the student report and the questionnaire survey**

Miki Ogawa, Shoko Ario, Etsuko Sukigara

要約

2016年に行われたオーストラリア医療福祉研修の報告をまとめた。また、2012年から2016年の5年間にこの研修に参加した学生の報告書・JOURNAL および、2015年・2016年の2年間の参加者アンケートの結果の報告である。これらの結果から、今後の研修についての取り組みについても考える。

Abstract

This report summarizes the results of the Medical Welfare Study Training conducted in Australia in 2016. We also compiled the reports of the students who participated in the study trainings from 2012 to 2016 as well as the results of questionnaire surveys targeting the participants in 2015 and 2016. On the basis of the results we consider the more effective future training programs as well.

キーワード オーストラリア、海外研修、ホームステイ、アンケート

1. はじめに

本学が参加する日本医療福祉実務教育協会では2002年より、年に1回のオーストラリア研修を実施し、2016年度で16回目を迎えた。研修先である、オーストラリアの Toowoomba (トゥーンバ) にある南クィーンズランド州立大学 University of Southern Queensland (USQ) にて、地元の病院や老人ホーム、幼稚園や保育園、公共施設などを訪問して日本の医療・栄養・

介護・保育などの違いを見学・体験を通じて学ぶ。この研修は、日本医療福祉実務教育協会に加盟している大学に就学している学生が対象であり、滞在はホームステイ形式で、11泊中8泊を、現地の一般家庭にて生活する事で英会話はもちろん家庭料理や家族の在り方、休日の過ごし方も体験することができる。幼稚園・保育園・高齢者ケアセンター・病院給食センター、医療機関など、さまざまな施設を見学し、さらに、地域の高齢者に対する食事宅配ボランティアに参加するなど、オーストラリアの医療・福祉現場から多くの貴重な体験を得ることができる。

オーストラリア研修の報告と参加した学生の声をまとめ、今後の取り組みについても考えていきたい。

2. オーストラリア研修について

2-1. 研修の目的

この研修では、その年の参加学生に合わせたプログラムで、日ごろ学んでいる福祉、医療、幼児教育、食物栄養・ビジネスに関するオーストラリアの現場を体感することに加え、異文化の中での、肌で感じ取る生身の生活感や家庭、家族、子育てそしてお互いの言語を超えたコミュニケーションと理解など多岐にわたる。

幼稚園・保育園・学校・高齢者ケアセンター・病院給食センター、医療機関など、さまざまな施設を見学し、さらに、地域の高齢者に対する食事宅配ボランティアの補助など、オーストラリアの医療・福祉現場から多くの貴重な体験を得ることができるプログラムである。

そして、ホストファミリーや大学スタッフ、現地の新しい友人との新しい出会いから温かい人間関係を築くことができる。

ブリスベン市内観光やコアラ・カンガルーなどオーストラリア特有の動物とのふれあい、アボリジニアートの体験、ショッピングなども楽しむこともできる。

これらの見学や経験を通じ、日本と異なる医療、福祉システム、教育・文化を学ぶことを目的としている。

2-2 滞在地・研修地 (Toowoomba) について

トゥーンバは、オーストラリア キーンズランド州に位置しており、「ガーデンシティ」と呼ばれ、その呼び名の通り、緑の並木や色鮮やかな花々が溢れ、爽やかで明るい雰囲気が満ち溢れている。毎年9月最後の1週間にフラワーカーニバルが開催され、町全体が美しい花で飾られ、このイベントが開催される期間に訪れる人の数は約10万人にも上る。研修期間はその3週間ほど前であるが、花々が咲き始める頃である。

また、教育に力が入れられ、「学園都市」としても有名で、学生にとって最適な学習環境が整えられている。

2-3 University of Southern Queensland (USQ) について

南クイーンズランド州立大学 (University of Southern Queensland、略称: USQ) は、オー

ストラリア、クィーンズランド州トゥーンバに位置する公立大学である。大学および大学院を合わせると100カ国以上から約6,400名の留学生を受け入れており、留学生比率は21.8%(2012年)である。また、オンラインによる遠隔地教育にも力を入れている。

USQは国際的に定評があり、学生は講師や学生仲間と親密なコミュニケーションを図ることのできる環境で学習をしている。質の高い教育とサポートの提供に力を入れており、プログラムとコースが国際的に認定された有数の教育機関である。毎年、28,000人以上もの学生が、オーストラリアまたは世界中100カ国でUSQの教育を受けている。

研修先であるトゥーンバ・キャンパス(Toowoomba campus)は、ブリスベンから西へ約130 kmのトゥーンバに位置し、約4,000名の学生が在籍するメインキャンパスである。キャンパス内にはオーストラリア最大の日本庭園が整備されている。

2-4. 研修内容

(1) ブリスベ市内、コアラ自然動物園 散策

ブリスベン空港にUSQからスタッフの出迎えがあり、バスでブリスベ市内を散策後、Mt.Coothaへ。丘から見渡すブリスベンは自然が多く、広大である。コアラ自然動物園では、コアラはもちろんカンガルーとも触れ合うことができる。

(2) ホームステイ

トゥーンバでの滞在中は2人1家庭でホームステイをする。子どものいる家庭、夫婦だけの家庭などいろいろであるが、オーストラリアの一般家庭の生活様式を肌で感じることができる。最初は、言葉が通じると不安な学生も多いが、伝えたいという想いが伝わり、自然とコミュニケーションが取れるようになり、短い期間ではあるが、特に問題なく生活することができるようになる。

日本に戻ってからも多くの学生がファミリーとFacebookやメール、LINEなどで交流を続けている。

(3) 病院見学 オーストラリアの医療

オーストラリアの医療保障は、医療保険制度ではなく、税財源によるメディケア制度により医療費の一部を負担する仕組みとなっている。また、質の高い医療サービスを求める者は民間保険を活用することができる。1984年に創設されたメディケア制度は、国民全般を対象とした医療保障制度で、国費による医療費の一定割合の支給と、公立病院の入院費用の全額公費負担を2本の柱としている。

医療施設としては、①公的病院(州からの補助を受ける病院。州によって仕組みが異なる)、②私的病院(州からの補助を受けない病院。主として宗教団体や慈善団体によって運営され、小規模のものが多い)等がある。

2015年の病院見学では、多国籍の人達のケアを行う部屋を見学し、資格を持つ専門職のスタッフがそのケアに関するカンファレンスを行っている様子を伺うことができた。また、カルテは電子化されておらず、ファイリングされているカルテを閲覧することができた。

病院の食事サービス、リネンサービスも見学した。病院食は、1日5回、患者に合わせて、提供される。

(4) 施設訪問 オーストラリアの福祉

オーストラリアの介護現場を訪れると必ず「尊厳」という言葉が出てくる。高齢者のケアが充実しており、オーストラリア人は高齢者となっても積極的に様々な活動をしている。

オーストラリアには介護保険制度はなく、高齢者福祉はすべて基礎税でまかなわれており、在宅支援と施設での介護が行われている。

ナーシングホーム（施設）とリタイアーズビジジジを訪問し、入所・入居されている方々との触れ合いでは、暗いイメージはなく、生き生きとされている様子が伝わってきた。

(5) ボランティア活動

食事を届けるボランティア活動に参加した。地域活動に熱心であり、多くの人々がボランティア活動を行っている。学生も多く参加していると伺った。高齢者の方が高齢者をケアするためのボランティアをしているのが特徴的であり、オーストラリアの高齢者ケアを支えている。

折り鶴とメッセージカードを添えて、食事を届け、食事が届くのを心待ちにしている人々に歓迎された。

(6) 保育園や学校の訪問・交流

オーストラリアの学制は、プレスクール・幼稚園（3歳から5歳）、就学前教育（幼稚園・プレパラトリー、5歳）、小学校（6年制）－中学校（4年制）－高校（2年制）、小学校（7年制）－中学校（3年制）－高校（2年制）、高等教育（18歳から）となっている。管轄省庁は、教育訓練省、社会サービス省（保育政策とプログラムを管轄）である。義務教育は、各州・テリトリーによって異なる。多くの場合、6歳から15歳まで（中学校まで）が義務教育であるが、近年教育期間を延長する方向に進んでおり、ほとんどの州・テリトリーでは5歳で就学し、17歳まで就学あるいは職業訓練を受けることが義務付けられている。

また、日本のように統一したカリキュラムではなく、州ごとに異なり、幼稚園や保育園のシステム（年齢など）、呼び方まで州毎にさまざまである。

一般的に、

- ・ Day Care（保育園。幼稚園と一緒にいて生後6ヶ月～6歳まで。）
- ・ Private Kindy（私立幼稚園、3～4歳から）
- ・ Pre School（プリスクール、3～4歳から）

義務教育は5歳から始まる。（「Kindy」（幼稚園）と、州によって少し異なり呼び方もさまざま。）

オーストラリアの幼稚園や保育園の規模は、オーストラリアの規定で1つの園につき90人までと決められている。特に2歳以下は30人まで、2歳から学齢児までは60人までと、細かく決められている。一方、日本には規模に関する規定は特にないため、都市によっては何百

人を受け入れている大きな幼稚園や保育園がある。

このように子どもの数を比較してみると、日本に比べて小規模な園が多いオーストラリアだが、子ども1人あたりに規定されている面積が日本よりも大きいいため、オーストラリアの園では、保育室が広く作られスペースが確保されている。

また、小学校に上がる年齢も、子どもたちの発達度や保護者の意思により決めることも可能で、日本のように、必ずしも同じ年齢の子どもが一斉に入学するとは限らない。保護者に選択肢があることも、オーストラリアの特徴である。

オーストラリアの保育スタイルは、子どもたちが各々自分で好きな遊びを選んで行うというスタイルになっている。一見、皆好き勝手に遊んでいるように見えるが、実は事前に保育士が子どもたち1人ひとりをじっくり観察し、それに基づいて個々に合った遊びの計画を立ててコーナー設定をしている。個人の違いや興味を重視して遊びを用意する保育スタイルである。このような保育を可能にするには、子どもに対する保育士の数の違いが大きく関係している。

職員の数は、オーストラリアも日本も2歳以下の子どもに対しては、同じくらいの比率で配置されているが、3歳以上の子どもに対しての比率が上がる。日本では3歳児であれば20人の子どもに対して保育士が1人。4歳児以上は30人の子どもに対して保育士が1人という規定になっているが、オーストラリアでは、3歳児以上は10人の子どもに対して保育士が1人と規定されているため、保育士の数は日本よりも圧倒的に多い。

園を訪問した際に、日本の絵本の紹介、ダンス、折り紙など、子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごした。一斉保育ではなく、子どもたちが自由に好きなことをして遊ぶという保育も体験できた。

(7) オーストラリアの歴史・文化

原住民族からダンスや絵を習うワークショップでは、アボリジニの歴史に触れた。アボリジニが描く絵の意味や実際に描くことで感じることができた。

博物館の見学では、オーストラリアの歴史を知ることができた。

(8) 市役所、図書館、公園、ショッピングセンター 散策

公共の施設や公園、ショッピングセンターなどを訪れ、日常生活を味わうことができた。街中の壁面にはアートが描かれ、コンテストが行われていることやフラワーフェスティバルに向けて、美しく整えられた公園を散策したり、ショッピングを楽しんだ。

2-5. 研修参加者 (2012～2016)

研修の参加者は以下の通りである (表1)。

表 1 研修参加者数

	2012	2013	2014	2015	2016
愛知文教女子短期大学	13	7	11	5	11
和歌山信愛女子短期大学	4	1	-	-	2
山陽女子短期大学	1	-	2	3	1
別府溝部学園短期大学	-	-	-	-	1
合計	18	8	13	8	15

3. 2016オーストラリア研修

3-1 2016 Program

以下の Program が研修事前に USQ から届いた (表 2)。この Program にホストファミリーのデータも同封されてくるため、家族構成などを参考におみやげ等を準備し、事前にメールを送り、ホストファミリーとのやり取りが始まる。

表 2 2016 Program

ABC Medical/Welfare Training Program 28th August 6th September 2016 Teacher - Elisabetta

Hour	Sunday 28 th August	Monday 29 th August	Tuesday 30 th August	Wednesday 31 st August	Thursday 1 st September	Friday 2 nd September	Saturday 3 rd September	Monday 5 th September
9.00 ~ 10.30am	10.35am students arrive Singapore Airline (SQ255)	Campus Tour ESL Homestay Vocabulary	Orientation to Indigenous Culture	Short briefing & preparation for Northridge Salem	9.00 - 11.00am Country Garden 52 Drayton Rd	Short briefing for Meals and Wheels	9.00am Families drop students at Farmers Market @ Cobb & Co	7.15am Host families drop off at USQ Japanese Gardens
10.30 ~ 11am	USQ staff to meet students in Brisbane Airport		Morning Tea	レクリエーション				7.30am Depart USQ for Gold Coast
11am - 12.30pm	Depart for Lone Pine Koala Sanctuary Transfer to Toowoomba	Campus Tour ESL Homestay Vocabulary + Preparation for Fairholme visit	Indigenous Dance Workshop	Visit Northridge Salem (Nursing home) 宿舎	11.20 - 1.15pm Visit to Drayton Villas with lunch Interaction with residents	Meals on Wheels	Museum - then Grand Central: Free time for shopping / visiting the city	10.00am - 5pm free time to visit the beach & go shopping
12.30 ~ 1.30		Lunch at USQ	Visit Home Grown Café & Lunch at 1pm	Lunch at USQ	Retirement	Lunch at USQ	2.00pm Families to collect students from meeting place	5pm check in to Hotel free time for dinner (choose and buy ourselves) Kate
1.30-3.00	3.30pm Welcome Alison Dickson theatre Students leave with homestay families	Visit Fairholme College (Visit to Kitchen and Preschool) 1.30 - 3pm	2pm - (Organic products)	Short briefing for Country garden @ USQ ESL 7:15	City Hall visit (Jane Morey) & Street art	Preparation for Farewell lunch	Sunday 4 th September Presentation of certificate 11.45am Farewell Lunch	Tuesday 6 th September Depart for Brisbane airport @ 6.00am 9.10am (SQ256)
Transport		3pm Depart for homestay	3pm Depart for Homestay	3pm Depart for Homestay	3pm Depart for Homestay	3pm Depart for Homestay		

3-2 2016オーストラリア医療福祉研修 報告

日程 2016年8月27日 (土) ~ 9月7日 (水)

参加者 山陽女子短期大学 学生 1名
 和歌山信愛女子短期大学 学生 2名
 別府溝部学園短期大学 学生 1名
 愛知文教女子短期大学 学生 11名 教員 1名 計16名

主催 日本医療福祉実務教育協会



写真1 USQ 正門

2016年の研修内容は表3の通りである。

表3 研修内容

8/27 (土)	8:30 10:30 16:20 00:45	中部国際空港集合 (福岡国際空港、関西国際空港) 搭乗、出国手続き シンガポール航空にてシンガポールへ チャンギ国際空港 到着。他大学の学生と合流。フリータイム (両替、ショッピング) シンガポール航空 (SQ255便) にてオーストラリアへ出発
8/28 (日)	10:35 11:30 10:30 15:00 16:00	オーストラリア ブリスベン国際空港到着 USQ から Kate が空港へ出迎え。バスで Mt. Cootha へ 展望台からブリスベン市内展望 Lone Pine Koala Sanctuary 園内散策、コアラと写真撮影、ランチ。 University of Southern Queensland (USQ) 到着 Alison Diskson theatre USQ 内の劇場にて、歓迎の催しをしていただき、ホストファミリーと対面後、ファミリーといっしょに各家庭へ
8/29 (月)	9:00 10:30 13:30 15:00	各ファミリーに送っていただき、USQ 集合 ELS オリエンテーション、ホームステイ先での注意事項、ホームワークの確認 午後に見学をする Fairholme について、モーニングティー 学内ツアー、USQ ゲート前にて集合写真撮影 (写真1)、ランチ Fairholme College(Preschool) 学内の見学、子ども達といっしょに歌、折り紙、絵本 バスで帰宅
8/30 (火)	9:00 10:30 12:30 15:00	オリエンテーション Indigenous Culture について モーニングティー IndigenousDance、Workshop 中京大学の学生といっしょに Grown Cafe でランチ、Organic についてお話を伺う バスで帰宅
8/31 (水)	9:00 12:30 13:30 15:00	オリエンテーション、Northridge Salem について Northridge Salem (Nursing home) 訪問 USQ でランチ ELS、Country garden について バスで帰宅
9/1 (木)	9:00 11:30 13:30 15:00	Country Garden 訪問、モンテッソーリ教育、パズル、絵本、ダンス、キッチンの見学 DraytonVillas 訪問、ランチ City Hall、Street art 見学 ホームステイ先へ帰宅
9/2 (金)	9:00 11:00 14:00 15:00	Meals Wheels について Meals Wheels 訪問、ボランティア ランチ (ホストファミリーから) Farewell Lunch の練習、役割 (MC、スピーチ) 他 ホームステイ先へ帰宅

9/3 (土)	9:00 14:00	Farmers Market フリータイム、Queens Park 散策 ファミリーと過ごす休日、帰宅
9/4 (日)	11:45 14:00	Farewell Lunch (Concannon Dinnig Hall) ランチ、歌とダンス披露 Presentation of certificate 研修修了証書授与 ファミリーと過ごす休日
9/5 (月)	7:15 7:30 10:00 15:00	USQ (Japanese Gardens 前) 集合 ホストファミリーとお別れ Gold Coast へ出発 Gold Coast 到着 フリータイム ランチ ホテルにチェックイン (Hotel Grand CHANCELLOR) フリータイム
9/6 (火)	5:10 9:10 15:30 17:00	ロビーに集合、朝食、チェックアウト、ブリスベン国際空港へ出発 ブリスベン国際空港到着 搭乗、出国手続き シンガポール航空にてシンガポールへ出発 シンガポール チャンギ国際空港到着 シンガポール観光 (バスツアー) フリータイム (ショッピング、休息)
9/7 (水)	1:20 9:05 10:30	シンガポール航空にて 中部国際空港・福岡空港へ出発 中部国際空港へ到着 入国手続き 各自解散

4. アンケート

4-1. 対象者

2015年参加者 8名、2016年参加者 15名

4-2. アンケート実施

調査期間：2017年4月13日～22日 (10日間)

調査方法：Web でのアンケート (図1)

アンケートツクレール活用

アンケートツクレールで作成したアンケートの URL を2015、2016年のオーストラリア参加者グループ LINE に添付し、依頼した。

2016 オーストラリア研修についてのアンケート <http://enq-maker.com/eGfDMMj>

2015 オーストラリア研修についてのアンケート <http://enq-maker.com/eHSuC2m>



図1 Web アンケート画面

4-3 アンケート結果

2015年参加者 5名、2016年参加者 13名。計18名から回答を得た。

問1～7 USQ でのプログラムについて聞かせてください。※必須の結果を次の表にまとめた(表4)。

上段	2015参加者 (人)
中段	2016参加者 (人)
下段	2015、2016参加者合計 (%) パーセントで表示

問7は2015、2016 (塗りつぶし) 別

表4 アンケート結果(問1～7)

	大変よかった	よかった	ふつう	あまりよくない	よくない
問1 USQ でのプログラムについて聞かせてください。 「English Class レッスン」はどうでしたか?	2 4 33	2 8 56	1 1 11		
問2 USQ でのプログラムについて聞かせてください。 「English Class ホームワーク」はどうでしたか?	2 4 33	2 6 44	1 3 22		
問3 USQ でのプログラムについて聞かせてください。 「Fairholme College、Country Garden (幼稚園・保育園訪問)」はどうでしたか?	5 9 78	4 22			
問4 USQ でのプログラムについて聞かせてください。 「Northridge Salem (Nursing Home)、Drayton Villas (Retirement Village) (施設、リタイアーズビレッジ訪問)」はどうでしたか?	4 9 72	1 3 22	1 6		
問5 USQ でのプログラムについて聞かせてください。 「Meals on Wheels (宅配ボランティア)」はどうでしたか?	5 7 67	5 28	1 6		
問6 USQ でのプログラムについて聞かせてください。 「Toowoomba base Hospital (病院)」はどうでしたか?	4 80	1 20			
問6 USQ でのプログラムについて聞かせてください。 「Indigenous Workshop (インディアンのワークショップ)」はどうでしたか?	5 38	8 62			
問7 USQ でのプログラムについて聞かせてください。 バスで Wray Organic, Coles, Grand Central の見学はどうでしたか?	3 60	2 40			
問7 USQ でのプログラムについて聞かせてください。 「Home Grown Caféカフェ (自然食)、City Hall、市役所、Farmer's Market 朝市、公園、市内散策」はどうでしたか?	7 54	6 46			

問8～11 研修のプログラムについて聞かせてください。※必須の結果を次の表にまとめた(表5)。

2015、2016 (塗りつぶし) 別

表5 アンケート結果 (問8～11)

	大変よかったです	よかったです	ふつう	あまりよくない	よくない
問8 研修のプログラムについて聞かせてください。 「City Cat フェリーでブリスベンを川から見学」はどうでしたか？	5 100				
問8 研修のプログラムについて聞かせてください。 「コアラ自然動物園」はどうでしたか？	9 70	4 30			
問9 研修のプログラムについて聞かせてください。 「コアラ自然動物園」はどうでしたか？	5 100				
問9 研修のプログラムについて聞かせてください。 「ホストファミリーと過ごす休日」はどうでしたか？	8 62	3 23	2 15		
問10 研修のプログラムについて聞かせてください。 「ホストファミリーと過ごす休日」はどうでしたか？	3 60	2 40			
問10 研修のプログラムについて聞かせてください。 「ゴールドコースト散策」はどうでしたか？	11 85	2 15			
問11 研修のプログラムについて聞かせてください。 「ゴールドコースト散策」はどうでしたか？	5 100				
問11 研修のプログラムについて聞かせてください。 「シンガポール バスツアー」はどうでしたか？	6 46	3 23	3 23	1 8	

問12 プログラムの中で一番よかったものは何ですか？

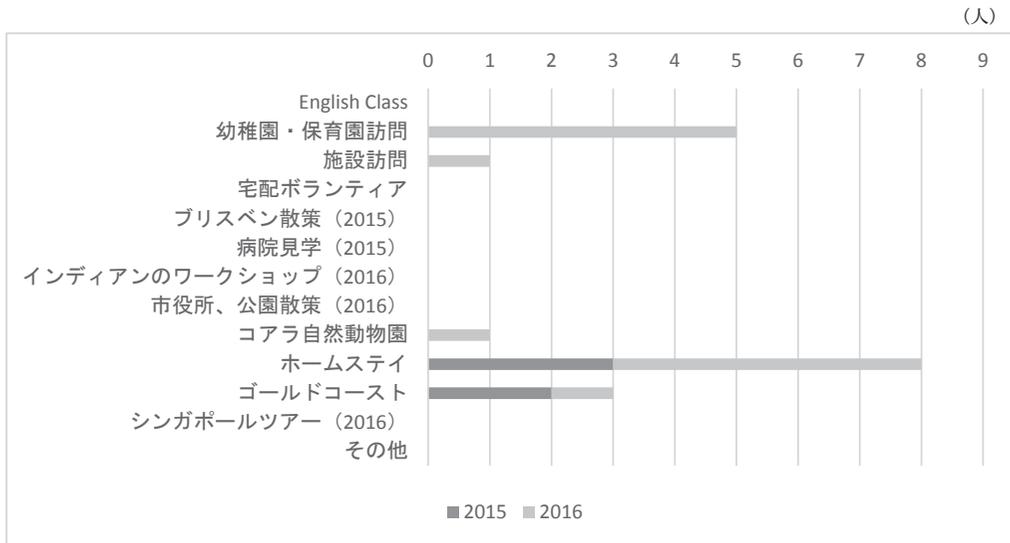


図2 問12 アンケート結果

問13 プログラムの中で一番よくなかったものは何ですか？

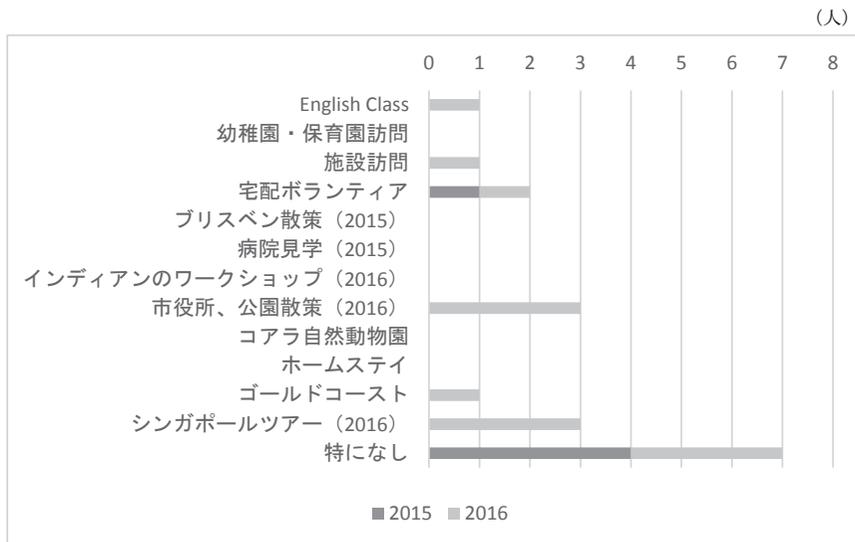


図3 問13 アンケート結果

問14 事前学習・事後学習（レポート作成・発表）はどうでしたか？

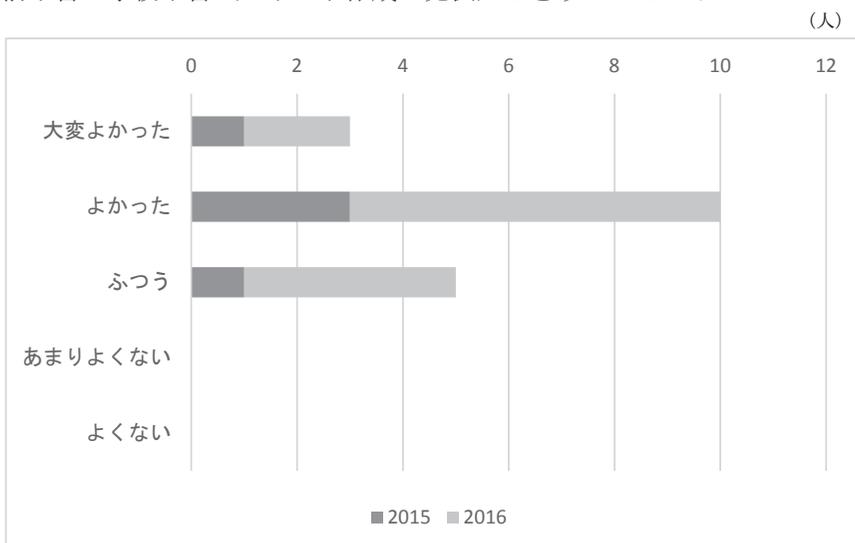


図4 問14 アンケート結果

問15 オーストラリア研修に参加した目的は何ですか？（複数回答可）

(人)

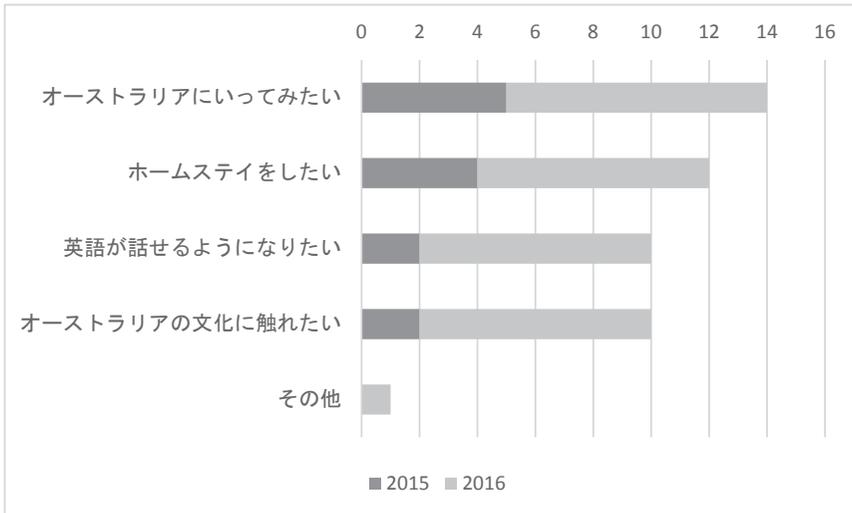


図5 問15 アンケート結果

問16 何か困ったことはありましたか？何かしてほしいサポートはありましたか？

- ・もう少し日常英会話を事前学習で勉強したかったです。
- ・特になかった。
- ・ホームステイ先によって、休日の過ごし方に大きな違いがあった。
- ・想像以上に寒くて、現地で購入することになった。
- ・私の勉強不足で伝えたい事がなかなか通じず聞き取れない時があった。
- ・出発前の手続きの仕方がよく分からなくて困った。
- ・語学力がなかったためホストファミリーとの間に誤解を招いてしまった。その後、話し合いをもち相手の感情を理解したり、気持ちを伝えることの難しさを痛感した。
- ・よく使う英語例文、単語レッスンを重点的にして欲しかった。
- ・もう少し、英語の事前授業があってもいいなって思いました。

問17 オーストラリアに行く前と後で何か変化はありましたか？

- ・海外の幼児教育に触れられたことで、日本との違いを比べることができた。
- ・もっと海外に行きたい！と思うようになった。
- ・英語がもっと好きになったし、色々な国に行きたいと思いました。
- ・想像以上に楽しくて、日本では出来ない体験をたくさんすることができて良かった！多くの出会いもあり、一生の宝物になった。他の国にも興味をもった。
- ・行く前もとても楽しみでしたが、その期待以上に楽しくて、海外にまた行こうと決心しました。
- ・英語は思ったより話せなくても大丈夫だと分かった。
- ・オーストラリアは自然と伝統と自国をとても大事にしている国だと分かった。
- ・団体行動が苦手だったけど、団体行動にしかない楽しみを今回味わえたので、またみんな

で行きたいと思った。行く前の話し合いの大事さも分かった。

- ・ オーストラリアの方は人種差別などなくみんな優しく温かい方達が多く笑顔で接してくださって、私も日本に外国の方が来た時は笑顔で接しようと思いました。
- ・ 自信がついた。家族っていいなと思えるようになった。
- ・ オーストラリアは道や自然、建物や人、全てが大きくて価値観が変わった。
- ・ だいぶあります。行く前よりも、この研修を通して、オーストラリアの方々のお話はもちろん、一緒に行った仲間からの話、ともこ先生からの話など色々な人から聞いた「人生の生き方」が自分の視野をととも広げてくれた気がします。そんな考え方があるのか、こんな素敵な場所があるのか。と色々新たな発見がありました。それによって今後何か困難があった時に乗り越えられる気がします。また、行動する力をアップさせてくれた気がします。行くか行かないか悩んでムズムズしていたけれど行ったらととも素敵な経験ができたので、様々なことに挑戦することへの後押しになるような研修でした。
- ・ 英語が少し聞き取れるようになりました。
- ・ 心の余裕ができた気がする。
- ・ オーストラリアで出会った人たちの写真を見て思い出し、頑張ろうって思えたりした。
- ・ 英語に対する姿勢
- ・ もっと、他の国のことも知って自分の人生にいかすべきだと思いました。また、英語をもっと話せたらという思いが強くなりました。
- ・ 自然と会話の中で英語がでるようになった。
- ・ 英語の意味の使い分けを知ることができた。

問18 ホームステイはどうでしたか？

- ・ ホームステイ先の家族はととも優しくフレンドリーだったのでありがたかった。日常生活で役立つ英語をもっと学習していれば、よりコミュニケーションがとれたかなと思う。
- ・ 言葉が通じるか不安でしたが、翻訳機や辞書があるのでコミュニケーションは割と大丈夫でした。もっと日本のこと、自分の地元のことなどを調べて行って、伝えてあげたかったです。
- ・ 初めてのホームステイで不安もあったが、全てにおいて優しく接して下さったホームステイファミリー。本当に感謝しているし、今でも連絡をとっている。
- ・ 時間がある時はお買い物に連れていってくれたり、ピクニックへ行った。
- ・ 休日もっと外出したかった。
- ・ 夜空を見に連れていってもらったことが今でも忘れられません。あったばかりの私たちのことを最後まで気にかけて、毎日ごはんも作ってくれて、大事にしてくれた気持ちが嬉しくて、自分がかげがえのない存在だと教えてもらったような気がします。しかし、英語はうまく話せないし、感謝の言葉も全部伝えきれないし、後悔も多いです。
- ・ ととも仲の良い家族で温かく迎えてくださり、貴重な体験もさせて頂き何より毎日が楽しかったです。夕飯の時その日1日の出来事について家族一人一人が話し合いコミュニケーションを取っていて笑顔が溢れていて、素敵なファミリーでした。こんな家族になりたいと思いました。ファミリーに出会えて良かったです。

- ・ もう少し英語が喋れたら楽しかったと思う
- ・ 家族がとても暖かく、ずっとここに居たいと思った。街の歴史や、家族の中で昔起こった面白い事件など、こちらが話せなくても多くを話しかけてくれてとても嬉しかった。最後の方はこちらも声に出して話せるようになってきて長い期間行きたかったと思った。
- ・ 慣れるまでは、「外国の方」というのが全員同じように見えていましたが、1人1人意見を持ち、時々困難はありましたがとてもとてもいい経験でした。家族が増えた気分です。いまだに Skype で連絡を取ってくださるのでとても心の支えというか拠り所です。
- ・ 最初は英語わからないし、緊張しかなかったけど、家族のみんなが暖かく迎え入れてくれて、私たちに話してくれる時はゆっくり聞き取りやすいようにはなしてくれました。
- ・ 楽しかった。夢のような世界だった。ホストファミリーとの会話もホストファミリーと過ごした時間もかけがえのない思い出。
- ・ もっと英語の勉強が必要だと感じた。
- ・ もてなされるだけではなく、この家でこの家族に何ができるか考えてくるべきでした。結構、後悔が多いです。
- ・ 初めは緊張して早く日本に帰りたと思っていたけど、日を重ねるごとに帰りたくなかったほど楽しかった。
- ・ いろんな場所に連れていってもらったり、ご飯のときのトークや英語で観る映画や食べ物などの違いなど発見できてよかった。

問19 このプログラムを友達にもすすめたいですか？※必須

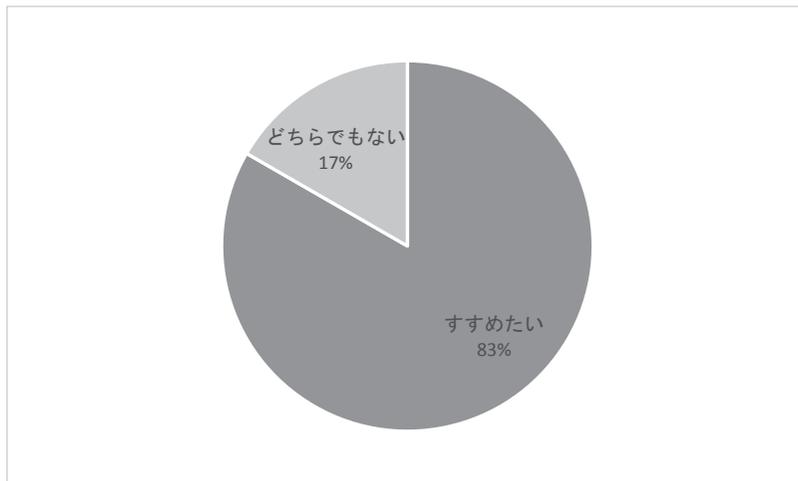


図6 問19 アンケート結果

問20 何かご意見がありましたら、お聞かせください。

- ・ 本当に忘れられない経験ができてよかった。
- ・ 機会があったらまた行きたいと思えた。
- ・ 学校から1人で少し不安でしたが、日頃出来ない貴重な体験などする事ができ、素敵なファ

ミリーにも出会えオーストラリア研修に参加してよかったです。行こうか迷っている人がいたらぜひ参加してほしいです。

- ・ とても素晴らしいプログラムだと思いました。もっと多くの方々に知って欲しいと思いました。
- ・ ゴールドコーストの朝日が見たかった…。
- ・ 今年度は昨年度とは違う場所へも行ってみたい。
- ・ シンガポールのマーライオンは一度見てみたいと思っていたので、それが叶ってよかった。でも少しの時間でいいかなと思った。
- ・ ツアーとか研修も凄くいいと思いましたが、自分がいきたい場所に行けるように自分で組んでもいいなって思いました。

アンケートの結果から、学生の満足度が伺える。問1～11までのプログラムについての質問は、ほとんどが「大変よかった」、「よかった」と答えている。

問12の、一番よかったプログラムはやはり、「ホームステイ」という回答であった。パッケージの旅行の場合では体験することのできない家庭での滞在、ホストファミリーとの触れ合いは貴重な体験である。問13のよくなかったプログラムは、自分の学びから興味関心の低いものを選んでいく傾向があった。問14は、事前学習は思うように時間が取れない中、集まる機会を持ち、準備をすすめた。事後学習はレポートの作成、発表の準備などそれぞれがしっかり取り組むことができた。事前学習については、英会話などにも取り組んでいきたい。問15は参加の目的として複数回答とし、それぞれの目的で研修に参加していることがわかった。問16～問18の自由記述では、率直な感想・意見を聞くことができた。

5. 報告書の作成

2012年から「オーストラリア海外研修レポート」として、参加者の氏名、研修報告、学生のレポートを冊子にまとめた（写真2）。学生のレポートはA4用紙2枚以上とし、PC作成でも、手書き作成でも可とし、9月末をめどに提出させた。

ファミリーとの写真やオーストラリアの風景の写真など、印象に残った写真とともにメッセージが書かれ、研修の記録として全員に配布した。



写真2 報告書

6. JOURNAL (2012～2015)

研修中の経験や印象に残ったこと、感想などを毎日、記録をするものである（写真3、4）。わからなかったこと、不思議に思ったこと、もっと知りたいことなども書かれている。

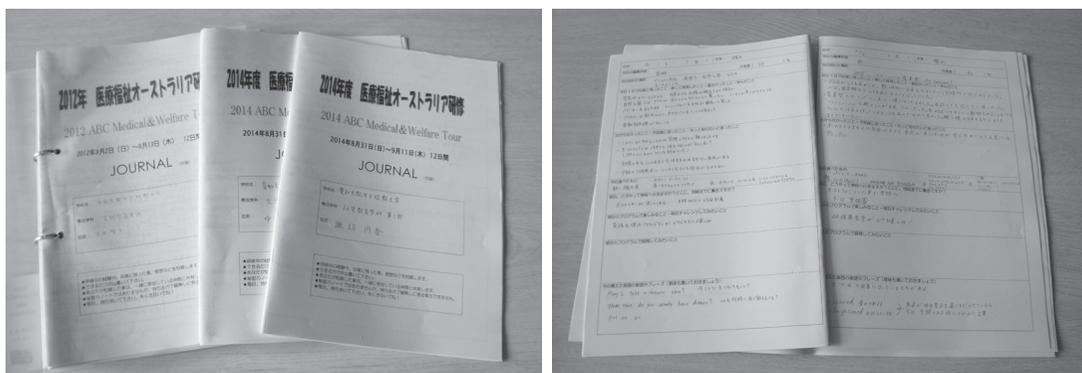


写真3、4 ジャーナル

帰国後、さくら旅行社に提出し、後日、本人の手元に返却した。

振り返ると日々の様子がよくわかり、最初の不安な心境から、ファミリーとのかかわりが深くなっていくことを伺い知ることができた。

7. 考察

すべての研修を終えた学生は、USQ から修了証書が授与された。様々な研修内容から、それぞれが学んでいる福祉、医療、ビジネス、幼児教育、食物栄養に関するオーストラリアの現場を体感することができた。日本との違いも感じることができたと考えられる。異文化に触れて生活することで、ホストファミリーとの関わりや言語を超えたコミュニケーションと理解なども学ぶことができた。

この研修に参加した学生たちにとって、オーストラリアで過ごした時間は、忘れることのできない素晴らしい経験になったようである。5年間の参加者の報告書からも、参加してよかったと書かれている。ホームステイの異文化体験や専門分野に関連する体験研修が、英語研修よりも学生たちにとって良い経験であったと答えている。

アンケート調査の回答から、事前準備、研修では、英語のコミュニケーションについて、力を入れる必要がある。限られた時間の中で、学生自らが、積極的に学ぶ姿勢を持つことが大切だと考える。言葉だけでなく、オーストラリアについても事前に調べていくと、もっと興味深く参加できるのではと考える。また、ホストファミリーとも早期からメールなどで情報交換を行い準備をすすめる必要もある。

報告書をまとめることや大学祭での報告は、オーストラリアでの研修を振り返るととてもいい機会であった。

また、現在続けているホストファミリーとの関りもずっと続けて欲しい。

4月には、本学にUSQからKate (ELCP Coordinator) が来学し、プログラムやオーストラリア、タウンバ、ホストファミリーについて、話していただく機会があり、2015年、2016年に参加した学生と日本で再会し、交流することができた。この研修プログラムを充実させ、今後も交流を深めていきたい。

参考文献

- ・ 松田康子「短期海外研修の成果と意義 - 学生の報告書とアンケート調査の結果から -」
『名古屋文理大学紀要』2012年第12号
- ・ オーストラリアにおける幼児教育と保育 <http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/31.html>
- ・ オーストラリアの基礎知識 <http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/90.html>
- ・ the University of Southern Queensland <https://www.usq.edu.au/>
- ・ Mirambeena Children's Centre. <http://www.mirambeenachildrenscentre.com.au/>
- ・ Queensland Health
<https://www.health.qld.gov.au/services/darlingdowns/ddowns-toowoomba-hs>
- ・ Drayton Villas.
<http://retireaustralia.com.au/our-communities/draytonvillas/>
- ・ Fairholme College
<http://www.fairholme.qld.edu.au/>
- ・ Toowoomba Regional Council
<http://www.tr.qld.gov.au/>
- ・ Meals on Wheels <http://mealsonwheels.org.au/>
- ・ Northridge Salem Nursing Home <https://www.agedcareguide.com.au/northridge-salem>
- ・ 日本医療福祉実務教育協会オーストラリア医療福祉海外研修
<https://abc-medicalprogram.jimdo.com/>

研究ノート

入学前の思いと養成校で学ぶ中での保育者に対する 認識の違い

— 幼児教育学科の卒業学年へのアンケート調査から —

祢宜 佐統美^{*1} 服部 紗樹^{*2} 松葉 みちる^{*2}

A Gap between Students' Images of Childcare Workers Before and After Entering Preschool Teacher Training Facilities

— Based on the Results of the Questionnaire Survey Given to Final-year Students —

Satomi Negi, Saki Hattori, Michiru Matsuba

Abstract

The purpose of this study is to investigate the difference of students' images of preschool teachers before entering college and after spending two or three years of college life. We carried out a questionnaire survey targeting 145 students in their final year in July, 2016. The results of the survey unveiled that 'Childcare Practice' was recognized as the most indispensable subject through which they could acquire knowledge about nursing, while 'Music Skills' as the most essential skill they needed to learn. Regarding the knowledge that they could deepen most significantly they mentioned 'Safety Management' and 'the state of understanding of disabled children' was most dramatically improved. These results clearly indicate that students have learned a lot ever since they enter college as first-year students, and therefore they need to acquire wide-ranging knowledge from the very beginning, which helps them overcome various kinds of uneasiness they might feel when they become preschool teachers.

キーワード：保育者、知識、資質、入学前、就職後

*1 愛知文教女子短期大学 幼児教育学科

*2 愛知文教女子短期大学 幼児教育学科第1部2C

I. はじめに

第一生命保険が全国の未就学児及び小学生（1～6年生）1,100人に「大人になったらなりたいもの」についてアンケート調査を行った結果、2016年の女の子の第2位は「保育園・幼稚園の先生」だった¹⁾。1989年から続いているこの調査では、「保育園・幼稚園の先生」が常に上位に入っており、小さい子どもにとって保育園や幼稚園の先生は常に憧れの職業なのである。しかし、現実には低給与と重労働の問題から離職する保育者が多く、保育者数が足りず「保育士不足」と言われるのが現状である。政府は2017年度の予算編成において、保育分野で不足する人材を確保するため、保育士の待遇改善を行うことを方針として掲げ²⁾、東京都でも保育士1人あたり月額平均44,000円の給与補助をする方針を決めた³⁾。

厳しい職場環境であるにもかかわらず、「自分が幼稚園や保育所に行っていた時のやさしかった先生にあこがれて、または、子どもがかわいくて好きだから」⁴⁾ という理由や、中学・高校時代の職場体験で保育者の仕事に関心を持ったから、と様々なきっかけから保育者になりたいという夢を持ち、その実現のために養成校に入学する。夢を抱いて入学するが、過密なカリキュラムや、想像していなかった様々な専門科目を学び、実習で思ったように動けなかったりする中で、保育者になる厳しさを感じる。中には、保育者としての進路を変更したり資格を断念したりする学生も出てきてしまう。

保育士不足の現在、夢を持って保育者に向かっている学生が、卒業後も長く保育者として活躍できるようになるためにも、養成校に入学する前の意識が、様々な勉強を重ねる中でどのように変化するかを明らかにする必要があると考える。

II. 研究目的

本研究の目的は、保育者養成校の入学前と、養成校の卒業学年である現在における、保育者に対する認識の違いを明らかにすることである。

III. 研究方法

1. 対象者及び方法

対象者は、保育者養成校であるA女子短期大学幼児教育学科の卒業学年である学生、第1部83名、第3部62名の合計145名である。尚、第1部は2年間で幼稚園教諭・保育士の資格を取得するもので、第3部は半日の授業体制で3年間で幼稚園教諭・保育士の資格を取得するものである。

調査方法は、無記名式の質問紙調査を行った。質問項目は、「児童福祉」「子どもの人権」「教育」「保育実技」「食育」「保護者支援」「安全管理」「障がい児保育」等のように知識に関する13項目と、「ピアノを初めとする楽器や音楽の技術が優れている」「ダンスやリズム遊びなどの身体表現に優れている」「子どもをよく理解している」「クラス行事、園行事などの企画力が備わっている」「新しいことにチャレンジするなど、研究熱心である」「保護者への対

応能力や相談援助の力がある」「保育日誌、育成記録などの文章作成の力がある」等の資質に関する13項目とし、いずれも複数回答とした。

これらの調査項目をそれぞれ、入学前に思った事と、就職してから必要になる事で、4つの設問を設けた。以下はその設問である。1.【短大に入学する前】何を学びたいと思いましたが？（以下：入学前・知識）、2.【短大に入学する前】保育者になるにはどんな資質が必要だと思いましたか？（以下：入学前・資質）、3.【就職してから】保育者にとって役に立つだろうと思うものは何ですか？（以下：就職後・知識）、4.【就職してから】保育者になるにはどんな資質が必要だと思えますか？（以下：就職後・資質）の4つである。

2. 調査期間

2016（平成28）年7月に実施した。

3. 倫理的配慮

調査対象者に対して口頭で、本研究への協力は自由で、調査への参加・不参加により評価等の不利益が生じない事、個人名が特定されない事、学会等で発表することなどを説明し、調査依頼を行った。質問紙提出をもって同意の意思確認を行った。

IV. 結果

1. 入学前・知識

第1位は「保育実技」（21.3%）、第2位が「障がい児保育」（12.9%）、第3位が「保護者支援」（10.3%）であった。

表1 入学前・知識 n = 497

	人数	%
児童福祉	35	7.0
子どもの人権	24	4.8
人間性・倫理観	22	4.4
発達理論	39	7.8
教育	42	8.5
保育実技	106	21.3
障がい児保育	64	12.9
食育	45	9.1
保護者支援	51	10.3
地域の子育て支援	14	2.8
安全管理	18	3.6
衛生管理	15	3.0
健康教育	21	4.2
その他	1	0.2

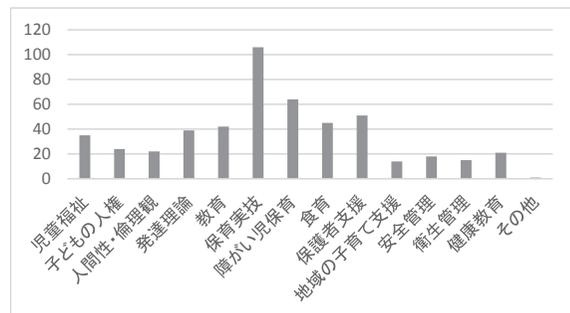


図1 入学前・知識

2. 入学前・資質

第1位は「子どもをよく理解している」(15.0%)、第2位は「ピアノを初めとする楽器や音楽の技術が優れている」(14.0%)、第3位は「絵画や造形表現の指導、壁面構造などの力が優れている」(9.9%)であった。

表2 入学前・資質

n = 808

	人数	%
ピアノを初めとする楽器や音楽の技術が優れている	114	14.0
絵画や造形表現の指導、壁面構造などの力が優れている	80	9.9
ダンスやリズム遊びなどの身体表現に優れている	38	4.7
身体を使った運動遊び、体育指導が得意である	48	5.9
子どもをよく理解している	118	15.0
指導計画などの立案能力が優れている	39	4.8
クラス行事、園行事などの企画力が備わっている	52	6.4
障がい児に対する理解が深い	46	5.7
遊び、レクリエーションの実践力が優れている	67	8.3
新しいことにチャレンジするなど、研究熱心である	38	4.7
安全に対する意識が高い	50	6.2
保護者への対応能力や相談援助の力がある	78	9.7
保育日誌、育成記録などの文章作成の力がある	40	5.0
その他	0	0

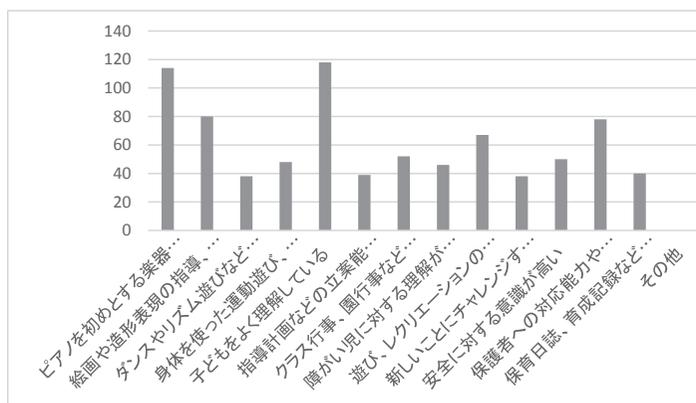


図2 入学前・資質

3. 就職後・知識

第1位は「保育実技」(11.9%)、第2位が「障がい児保育」(11.2%)、第3位が「保護者支援」(10.8%)であった。

表3 就職後・知識 n = 1007

	人数	%
児童福祉	50	5.0
子どもの人権	49	4.9
人間性・倫理観	50	5.0
発達理論	89	8.8
教育	67	6.7
保育実技	120	11.9
障がい児保育	115	11.4
食育	76	7.5
保護者支援	109	10.8
地域の子育て支援	69	6.9
安全管理	90	8.9
衛生管理	61	6.1
健康教育	62	6.2
その他	0	0.0

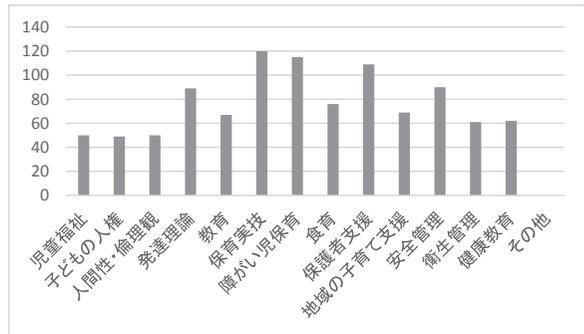


図1 入学前・知識

4. 就職後・資質

第1位は「子どもをよく理解している」(10.7%)、第2位は「保護者への対応能力や相談援助の力がある」(9.3%)、第3位は「ピアノを初めとする楽器や音楽の技術が優れている」(9.0%)であった。

表4 就職後・資質

n = 1234

	人数	%
ピアノを初めとする楽器や音楽の技術が優れている	111	9.0
絵画や造形表現の指導、壁面構造などの力が優れている	86	7.0
ダンスやリズム遊びなどの身体表現に優れている	78	6.3
身体を使った運動遊び、体育指導が得意である	67	5.4
子どもをよく理解している	132	10.7
指導計画などの立案能力が優れている	90	7.3
クラス行事、園行事などの企画力が備わっている	94	7.6
障がい児に対する理解が深い	105	8.5
遊び、レクリエーションの実践力が優れている	89	7.2
新しいことにチャレンジするなど、研究熱心である	79	6.4
安全に対する意識が高い	101	8.2
保護者への対応能力や相談援助の力がある	115	9.3
保育日誌、育成記録などの文章作成の力がある	86	7.0
その他	1	0.1

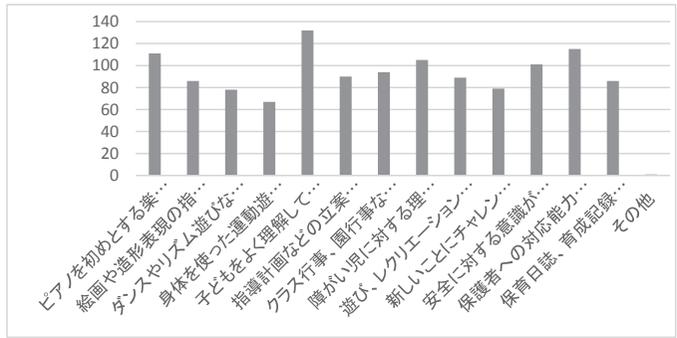


図4 就職後・資質

5. 入学前と就職後の知識の比較

差が大きく出たのは、「安全管理」(72ポイント)、続いて「保護者支援」(58ポイント)、「地域の子育て支援」(55ポイント)であった。反対に差が少なかったのは、「保育実技」(14ポイント)、「児童福祉」(15ポイント)であった。

表5 入学前と就職後の知識の比較

	入学前	就職後	差
児童福祉	35	50	15
子どもの人権	24	49	25
人間性・倫理観	22	50	28
発達理論	39	89	50
教育	42	67	25
保育実技	106	120	14
障がい児保育	64	115	51
食育	45	76	31
保護者支援	51	109	58
地域の子育て支援	14	69	55
安全管理	18	90	72
衛生管理	15	61	46
健康教育	21	62	41
その他	1	0	-1
合計	497	1007	

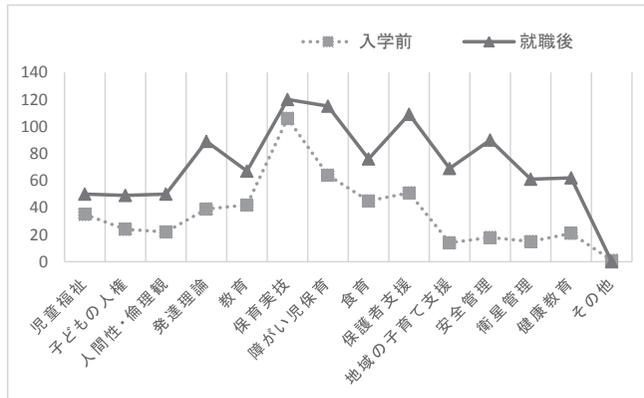


図5 入学前と就職後の知識の比較

6. 入学前と就職後の資質の比較

差が大きく出たのは、「障がい児に対する理解が深い」(59ポイント)で続いて「指導計画などの立案能力が優れている」(51ポイント)、「安全に対する意識が高い」(51ポイント)であった。反対に差が少なかったのは「ピアノを初めとする楽器や音楽の技術が優れている」(-3ポイント)、「絵画や造形表現の指導、壁面構造などの力が優れている」(6ポイント)であった。

表6 入学前と就職後の資質の比較

	入学前	就職後	差
ピアノを初めとする楽器や音楽の技術が優れている	114	111	-3
絵画や造形表現の指導、壁面構造などの力が優れている	80	86	6
ダンスやリズム遊びなどの身体表現に優れている	38	78	40
身体を使った運動遊び、体育指導が得意である	48	67	19
子どもをよく理解している	118	132	14
指導計画などの立案能力が優れている	39	90	51
クラス行事、園行事などの企画力が備わっている	52	94	42
障がい児に対する理解が深い	46	105	59
遊び、レクリエーションの実践力が優れている	67	89	22
新しいことにチャレンジするなど、研究熱心である	38	79	41
安全に対する意識が高い	50	101	51
保護者への対応能力や相談援助の力がある	78	115	37
保育日誌、育成記録などの文章作成の力がある	40	86	46
その他	0	1	1
合計	808	1234	

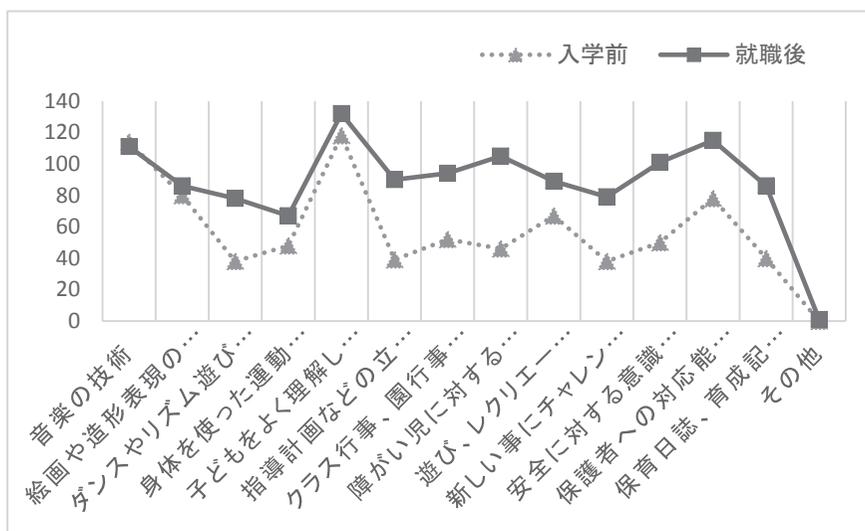


図6 入学前と就職後の資質の比較

V. 考察

1. 保育実技

入学前に学びたい知識、そして就職後役立つ知識は両方とも「保育実技」が一番多かった。また、資質に関しては、入学前・就職後の両方で「ピアノを初めとする楽器や音楽の技術が優れている」が多かった。「保育実技」は、学生自身が小さい頃、保育者から手遊びや絵本などといった様々な保育実技をしてもらったという記憶が強かったり、短大入学前に先輩から、実習などでは子どもの前で保育実技をたくさんするので大切だという話を聞いていたためと考えられる。また、入学後は、保育についての勉強や実習を重ねていくことにより、改めて保育者には保育実技が大切だということを再確認した結果と思われる。

久富⁵⁾は、「保育実技は技術的な何かを単に身につけるのではなく、保育実技によって子どもの生活が潤ったり活気づけられたりするというように、子どもの発達に何らかの援助を与えるものだけが本当の保育実技と呼べる」、と述べている。知識や技術の習得はもちろんであるが、子ども一人一人の気持ちや思いを理解すること、日々の保育や行事などで子どもがどのようにしたら楽しめるかという工夫や、子どもの反応を読み取る力が備わった上での保育実技が、久富の言う本当の保育実技なのであろう。

ハーバード大学の経営学者であるロバートカッツは、管理職に必要な能力として、「テクニカルスキル (業務遂行能力)」、「コンセプチュアルスキル (概念化能力)」、「ヒューマンスキル (対人関係能力)」の3つのスキルを挙げている。小櫃⁶⁾は、この3つのスキルを保育者の資質に置き換えて次のように説明している。「テクニカルスキル」は保育者としての知識と技術、「コンセプチュアルスキル」は保育者の実践を支える概念・考え方・理論など、「ヒューマンスキル」は人と関わる力で、子どもや保護者との良好なコミュニケーションを

図ること、である。保育実技はカツツや小櫃らが述べる「テクニカルスキル」ではあるが、保育実技の実践を支える「コンセプチュアルスキル」や「ヒューマンスキル」も必要なのである。

2. 安全管理

入学前と就職後の知識に関しての項目で差が一番大きかったのは「安全管理」であった。資質に関する項目でも「安全に対する意識が高い」が2番目に差が大きかった。

幼稚園教育要領や保育所保育指針において、安全管理について取り上げられ、子どもの状態理解や事故の予防・対処、交通安全や災害・不審者等の進入など緊急時の対応にも言及している。学生は養成校の講義や学外の実習を経て、子どもが楽しく過ごせるのは保育者が楽しい保育実技をするのはもちろんであるが、安全な環境作りに配慮し、子どもに危険が及ばないように物の配置に気をつけたり、毎日清潔な保育室や園庭を保っているためだと学んでいく。また、乳幼児突然死症候群（SIDS）や園内での事故、食物アレルギーでの事故など保育について学ぶ中で、保育が楽しいだけのものではないことをより理解していくようになっていく。

乳幼児の事故の多くは、事故の主な原因を取り除いたり、注意したり、環境を整備することによって防ぐことが可能である⁷⁾、と言われる。養成校入学前は、学生自身が守られる存在であり、安全について考える事は自らの交通事故や災害等に限られ、「安全管理」という認識までは思ってもいなかったと考えられる。その学生が、保育者という仕事は子どもの尊い命を預かる大きな責任が課せられた仕事で、安全管理を十分に行う事が必要だと理解したという事は、成長した証と言えるのではないだろうか。

3. 障がい児への理解

入学前と就職後の資質の項目で最も大きく差が出たのは、「障がい児に対する理解が深い」であった。近年、障がいの診断がつくことや、診断がなくても支援を必要とする子どもが増えてきている。養成校での学びの中で、障がいのある子どもと接することで障がい児保育に対する関心が高まり、障がい児や発達支援について学ぶことの必要性を感じるようになったためと考えられる。

対人援助に最も必要なことは、「相手をよく知る」ことだと考える。相手のことをよく知らなければ何をしてほしいのか、どうなりたいたいかわからず間違った支援になってしまい、本当に対象者を支援することはできない。障がい児への対応もそうである。まずは、障がいについて理解し、目の前の障がい児を正しく理解することが援助の始まりである。

保育者は、継続的に子どもと接し、その時間は長い。その中で、子どもの障がいに気づきやすく、早期発見が実現できる可能性は高い。早期発見により、早期療育ができ、障がいを克服できるかもしれないし、障がいと向き合うことで上手なつきあい方がわかり生活しやすくなるかもしれない。また、障がいを受容できない保護者の気持ちに寄り添うことで、保護者の精神的なサポートができるかもしれない。本研究の調査結果をみると「知識」の項目の中で「保護者支援」は入学前と就職後の差が2番目に大きかった項目である。保護者から子

どもの発達や障がいに対する不安について相談を受けた時には、傾聴・受容した上で、相手の気持ちに配慮した言葉遣いで適格な対応をしなければならない。そのためには障がいに関する専門知識をしっかりと身につけた上で、前述した「ヒューマンスキル」で対応でき、保護者が安心して子どもを預けられるような信頼関係が築ける保育者を養成する必要がある。

4. 養成校での学び

保育者養成校の入学前と現在における、保育者に対する認識について、その前後で変わらない知識や資質があれば、差が大きいものがあった。入学前と入学後の差に関してマイナス面として捉えるのではなく、入学前は保育者について詳しく知らなかった学生が、養成校で学ぶ中で、様々な知識や経験が増え、保育者に必要なものが理解できたという学びの証であり、成長の証であると考えられる。こうした成長につながる教育を、養成校に入学した早い時期に行い、さらにもうワンステップ、就職後の早期離職の原因となっているリアリティショックへの対応をも行う必要がある。

保育士の離職に関して、就職前の期待と現実とのギャップ（リアリティショック）により早期離職に至る事が問題となっている。厚生労働省の「保育士確保プラン」⁸⁾では、離職防止のため、新人保育士を対象とし、リアリティショックへの対応方法や保護者対応等の業務についての研修の実施や、指定保育士養成施設における就職促進のための取組内容としてリアリティショックに対応するための講座の開講が盛り込まれている。

初年度教育の成果や意義^{9) 10) 11)}に関する報告は多く、新しく大学生活を始めた中で起きるリアリティショックを克服し専門教育へ導入するという大きな役割がある。しかし、短期大学の2年間あるいは3年間という修学年数は瞬く間に過ぎてしまう。初年度に大学生活でのリアリティショックを引きずったままでは専門職としての資格習得に到達することが難しくなるかもしれない。そのため、初年度教育や専門教育を計画的・戦略的に進める必要がある。さらに、卒業時には、保育者として就職する際の不安を軽減できる学びも必要となり、加えて就職後の職場でのリアリティショックに対応するための教育を行う必要がある。初年度から多面的な学びを展開し、卒業までのカリキュラムを充実させ、保育者として活躍できる学生を育てられるような養成校での学びを構築する必要があると考える。

VI. まとめ

保育者に対する認識について、以下のことが明らかになった。

1. 入学前と就職後共に知識に関して多かったのは「保育実技」であった。
2. 入学前と就職後共に資質に関して多かったのは「ピアノを初めとする楽器や音楽の技術が優れている」であった。
3. 入学前と就職後で知識に関して差が大きかったのは「安全管理」であった。
4. 入学前と就職後で資質に関して差が大きかったのは「障がい児に対する理解が深い」であった。

尚、本論文は2016（平成28）年8月30日に行われた子育てシンポジウムの発表に加筆した

ものである。

引用文献

- 1) 第一生命保険株式会社 (2017) 「第28回「大人になったらなりたいもの」アンケート調査結果」 http://www.dai-ichi-life.co.jp/company/news/pdf/2016_072.pdf (2017.3.1閲覧)
- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課 「平成29年度保育対策関係予算概算要求の概要」 <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000135540.pdf> (2017.3.1閲覧)
- 3) 日本経済新聞朝刊 (2017.1.6) 「都、保育士給与補助4.4万円 17年度から月額」
- 4) 中田カヨ子・岡本富郎・相場和子他 (2012) 「保育者になるために 保育の基本と学生生活の過ごし方」 萌文書林, p. 2
- 5) 久富陽子編 (2002) 「実習に行くまえに知っておきたい 保育実技」 萌文書林, p. 8
- 6) 小櫃智子・矢藤誠慈朗編著 (2014) 「これまでの学びと保育者への歩み」 (株) わかば社, p. 125
- 7) 森上史朗・柏女霊峰編 (2014) 「保育養護辞典」 ミネルヴァ書房, p. 261
- 8) 厚生労働省 「保育士確保プラン」 平成27年1月14日
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/administer/setsumeikai/h270123/pdf/s4.pdf>
(2017.3.1閲覧)
- 9) 西村靖史 (2015) 「大学における初年度教育について」 『別府大学紀要』 56, pp. 75-86
- 10) 村越行雄 (2010) 「大学レベルにおける基本的なコミュニケーション能力育成—大学初年度教育としての日本語運用能力育成プログラム」 『コミュニケーション文化』 4, pp. 54-65
- 11) 太田弘一 (2010) 「初年度教育の意義と課題」 『教養と教育』 10, pp. 41-55

研究ノート

保育実習における要指導行動とソーシャルスキル との関連

朴 賢晶 村上 浩美 国藤 真理子
星野 秀樹 玉田 裕人 伊藤 久美子

**The effects of mentoring and social skills on the evaluation of practice teaching
in the case of junior college students in early childhood education course**

**Hyun-jung Park, Hiromi Murakami, Mariko Kunito,
Hideki Hoshino, Hiroto Tamada, Kumiko Ito**

Abstract

The present study investigated the effects of mentoring and social skills on the evaluation of practice teaching after it finished at preschools. A questionnaire survey was administered to 81 junior college students to examine the differences between the highly evaluated group and the lowly evaluated one in practice teaching. The results indicated that the members of the highly evaluated group got higher marks in terms of receiving instructions on ‘the involvement of children and students’ than the lowly evaluated group. Moreover, at continued testing, the members of former group showed higher communication abilities than the latter one. It was revealed in the interview that the members of the former group fully grasped their mentors’ intentions and understood the situation correctly by using higher communication skills.

Key word; 保育実習評価、要指導行動、ソーシャルスキル

【はじめに】

保育者養成校における実習指導は多くの課題を孕んでいる。学生が実習で高く評価されるために、事前事後指導のあり方を模索したり（大杉・山本・田村，2017；小林・大河内・藤原・小原・森・斎藤，2010）、実習に対する学生の不安を検討したり（中山，2016）することによっ

て、実習への動機づけを高め、実習評価を高めることが目的であろう。

保育者養成校における保育・幼児教育実習は、保育現場での子どもや保育士との関わりの場であり、保育士としてのアイデンティティを確立していくための場でもある（社団法人全国保育士養成協議会専門委員会、2007a）。実習での成功体験は、保育者になりたい気持ちをもより強くするだけでなく、保育者としての就職活動への高い動機づけにもつながる。そして、実習は、保育者養成校で習得した教科全体の知識、技能を基礎とするもので、これらを総合的に実践する応用能力を養うためのものであるため（全国保育士養成協議会専門委員会、2007b）、保育者養成校の授業で学んだ知識を現場で確実に実践していくためには、知識をどのように実践への移すことができるかというスキル向上の問題とも関連する。

そこで本研究グループは、実習に対する学生の自己評価と実習園の評価には大きなズレが存在すること（朴・真下・太田・国藤・早矢仕・星野・児玉，2012）や保育実習と幼児教育実習の実習評価には異なる影響因が考えられること（朴・国藤・太田・早矢仕・星野・北村，2012）を検討してきた。これらの結果をふまえて、本研究では、実習園の客観的な評価をもとに幼児教育実習と保育実習別に実習評価に影響するソーシャルスキルを検討する。実習中に受ける「要指導行動」を的確に理解し、自分の実習を良い方向へ絶えず修正していく力を身につけることによって、実習評価が高まることから、要指導行動と園評価との関連を検討することは必要であろう。実習評価と関連する実習生の能力には何があるのだろうか。実習評価に影響する要因を検討することにより、養成校教員全体でできる指導を考えるための基礎資料を提供したい。

調査1¹

【目的】

本研究では、保育実習・幼児教育実習の実習評価と要指導行動、そしてソーシャルスキルとの関係を検討する。

【方法】

保育者養成校で5つの実習を終えた卒業学年81名（女子）を対象とした。質問紙は、「実習に対する園評価」、「要指導行動」（自由記述）、ソーシャルスキル尺度で構成された。「実習に対する園評価」と「要指導行動」は、保育実習（保育園）終了後と幼児教育実習の終了後1週間以内に回答した。

【結果と考察】

実習園の評価により、実習種別高低群に分類した。実習種別に要指導行動の全体件数には差が見られなかった（表1）。しかし、高低群別要指導行動の件数をみると（表2）、保育実習では高群より低群の要指導行動が多く、幼児教育実習では低群より高群の良指導行動が多

¹ 本調査は2013年に日本保育学会で発表したものを修正したものである。

い結果であった。「園児と学生との関係」では、高群が4件（低群18件）の要指導行動があり、「活動内容の理解と遂行」では4件（16件）、「援助方法と技術」では1件（18件）、その他では2件（18件）であった。幼児教育実習では、「園児と学生との関係」では、高群が14件（低群4件）、「活動内容の理解と遂行」では15件（9件）、「援助方法と技術」では30件（9件）、その他では21件（4件）であった。同じ学生が保育・幼児教育実習の要指導行動を回答していることから、保育実習と幼児教育実習での要指導行動の件数の差は実習生の個人差ではなく、実習種別に指導の仕方が異なる可能性が考えられる。幼児教育実習では、「援助方法と技術」についての指導行動が多く、幼稚園は、保育園より援助方法や援助技術が必要とされる保育をしていると思われる。なお、保育実習と幼児教育実習では、対象児の年齢が異なり、要指導行動の内容に差が生まれた可能性も考えられる。保育実習では幼稚園実習で体験できない3歳未満の子どもを担当することを望む学生が多い。担当年齢が低いと各々の発達に合わせた保育が必要になるため、実習種別に異なる実習指導を行うことによって園評価を高めることが可能と考えられる。

園評価の高群のソーシャルスキルを検討した結果、園評価低群と比べ、高群の方が「解読スキル」の得点が高い ($t=2.028, df=49.993, p<.05$) ことが明らかになった (図1)。「解読スキル」は、「表情やしぐさで相手の思っていることがわかる」、「自分の言葉が相手にどのように受け取られたか察しがつく」等、相手の気持ちを察する項目から構成されている。「解読スキル」の高い実習生は、実習園の先生から指導されたことに対して、その状況と指導の目的を的確に理解でき、どのように対処していけばいいのかがよく把握できると思われる。さらに、自分の実習に対して詳細に振り返りができ、自己反省ができることから、園評価が高くなった可能性がある。この結果は、以前の実習の反省を次に反映できた人は実習日誌の記述におけるスキルが高かったとする松寄・三溝・高嶋 (2003) の結果からも裏付けられる。

表1 実習種別の要指導行動の件数 (全体)

	保育実習	幼児教育実習
園児と学生との関係	28件	24件
活動の理解と遂行	30件	32件
援助方法と技術	36件	51件
その他	23件	31件

表2 実習種別の要指導行動の件数 (高低群別)

	保育実習 高 (低)	幼児教育実習 高 (低)
園児と学生との関係	4 (18) 件	14 (4) 件
活動の理解と遂行	4 (16) 件	15 (9) 件
援助方法と技術	1 (18) 件	30 (9) 件
その他	2 (18) 件	21 (4) 件

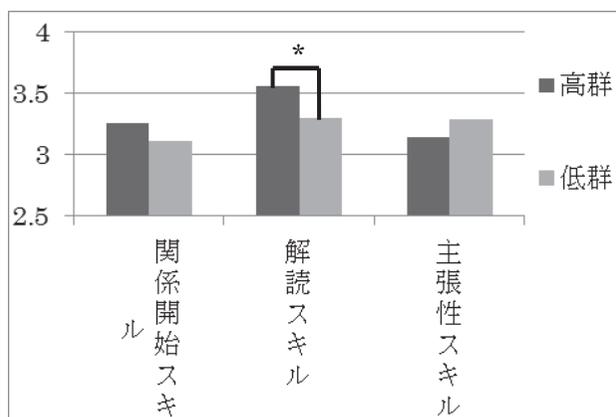


図1 園評価高低群別のソーシャルスキルの平均値

調査2²

【目的】

実習における要指導行動とソーシャルスキルとの関連を検討した調査1では、実習園の評価が高い実習生がソーシャルスキルの中で「解読スキル」が高いことが示された。実習園で指導された要指導行動の目的を的確に理解し、どのように対処すればいいのかをよく把握できたので実習評価をたかかったのではないかと考察している。

そこで、調査2では、実習生に要指導行動をどのように理解しているのか、どのように改善したのか、改善はできたのかをインタビューした。要指導行動を解釈するのに「解読スキル」がどのように使われたのかについて、実習評価の高低群別のインタビュー内容から検討する。

【方法】

調査対象者 保育養成校2年生19名(女)、3年生21名(女)、計40名を対象とした。

手続き 2011年7月～11月まで実施した。6月(保育実習)と9月(幼児教育実習)の実習が終わって1週間以内に、実習での要指導行動を記入させた。その後、要指導行動の記入を見ながら、インタビューを行った。

【結果と考察】

1. インタビューの内容(要指導行動の比較)

1) 要指導行動の内容理解

高群：

・「行動の流れを頭にシッカリ入れる」に対して：縦割り保育をしたことなく、曜日

² 本調査は2013年に保育士養成協議会の研究大会で発表したものである。

によって動きが違うんですよ。…運動会がドンドン近づいて来ると、今日は何時から何時までが横割りになってあなたは年長さんに付いてくださいとか、…日によって毎日違って、…前日に先生に明日の動きを全部聞いて、いつ横割りになっていつまた縦割りに戻るのかとかを(頭にしっかり入れる)。

・「積極的なのは良いが、担任に聞いてから行動するように」に対して：次何するかとか何か考えてやったら良いかなと思って動いたけど、自分から動きすぎというか。なんかそれは違うのになと先生が思ったんだと思います。

・「子どもが集中できるようにクッションの言葉を使う、それで呼び掛けてください」に対して：子どもが遊んだりしていると聞こえないから、いきなり言っても。伝えことの前に「み～な～さん」とか、「お話し聞いてね」とか。注意をこっちに向けてから話すように言われました。

園評価高群は、要指導行動の状況を良く記憶、把握していることが伺える。実習前後の文脈から実習担当保育者の立場や視点を取得し、要指導行動の必要性について理解していると思われる。

低群：

・「積極的に動く」に対して：う～っと子どもが活動しとる時に突っ立ってたのが、よ～分かんないけどそれで言われました。

・「一人一人をしっかりと見る」に対して：(沈黙)何かよう分かんない、何か言われた。言われたけど…。

・「子ども達の目線に合わせる」に対して：覚えてない。いつのやつだろう。多分全体を見下ろすように立ってた時に言われたんだと思う。立ってウロウロしてる時に多分言われと思います。

・「子ども達に背を向けずに全体が見える位置に居るよう」に対して：多分子ども達が自由遊びでワラワラいる中で、言われたんだと思います。座っていて、で、後ろ側に子どもがいるんだけど…多分その時に言われたんだと思います。

園評価低群は、「よくわからない」、「たぶん～だと思ふ」等を多く使用している。要指導行動の状況を十分に把握してない様子が見て取れる。実習中の自分の立ち位置や実習内容を客観視できていないことから、要指導行動の理解が不十分になったと思われる。

2) 具体的な改善行動

高群：

●改善に対する自己判断

・改善はしてない。(なぜかと言うと)こんなに悪い事じゃなくて、何だろう。わからない。

●改善努力

- ・指導案を見てもらって一応 OK もらって、実際やったらゴミ箱を用意するのを忘れて、…。でも、楽しかった。
- ・何か前日にちゃんと先生に聞いて、…何か横割りに分かれる時、1つのクラスだけ遅れてると全体が遅れて来ちゃうのでそれを気を付けてやりました。
- 改善
- ・改善しました。
- ・改善した。みんな聞いてくれるようになった。
- ・その後は言われなくなりました。
- ・(先生の指導の方) そっちの方がうまく行った。
- ・ドンドンよくなりました。・改善した。みんな聞いてくれるようになった。

園評価の高群は、「改善した、うまくできた」もあれば、「改善していない」学生もいる。自分の考えをしっかりと持っているが故に、改善するかどうかの判断をしているようである。要指導行動が改善された結果として、「よくなった、言われなくなった」もあれば、改善した結果として子どもたちの様子や改善できたことを実感していることが見て取れる。

低群：

- 改善努力
- ・一応子どもとは何とか関わるようには。わからない。
- ・改善した。何とか少しずつ。
- ・しました。…多分最初の保育実習だったのであんまり出来たかなって微妙な所なんですけど…。う～んでも大体はやってたと思う。
- ・しました。ですけど、やっぱり子ども達に呼ばれてとか…見えない時があったんで、その後もチョコチョコ言われたかな…。
- 改善
- ・いろんな子どもと関わるようになった。
- 改善できなかった
- ・できなかった。
- ・覚えてないです。
- ・立ってイイかがよく分からなくて動きようがなかった。そしたら～う～覚えてないけど。

園評価の低群は、「よくわからない、覚えてない」もあるが、「改善した」の意見もある。しかし、「改善した」も実感を伴うものでなく、「なんとか少しずつ」とのべている。しかし、その後の幼児教育実習でも同じ要指導行動は繰り返されていることから改善できなかったと思われる。この結果は、底群が、園評価と比べ自己評価が高かったとする朴ら (2012) の結果を裏付けるものである。保育実習での要指導行動と同じ要指導行動が幼児教育実習で繰り返されても、要指導行動は改善したと自己評価している。改善できたと自己評価することによって、その後の改善行動は起こらず、園評価が低くなったと考えられる。もう一つの特徴

としては、「わからない、覚えてない」等の内容が多い。状況把握が不十分であること、それに伴って的確な改善行動を見出すことができなかつたため、自分の実習を正確にふりかえることができなかつたと推測できる。

総合考察

本研究では、実習別に実習評価に影響するソーシャルスキルを検討することが目的であった。検討を行った結果、以下の2点について考察する。

まず、実習別に要指導行動を検討した結果、幼児教育実習では「援助方法と技術」についての要指導行動が多かつた。保育実習では1歳担当が22.5%、2歳担当が20%、3歳担当が25%と3歳未満が0歳を含め72.5%である。幼児教育実習では、3歳が23.7%、5歳が47.4%と担当する子どもの年齢に差があり、担当する子どもの発達によって必要とされる知識・技術が異なるため要指導行動に差が出たと考えられる。この結果は実習評価の高低群別分析でも差が見られた。保育実習では実習評価の低群に対し要指導行動が多かつたのに対し、幼児教育実習では高群に対し要指導行動が多く見られた。この結果は、担当年齢の差によってみられるものなのか、学校教育法に基づく教育と児童福祉法に基づく福祉という保育の違いが要指導行動に表れているのか今後検討していく必要がある。

次に、実習評価の高低群別比較検討を行った結果、ソーシャルスキルの中でも「解読スキル」に有意な差が見られた。実習評価の高群は、低群と比べ、「関係開始スキル」と「解読スキル」が高く、「主張性スキル」が低い結果であった。中でも有意差が出たのは「解読スキル」である。実習生として、子どもだけでなく、担当保育者や主任・園長など評価を担当する保育者の気持ちを察し、その場の雰囲気をも的確に判断し、そして自分の実習状況を客観視することで、実習がより良いものになっていくことを考えられる。高群は「解読スキル」を発揮し、担当保育者の要指導行動の状況を正確に判断し、問題を改善していたと考えられる。子どもの状況と実習生としての自分の言行を客観視するとともに、担当保育者の立場を考慮し、要指導行動を改善していく姿がインタビュー結果から明らかであった。

これらの結果から、実習種別・担当子どもの発達状況によって実習生に必要な能力は異なるが、解読スキルを習得することによって実習評価を高める可能性が考えられた。

【参考文献】

- 大杉稔・山本幸夫・田村壽（2017）「小学校教育実習」における事前・事後指導の在り方：学生の意識調査から見た指導効果と課題 大阪樟蔭女子大学研究紀要，7，pp. 39-49.
- 小林邦江・大河内修・藤原辰志・小原倫子・森久佳・斎藤修啓（2010）実習事前事後指導に関する一考察—実習ハンドブック作成の過程から— 愛知江南短期大学紀要，39，pp. 173-180.
- 松嶋洋子・三溝千景・高嶋景子（2003）保育士養成における保育所実習と教育実習の連携（2）実習日誌を手がかりとして 保育士養成研究，21，pp. 37-45.

- 朴賢晶・真下あさみ、太田由美子・国藤真理子・早矢仕清貴・星野秀樹・児玉珠美 (2012)
保育者養成校学生の実習態度と要指導行動との関連 日本保育学会第65回大会
- 朴賢晶・国藤真理子・太田由美子・早矢仕清貴・星野秀樹・北村瑞穂 (2012) 実習評価とソーシャルスキルとの関係ー保育・幼児教育実習を中心にー 保育士養成協議会第51回研究大会
- 中山美佐 (2016) 幼稚園教育実習の意義と目的についての考察：実習生の保育者観と不安の変化についての調査から 樟蔭教職研究, 1, pp. 55-62.
- 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会 (2007a) 保育士養成システムのパラダイム転換 IIー養成課程のシークエンスの検討ー 保育士養成資料集, 46, pp. 57-59.
- 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会 (2007b) 保育士養成システムのパラダイム転換 IIー養成課程のシークエンスの検討ー 保育士養成資料集, 46, pp. 87-91.

研究ノート

2016年度愛知文教女子短期大学学生実態調査報告

水谷 久康 朴 賢晶

Survey of student life in Aichi Bunkyo Women's College

Hisayasu Mizutani, Hyun-jung Park

Abstract

At Aichi Bunkyo Women's College, we conducted a survey on the actual condition of student life to realize the diploma policy more effectively. The main survey items include the residence area, commute method and distance to the college, study time, part-time job, worries and whom they ask advice, troubles on the Internet, damages by suspicious person or harassment, and how students feel the attractiveness of the college.

As a result of the survey, we confirmed a negative correlation between the study time and their part-time job time. Although their study time is slightly longer than the one from last year's survey, their reading time is remains extremely small.

In addition, we found about half of the students experienced suffering from Internet crimes or insults.

キーワード：学習時間、アルバイト、大学の魅力

I 調査の概要

1. 目的及び内容

本学においては、昨年度（2015）よりディプロマポリシーのより効果的な実現を可能にするために学生生活の実態調査を行っている。2016年度も学生生活の満足度向上のためのより充実した学生支援を図ることを目的に本調査を行った。

主な調査項目は、居住地、通学の実態、学習時間、アルバイト、悩みや相談先、不審者や迷惑行為の被害実態について、学生の感ずる大学の魅力などについてである。

2. 調査の方法と実施

2016年（平成28年）5月半ばより6月末にかけて全学のクラスで、アドバイザーが調査票

(「2016年度生活実態調査項目」参照)を配布し、回収、エクセルシートへの入力をしたものを一括集計した。

調査期間に余裕を持たせたため、学生数541人の全員を対象とし、回答数539人で99.6%の回収率であった。性別は女性で学科、専攻及び学年の構成は幼児教育学科第1部の1学年 75名 2学年 87名、第3部の1学年 80名 2学年 76名 3学年 78名、生活文化学科食物栄養専攻1学年 44名 2学年 41名、生活文化専攻1学年 31名 2学年 23名である。

II 結果と考察

1. 住居状況

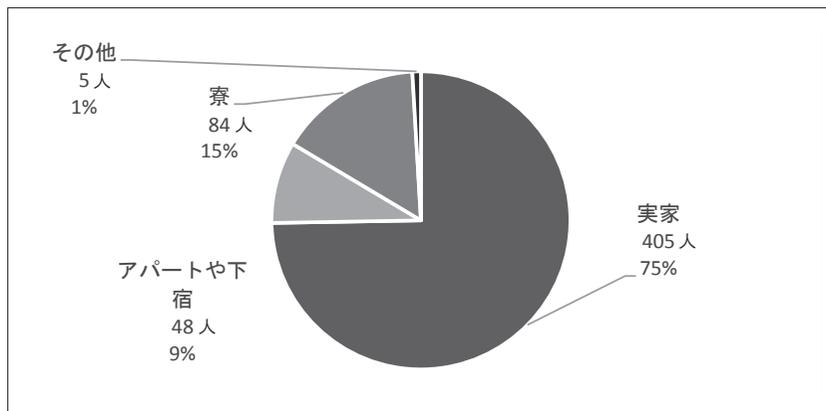


図1 本学学生居住状況

図1のとおり、実家から通う学生が最も多く、75% (405人)であった。寮やアパートから通う学生は24% (132人)いる。「その他」の内訳は、祖父母宅、祖母宅、祖父の家、夫の実家であった。昨年度調査とほぼ同一の割合であった。

図2は全国調査の結果であるが、比べると本学は実家から通う学生、賃貸の割合はともに少し低く、寮の割合が10%ほど多い。

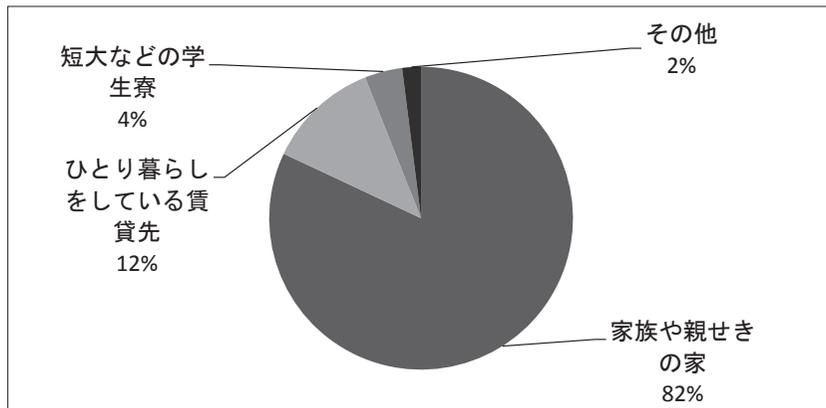


図2 全国短大学生調査

出所：短期大学基準協会調査研究委員会 (2016)

2. 通学について

2-1. 主な通学方法

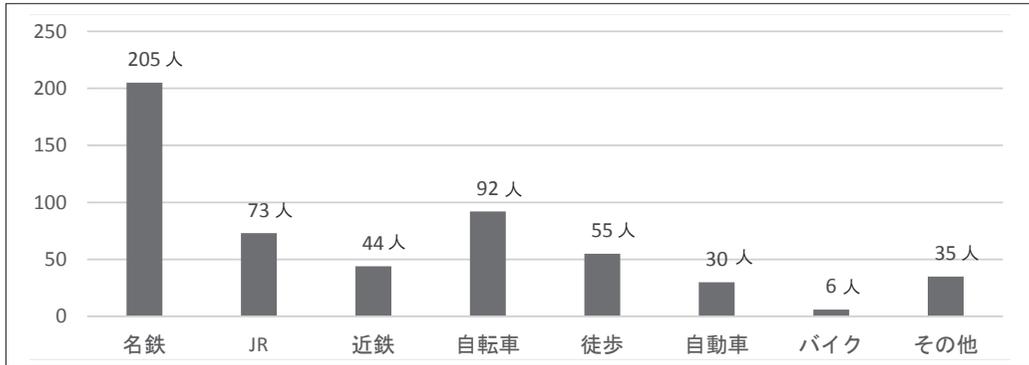


図3 主たる通学方法

主な通学方法を問うために「最も長い時間をかける通学方法」を尋ねた。昨年度の調査項目に「近鉄」、「その他」を加えた。

公共交通機関では名鉄利用者が最も多く205人、次に自転車利用者が92人であった。昨年選択肢になかった近鉄は主な利用者が44名いることが分かった。全体はほぼ昨年と同様な傾向である。

回答者539人のうち約60% 322人が公共交通機関で通っているが、自転車92人や自動車30人、バイク6人などの手段で通学するものもおり、交通安全指導も重要な課題である。

2-2. 通学所要時間

471人(87%)の学生が90分未満で通っているが、これは寮と住宅助成制度の効果もあると思われる。60分以上の割合は36%で昨年と同様だが、120分以上かけて通っているものも11人(2%)いた。この割合は全国調査と類似している。「その他」の回答の内容は、地下鉄13人、バス10人、市バス6人、あおなみ線3人、瀬戸電1人だった。

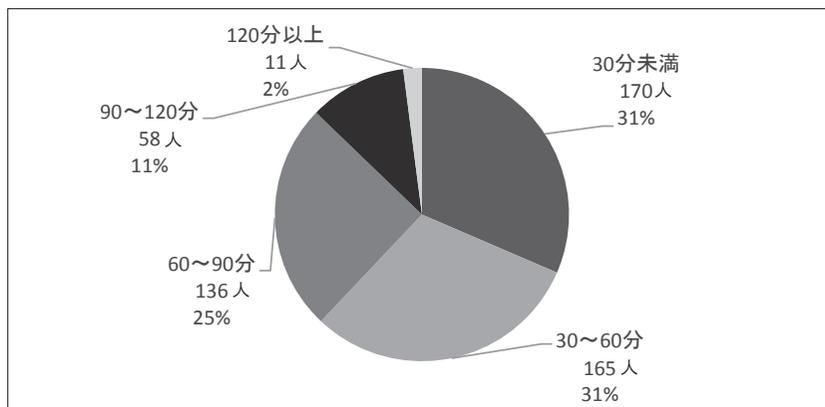


図4 本学学生通学時間

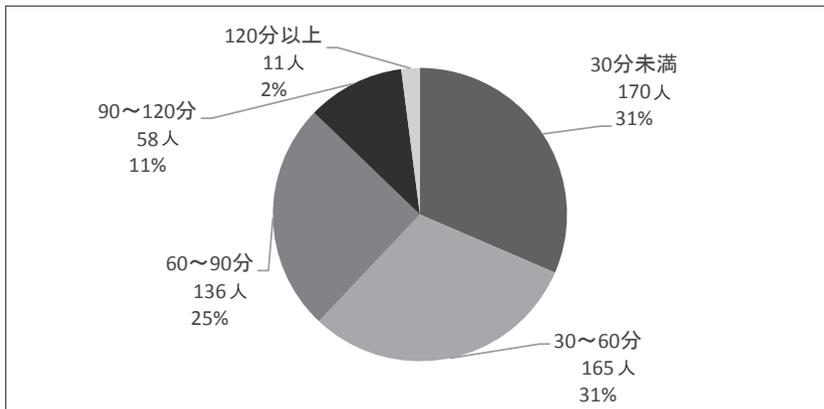


図5 全国短大学生の通学時間

出所：短期大学基準協会調査研究委員会 (2016)

2-3. 通学時間と居住状況

通学時間と居住状況をクロス集計した。表1にあるように女子学生ゆえに保護者が実家からの通学を望む結果、長時間をかけての通学の傾向が表れていると考えられる。

表1 通学時間と住居状況

	30分未満	30～60分	60～90分	90～120分	120分以上
実家	50	135	122	49	10
アパートや下宿	30	6	3	2	
寮	75				
その他	1	2	3		

n=488

3. 睡眠時間について

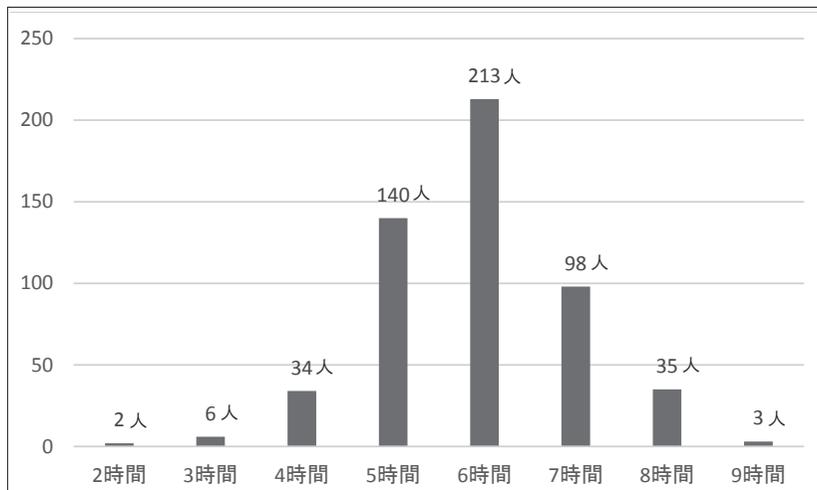


図6 睡眠時間

図6にあるように、回答者530人中、6時間の睡眠時間を取る学生が最も多く213人である。9時間を超えるロングスリーパーはいない。65.8%の学生が6時間以上の睡眠をとっているが、残りの学生は明らかに睡眠不足が常態化しているのではないかと思われる。授業中の居眠りをする学生の主な原因が睡眠不足といえよう。睡眠時間と通学時間との相関についてはピアソンの相関係数 $r=-0.21$ で弱いマイナスの相関関係がみられる。

学科・専攻別に見た平均睡眠時間は幼児教育学科1部と3部はともに5.9時間、食物栄養専攻は6.1時間でやや多く、逆に生活文化専攻は5.6時間と少なかった。

表2 学科・専攻別の睡眠時間

	2時間	3時間	4時間	5時間	6時間	7時間	8時間	9時間
幼教1部	1.3%	0%	4.5%	31.2%	36.3%	18.5%	7.0%	1.3%
幼教3部	0%	1.7%	6.5%	24.3%	43.5%	17.0%	6.5%	0.4%
食物栄養	0%	0%	6.0%	22.6%	38.1%	26.2%	7.1%	0%
生活文化	0%	3.3%	11.7%	26.7%	40.0%	13.3%	5.0%	0%

n=541

4. 学習時間について

図7の回答者数535人の中で、全く日々の学習をしないという回答をした学生が78人(15%)であった。全国調査(短期大学基準協会調査研究委員会, 2016)では短大生の51%が授業以外の自主的な学習は0時間と回答している。この点においては本学の学生は全国の短大生調査結果と比べて勤勉であると評価できよう。

昨年の調査では回答者中「ほとんどしない」が3分の1(161人)であったが、この選択肢には主観から相当な幅が生ずると考え、「全くしない」に変更し、かつ30分ごとに幅を持たせた選択肢とし、より実態が反映するように変更した。2時間から2時間半の長時間学習者は幼児教育3部3年の学生で、2時間半以上は同じく1部1年の学生であった。

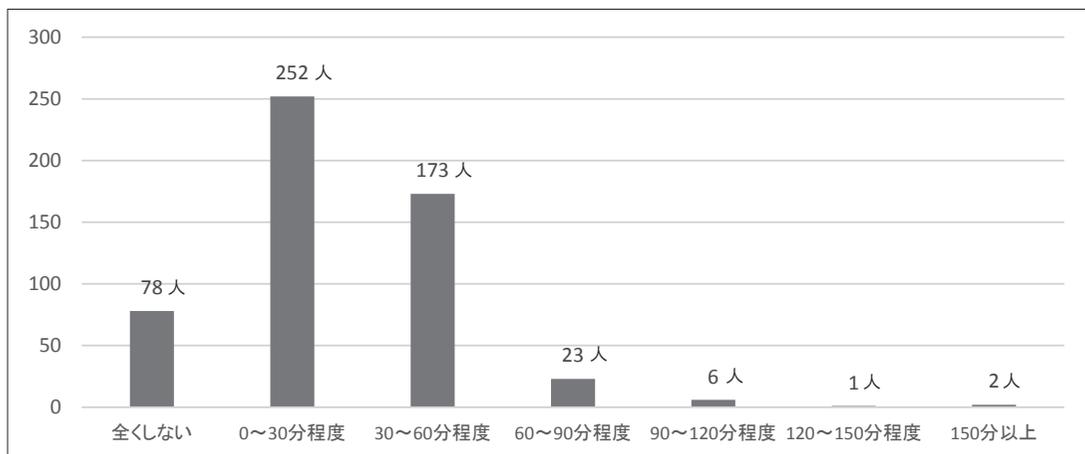


図7 授業以外の自主的な日常の学習時間(ピアノの練習も含む)

5. 読書時間

一週間の読書時間を尋ねた。531人の回答者のうちおよそ7割の357名は1週間の読書時間の合計は0時間と回答。1週間で1時間が2割の104人。スマホ世代の活字離れが言われて久しいが、私たちはこの現実を踏まえた教育活動をしなくてはならない。

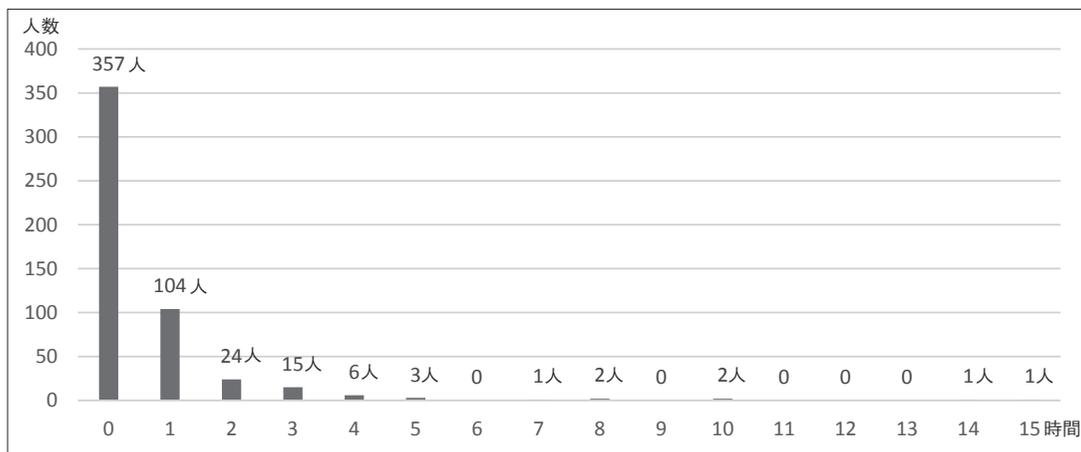


図8 1週間の読書時間の合計

6. アルバイト

図9に示すように、84% (452人) の学生が調査時点でアルバイトをしている。昨年の83% とほぼ同率である。全国調査ではアルバイトをしているのは77%で、本学は少し多い。

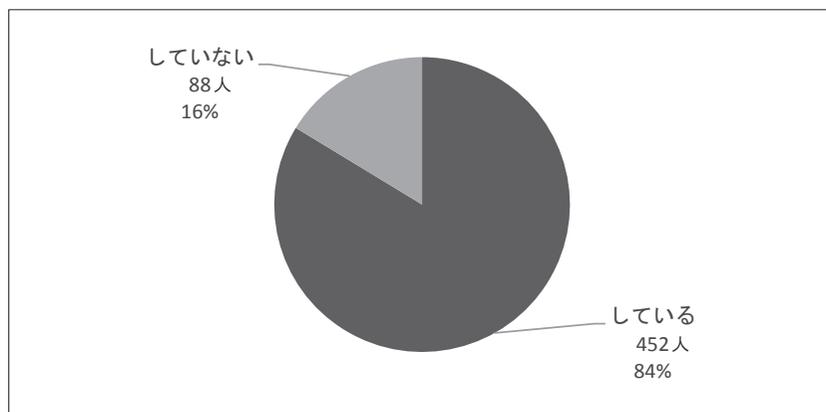


図9 アルバイト就労実態

6-1. 就労の継続

図10のとおり、75% (403人) の学生が現在のアルバイトを続けようと考えている。新に始めようと考えているものも18% (96人) いて、93% の学生がアルバイトを今後も考えている。今後もアルバイトをするつもりはないと答えた学生の数、昨年 (21人、4%) に比べるとやや増加している。

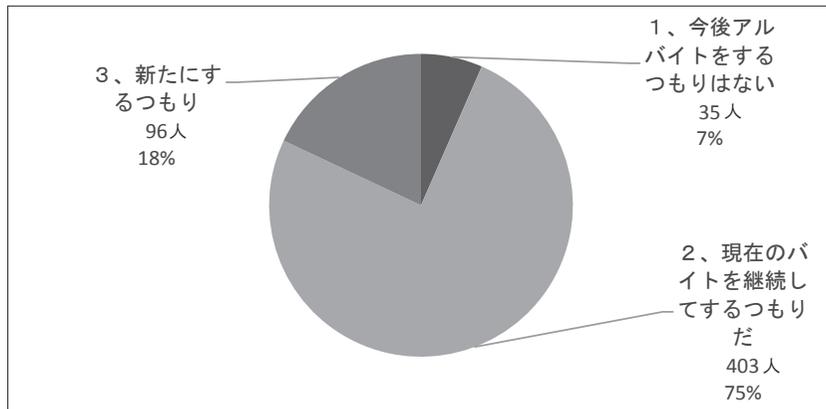


図10 今後のアルバイト

6-2. 職種

図11にあるように、その多くは飲食関係である。昨年同様、幼児教育学科の学生は幼稚園や、児童館など、また食物栄養専攻は食品製造関係、情報医療コースは薬局など、学業との関係を考えてのアルバイト先の選択をしている学生も一定いる。

「その他」の回答の内容は、ケーキ・菓子・パンやなど8人、ファストフード6人、スポーツジム・スイミング5人、温泉、派遣、雑貨店、カラオケがそれぞれ3人、映画館、イベントスタッフが2人、キッズパーク、幼稚園、施設、家庭教師、塾の講師、写真館、接骨院、花の手入れ、ガソリンスタンド、自宅、ゴルフ場の受付、車検専門店、ホテル、工場、接骨院、受け付け、ラウンドワンがそれぞれ1人であった。

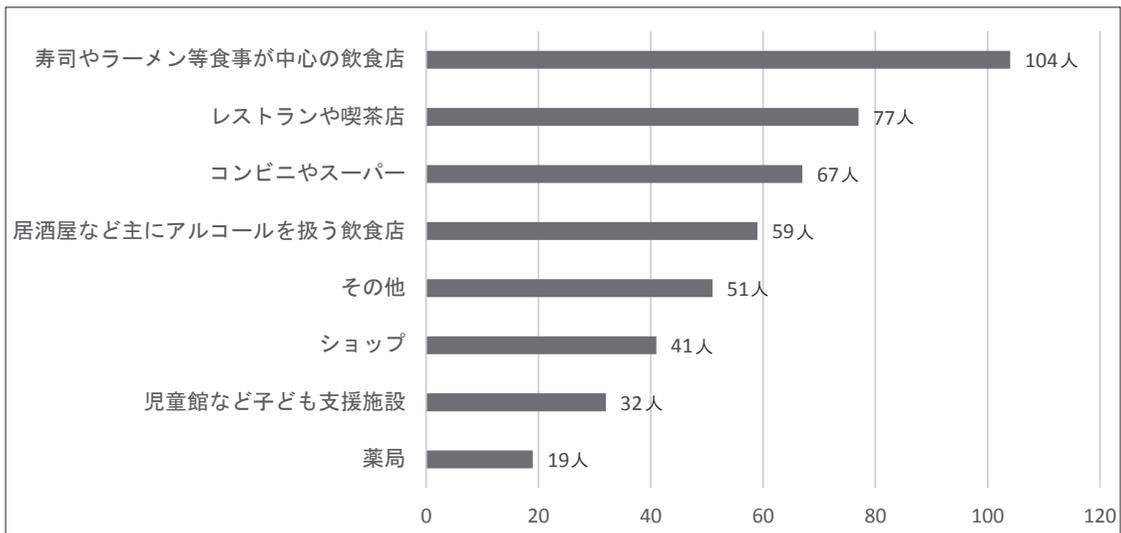


図11 アルバイト先の職種

6-3. 就労日数

1週間のアルバイト就労に数であるが平均は3.0日で、大学生の平均2.7日（リクルート仕事白書，2015）でやや本学の学生のほうが多い。図12の示すとおり、就労の日数の最多は4日である。昨年は3日が最多であった。昨年と比べると週5日が減少し週2日と4日が増加したが、全体としては昨年とほぼ同様の分布である。

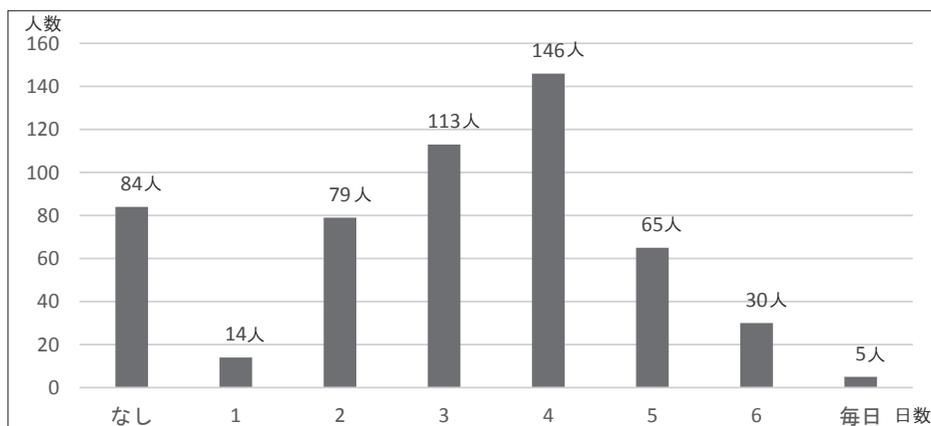


図12 一週間の就労日数

6-3-1. 学科・専攻、学年別の就労日数

調査時点では、幼児教育学科第1部1年生はアルバイトをしているのは63.5%（47人）で日数も4日以内であった。逆に生活文化専攻の1年生は全員がアルバイトを行っていた。ただし日数は3日以内と最も少なかった。幼児教育学科第3部は、就労学生を前提とする午前主体の時間割構成の3年生であるため、就業日数は毎日行うものに至るまでおり最も多かった。食物栄養専攻は1、2年生とも73.2%（各30人）の学生がアルバイトをしている（表5）。

表5 学科・専攻、学年別の就労日数

	幼教1部		幼教3部			生活文化		食物栄養	
	1学年	2学年	1学年	2学年	3学年	1学年	2学年	1学年	2学年
なし	36.5%	12.2%	12.8%	6.6%	1.3%		22.9%	26.8%	26.8%
1日	2.7%	7.8%	2.6%	1.3%	1.3%	5.7%			2.4%
2日	16.2%	28.9%	3.8%	1.3%	11.5%	71.4%	25.7%	12.2%	17.1%
3日	21.6%	16.7%	28.2%	9.2%	14.1%	22.9%	37.1%	31.7%	26.8%
4日	23.0%	22.2%	25.6%	42.1%	33.3%		14.3%	24.4%	24.4%
5日		5.6%	16.7%	25.0%	26.9%			4.9%	2.4%
6日		6.7%	9.0%	11.8%	10.3%				
7日			1.3%	2.6%	1.3%				

6-4. 一回当たりの就労時間

一日当たりの本学学生のアルバイトの平均就労時間は4.3時間で、日本の大学生の平均就

労時間は4.6時間（リクルート仕事白書，2015）に比べるとやや少ない。短期大学ゆえに、一日の授業のコマ数が多いことが理由として考えられる。しかし、7時間を超えて働いている者が14.8%（78人）もあり（図13）、当然長時間労働は就学に支障をきたす恐れがあるため、アドバイザーからの指導の必要性がある。

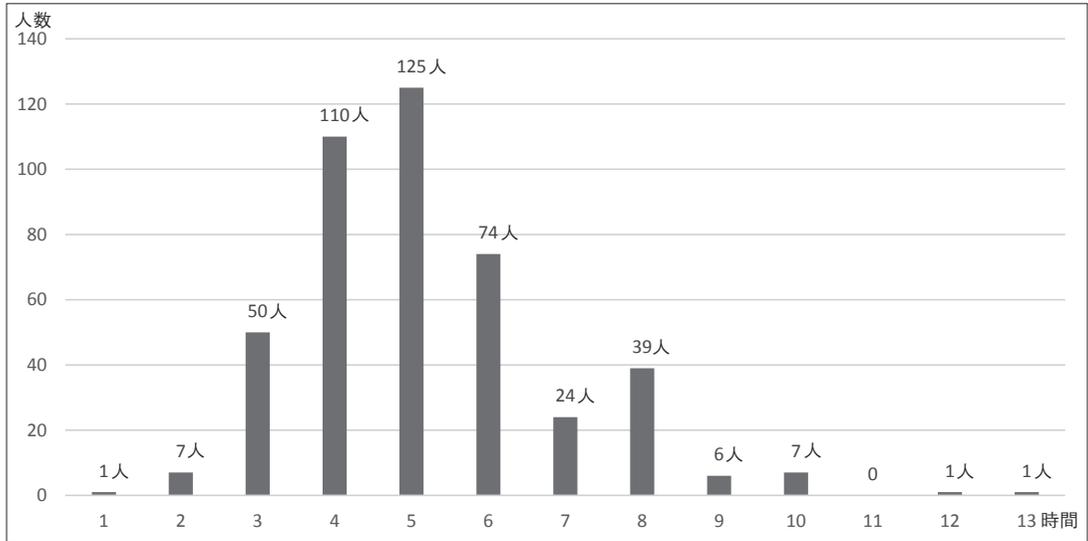


図13 一回当たりの就労時間

6-4-1. 学科・専攻、学年別の就労時間

各学科・専攻とも学年が上がるにつれて長時間のアルバイトが増える傾向にある（表6）。

表6 学科・専攻、学年別の就労時間

	幼教1部		幼教3部			生活文化		食物栄養	
	1学年	2学年	1学年	2学年	3学年	1学年	2学年	1学年	2学年
なし	36.5%	12.5%	12.8%	6.7%	1.3%	20.0%		27.5%	27.5%
1時間			1.3%						
2時間		3.4%		1.3%	1.3%	2.9%	4.3%		
3時間	10.8%	14.8%	5.1%	10.7%	8.0%	2.9%		17.5%	7.5%
4時間	21.6%	22.7%	28.2%	2	12.0%	17.1%	26.1%	2	2
5時間	10.8%	19.3%	29.5%	24.0%	34.7%	25.7%	26.1%	2	25.0%
6時間	6.8%	10.2%	15.4%	13.3%	26.7%	17.1%	21.7%	5.0%	12.5%
7時間	2.7%	1.1%	1.3%	12.0%	5.3%	5.7%	4.3%	5.0%	5.0%
8時間	8.1%	10.2%	6.4%	8.0%	8.0%	5.7%	8.7%	5.0%	2.5%
9時間	1.4%	2.3%			1.3%	2.9%	4.3%		
10時間	1.4%	2.3%		2.7%	1.3%		4.3%		
11時間									
12時間		1.1%							
13時間				1.3%					

6-5. アルバイトの学業への支障について

昨年と比べると、アルバイトを学業に対しての支障が無いという回答が42%（192人）から48%（256人）と増加した（図14）。

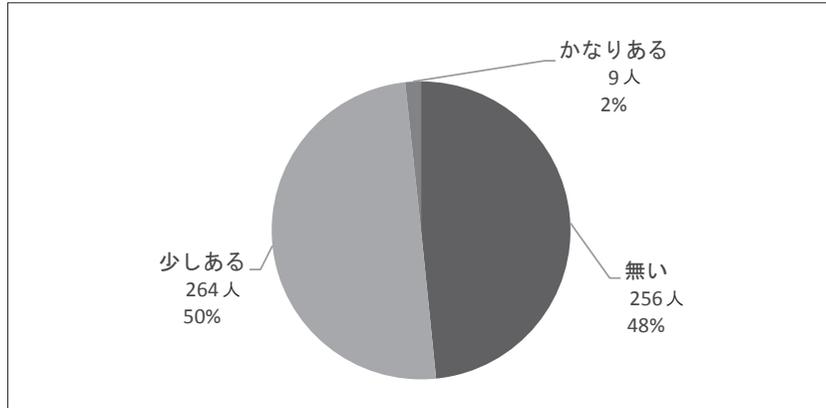


図14 アルバイトの学業への影響

6-6. 一月当たりのアルバイトの収入について

長期休業中を除く、一か月あたりのアルバイトの収入は図15にあるとおり、3万円から8万円の範囲が多いが、8万円以上（117人）が昨年（93人）と比べると増加している。小売店の人手不足と最低賃金の上昇が背景となっている可能性がある。

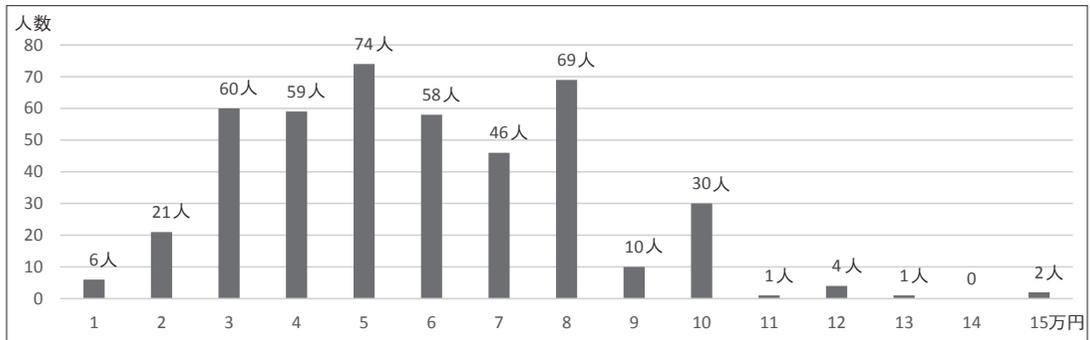


図15 アルバイトの収入月額（万円）

6-6-1. アルバイトの支出内訳について

新たな質問項目として、アルバイト収入の支出内訳を、最も多くかかるものと（図16）、2番目に多くかかるもの（図17）を聞いてみた。両者とも、化粧品や携帯の代金は順位が低く、趣味・娯楽、生活費、ファッション関係が上位を占めた。生活費（151人、61人）や授業料（61人、18人）、交通費（16人、60人）などアルバイトで自活した生活を目指す学生が本学には多い結果が表れている。その他の内訳は、貯金が3人で、使わない2人、自動車学校、就職に役立つ、母に渡す。医療費（コンタクトなど）が各1人であった。

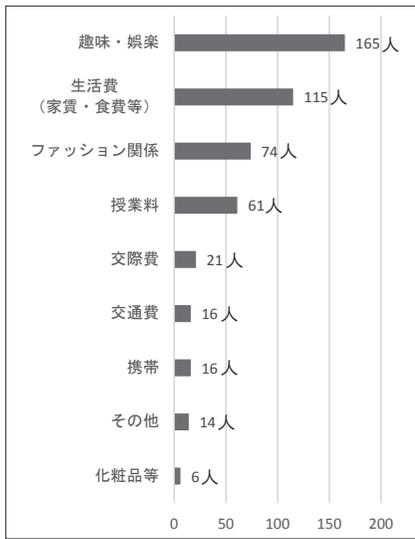


図16 支出内訳第1位



図17 支出内訳第2位

7. 困りごと

学生の困りごとについての調査を行った。体調の状況も含め、現状と対処法を尋ねた。

7-1. 体調

今年度新たに、過去1年間の体調不良について尋ねた。1学年は入学前も含むことになる。全体では10% (51人) の学生が極めて健全性の高い生活を送り、全くなかったと答えているが、54% (293人) は体調不良を感じていた (図18)。

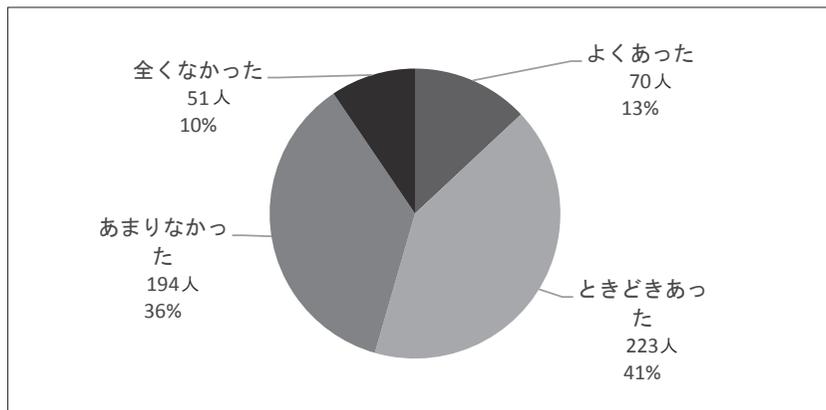


図18 在学生全体の過去1年間の体調不良

体調不良について、1学年と卒業学年を比較した。体調不良が「全くなかった」の回答は1学年が15% (35人) に対して (図19)、卒業学年は5% (12人) に激減している (図20)。逆によくあった、「ときどきあった」を合わせた回答は1学年が50% (115人) であったのに、57% (133人) に増加している。

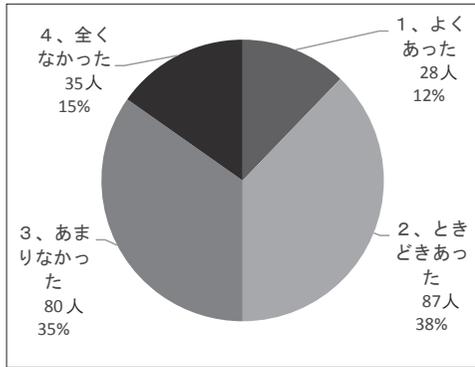


図19 1学年の過去1年間の体調不良

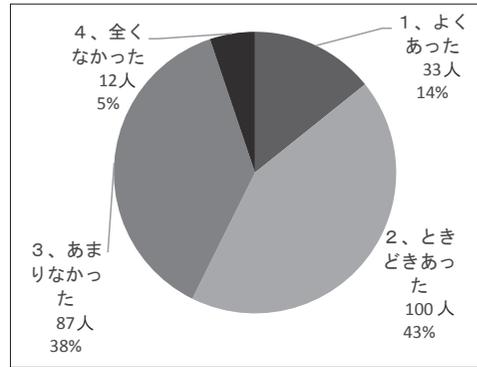


図20 卒業学年の過去1年間の体調不良

7-2. 現在の困りごと

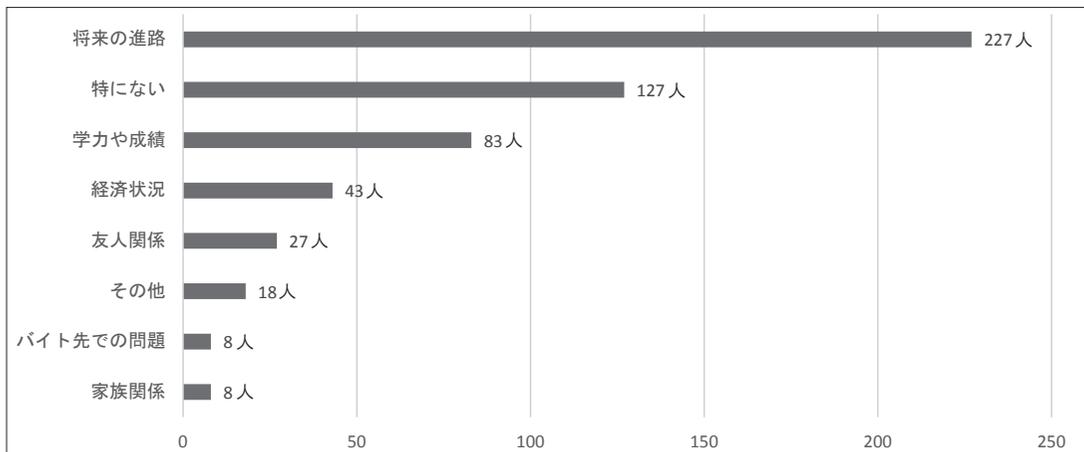


図21 現在最も困っていること（全学年対象）

現在の学生生活において最も困っていたり、悩んでいることについて単回答で尋ねた。全学年通じて多かったのは将来の進路に関する不安であった(図21)。次いで悩みとして多かったのは学力や成績であった。

学年間に差があったのは、1学年では、「学力や成績」と「将来の進路」がともに23%（53人）であったが、卒業学年では60%（139人）の学生が「将来の進路」に不安を感じていると答えている。

調査時期が前期であり、1学年の場合まだ一度も成績評価を受けていないため「学力や成績」に不安を感じ、「特にない」1学年30%（69人）と比較すると、卒業学年は17%（39人）と大きく減っており、就職先についての先行きが未だ不透明な時期で不安感が高くなった可能性が考えられる。

他に学年間で差があったのは、「特にない」の回答で1学年が29.6%（69人）なのに、卒業学年は16.8%（39人）であった。このことから、学年により配慮や指導すべき事項が異なることを念頭に置いた学生対応が求められる。

「その他」の内訳は、ピアノが4人、病気や体調が3人、多忙で時間がない2人、就職への不安、公務員試験、テストが分からない、図工、通学時間が長い、自身の生活、バイトができない、寝坊、自分の性格、寮の隣の人がうるさい、自分の子供の学校行事や病気の時に、授業を休まなければならない事が各1人だった。

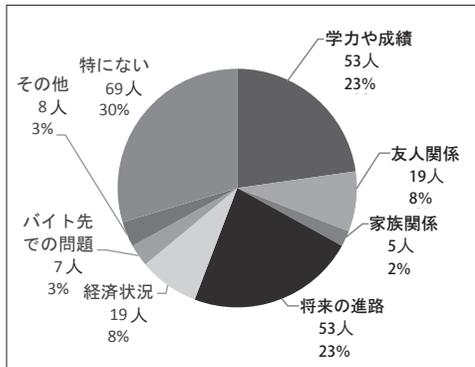


図22 1学年が困っていること

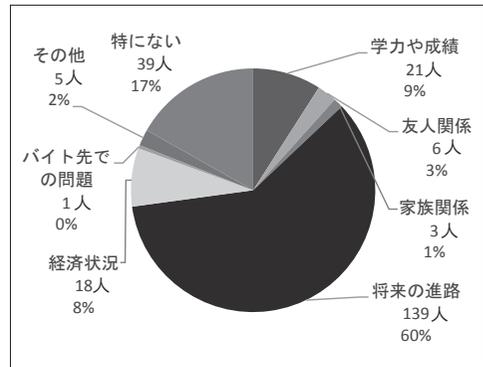


図23 卒業学年が困っていること

7-2-1. 困りごとの相談相手 (以下複数回答可の設問)

図24にあるように、学外の友人に相談するのが最も多い結果となった。次に多いのは家族であり、次が学内の友人である。すなわち、友人と家族の2者への相談が多くを占める。これは全く昨年と同じ傾向であるが、今年顕著であったのは、アドバイザー (28人/昨年45人) やアドバイザー以外の教員 (15人/昨年22人) を相談者として選ぶ人数の減少である。

昨年行った学科ごとのSWOT分析で、弱みとして、教員が多忙ゆえに学生に十分余裕をもってあたれないことも指摘があったが、その影響なのかもしれない。

「その他」の内訳は、彼氏や恋人が8人、ネット友達、習い事の先生、母のみ、医者、バイト先の人各1人であった。

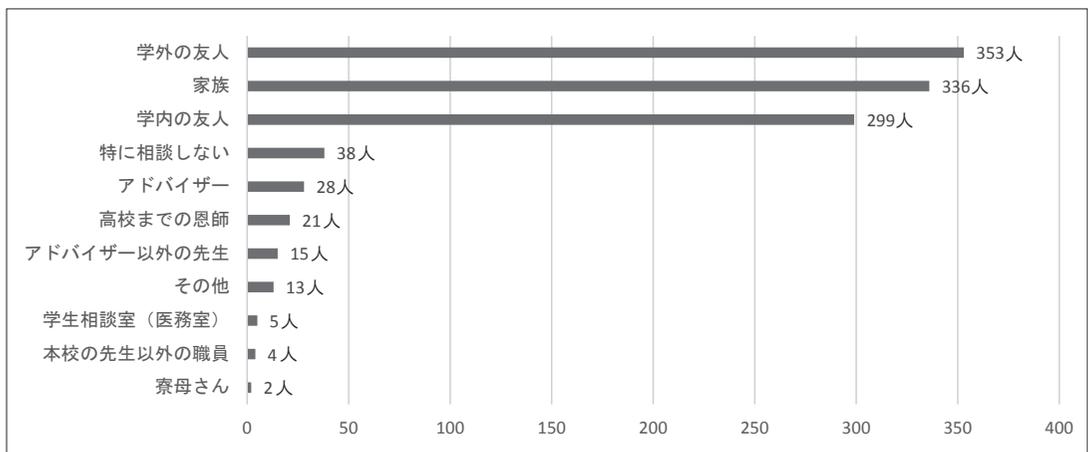


図24 学生の相談相手

7-3. 不審者や痴漢など迷惑行為

多くの学生は、迷惑行為の直接の被害は受けていない（図25）。最も多いのが自宅や居住地周辺が27人で、列車の車中で私鉄とJRの合計で25人だが、鉄道の駅及びその周辺も15人いる。続いて学校や寮周辺も8人と続く。その他の内訳は名鉄が2人、美容室で被害を受けたとの回答もあった。

学生の回答はアドバイザーが回収している。特にこの回答には配慮し、個人面談等でのケアに努める必要がある。

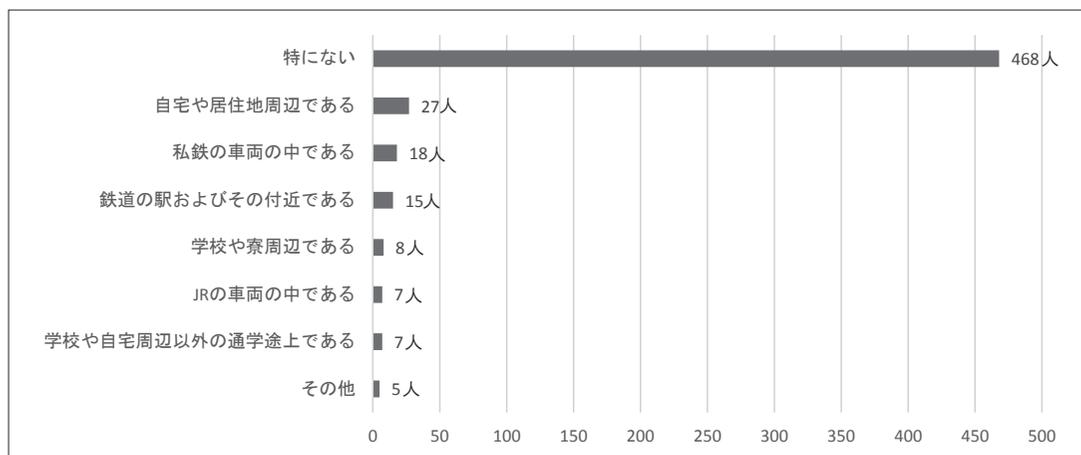


図25 迷惑行為の被害体験

7-3-1. 迷惑行為への対処行動

被害体験のないものも含めて、考えられる対処行動を尋ねた。「家族に相談」（213人）が最も多く、昨年は「友人の相談」が188人で2位であったが、「周囲の大人に助けを求める」が昨年の130人から、今回の調査では199人と大幅に増加し2位の回答となった（図26）。「その場で110番通報」は80人から64人に、「事後に本学の先生に相談」も67人から36人と大幅に減少している。

「その他」の内訳は、逃げるが2人、周囲の友人に話す、寮母に相談、手を出す、捕獲、自分で何とかする、電車の時間をずらす、自分で相手に言葉でどっかに行けと言う、説教する、大きな声で叫ぶが各1人であった。

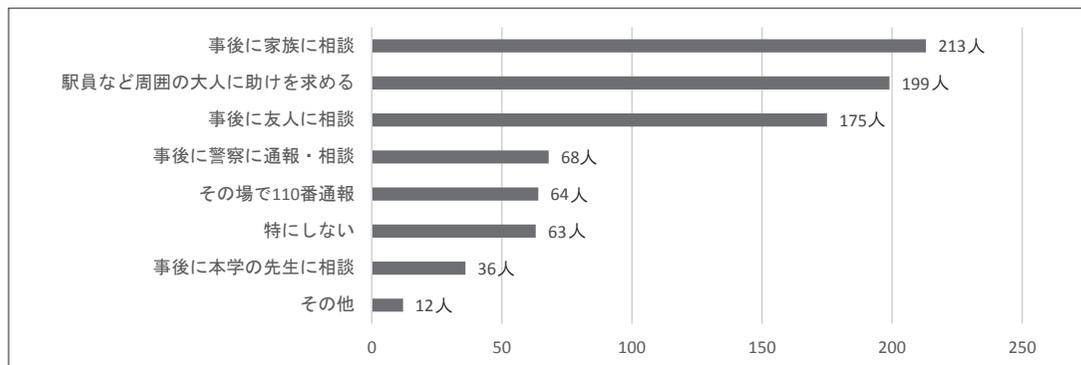


図26 迷惑行為への対処行動

7-3-2 被害体験者と未体験者の対処行動の差

図27に示すように、対処行動の選択として最も多かった「事後に家族に相談」では、被害体験なし（以下、無）は87.7%で被害体験あり（以下、有）は12.3%で全体の比率と大きくは異ならなかった。しかし、危険回避や再発防止のために望ましい対処行動である「駅員など周囲の大人に助けを求める」は無96.3%に対し有3.7%、「その場で110番通報」は無95.3%に対し有4.7%と極端に被害体験者の回答割合は低く、実際には対処行動として選択されない傾向があることが分かった。

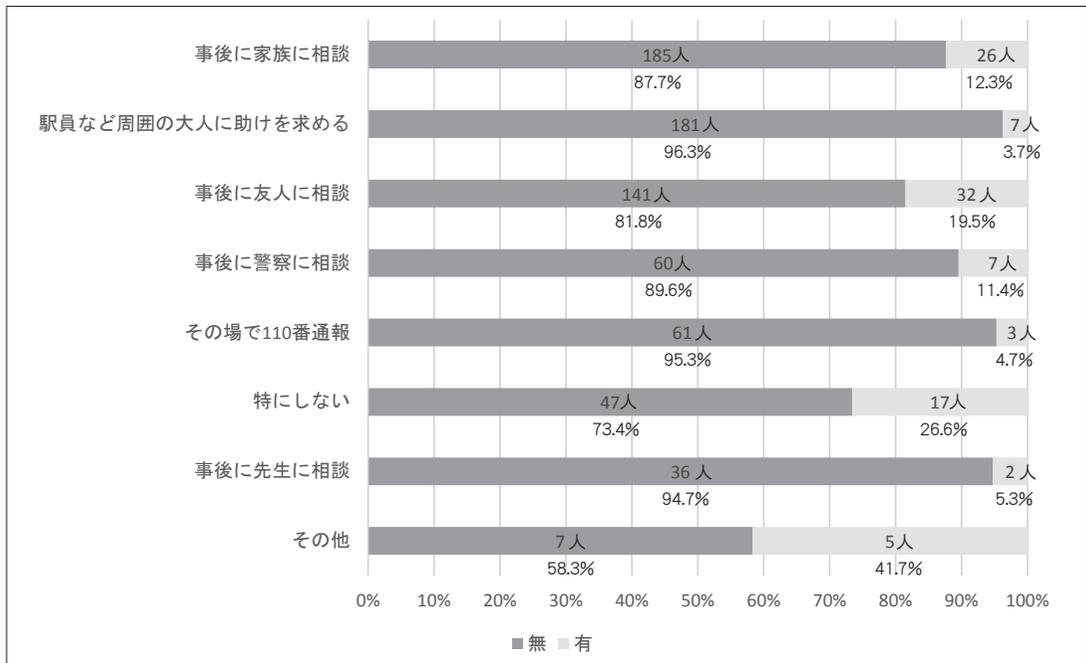


図27 被害体験の有無と対処行動

7-4. ネット被害

インターネットにかかわる被害体験は図28にあるように、343人の学生が被害体験はないと答えている。被害体験で最も多かったのは大量の迷惑メールで140人（22%）、身に覚えのない請求メールが63人（10%）、タップ、クリックからの請求画面表示が39人（10%）、ネットへの写真の流布やネット上での誹謗中傷が33人（5%）、フィッシングが8人（1%）、オークション詐欺が5人（1%）で数少ないとはいえ深刻な被害につながるものもあった。「その他」の内訳は、定期契約をした後、解約しにくい業者だと発覚した、クリックしたらウイルス感染、写真の悪用、SNSでアカウントの乗っ取りが各1名であった。

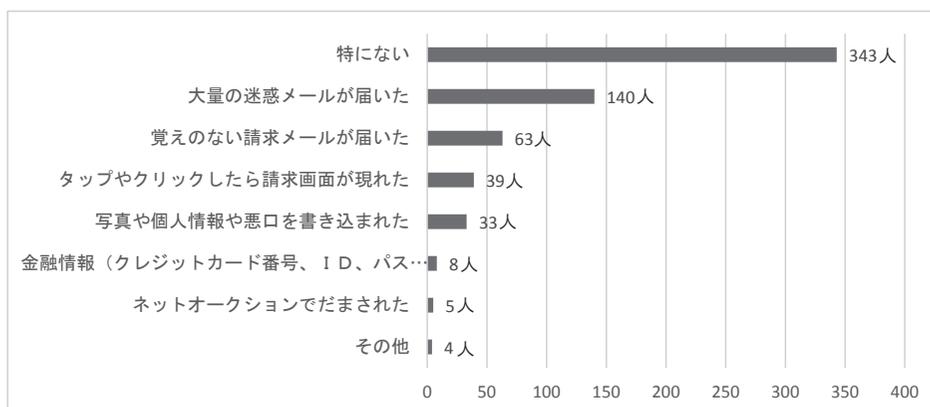


図28 ネット被害の経験

8. 本学の魅力

図29に示すように、全体（gross 2538）では、パウダールームが247人で、以下無料スクールバス234人、資格取得190人と続き、経営戦略としてパウダールームの新設やスクールバスの充実が有効であることが考えられる。

その他の内訳は、全部、授業、特になし、トイレが綺麗、学食、立地（国府宮駅から徒歩で行ける）が各1名であった。

しかし、学科、部、専攻ごとに見てみると学生の評価の様相はかなり異なっている。

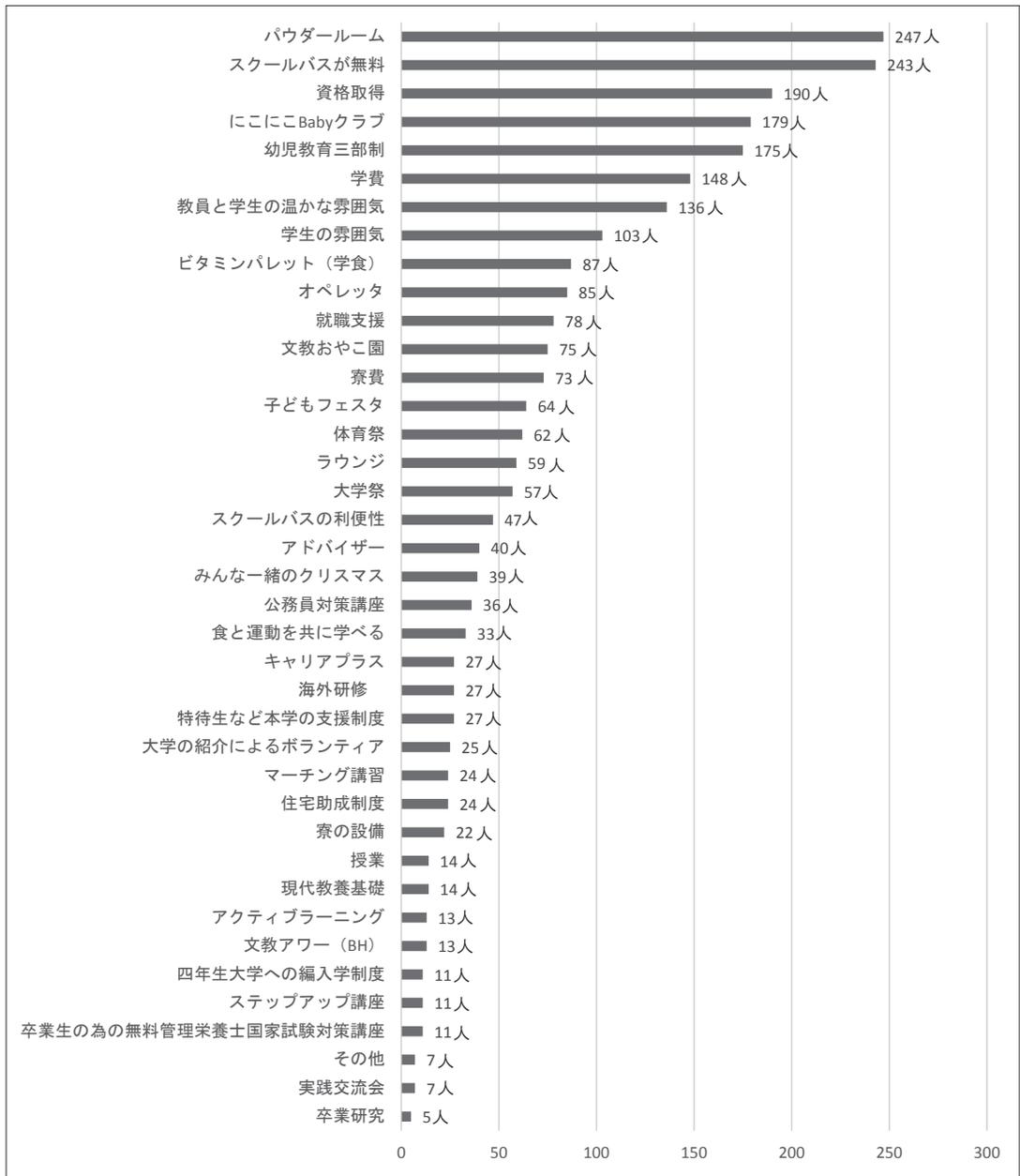


図29 本学の魅力 全学生の回答

8-1. 幼児教育学科第1部の学生

1部の学生 (gross731) はトップがにこにこ Baby クラブ (83人) である。また3位に資格取得 (78人) と4位オペレッタ (69人) が入っている (図30)。

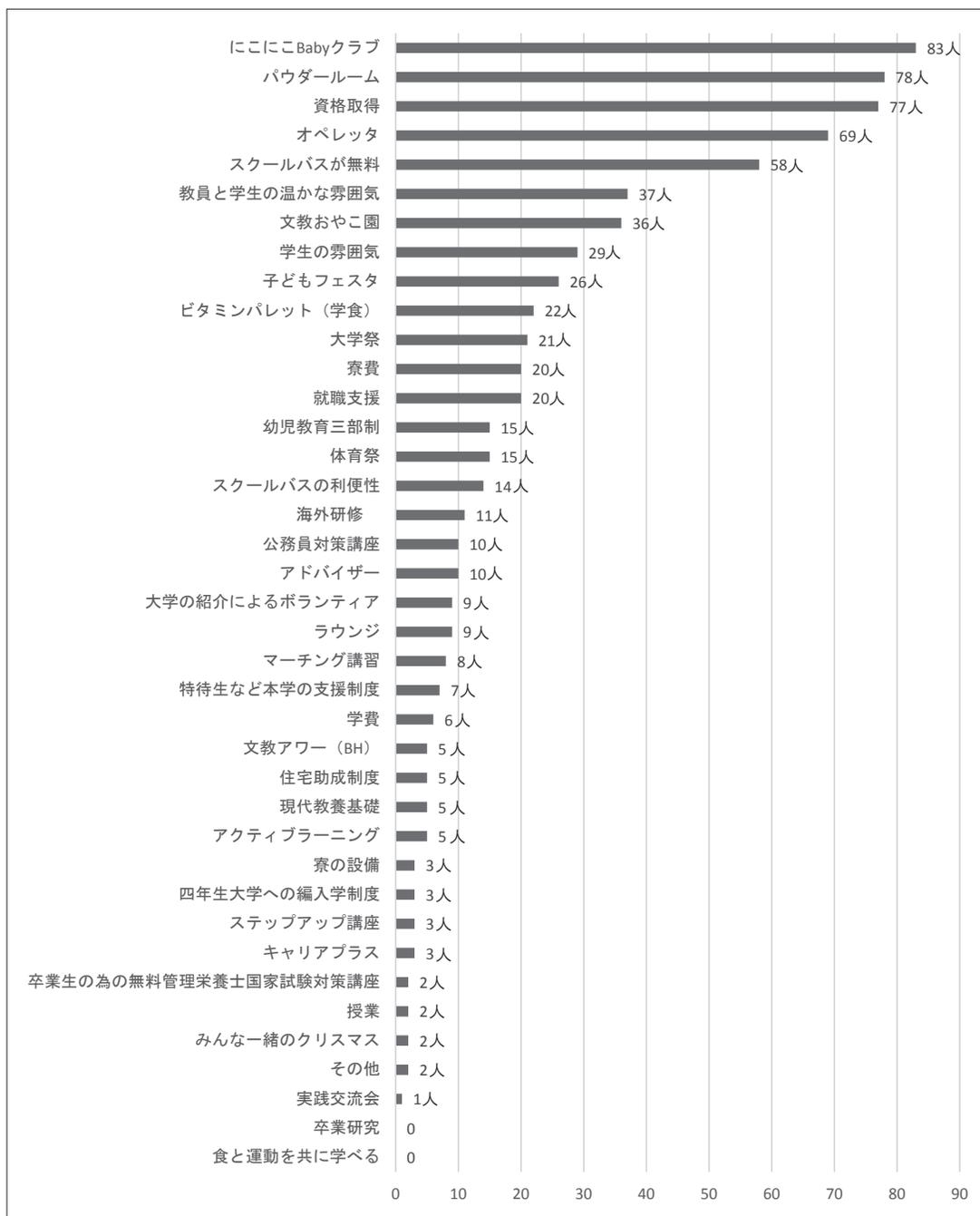


図30 幼児教育学科第1部の学生回答の本学の魅力

8-2. 幼児教育学科3部の学生

3部の学生 (gross1193) は、3部制の仕組みをトップ評価 (157人) している。2位 (136人) が学費であり、資格取得は7位 (50人)、オペレッタは21位 (14人) と1部の学生とは異なる (図31)。

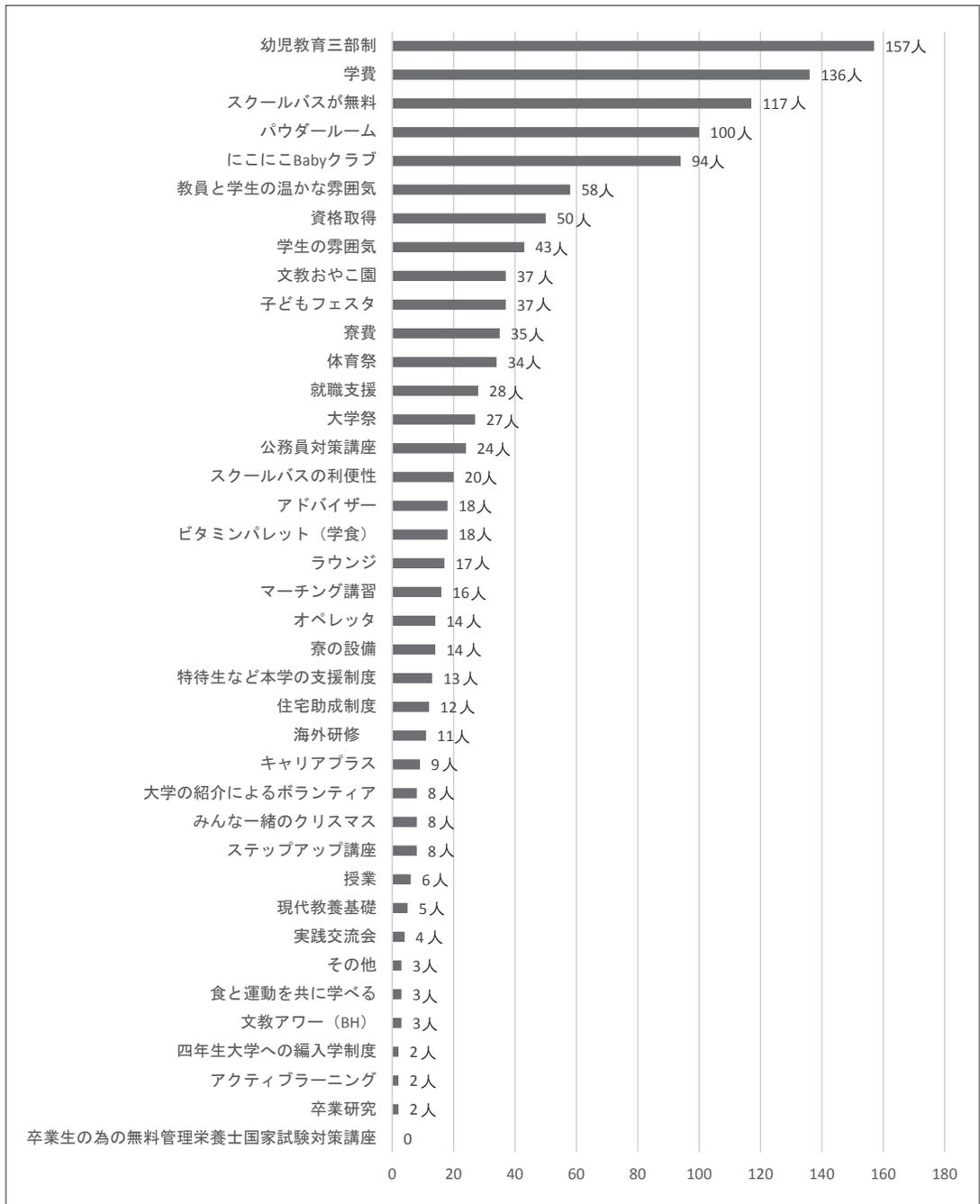


図31 幼児教育学科第3部の学生回答の本学の魅力

8-3. 食物栄養専攻の学生

食物栄養専攻 (gross399) はまた異なる評価となった (図32)。上位3位は全体と同様であるが、4位 (31人) ビタミンパレット、5位 (30人) 食と運動を共に学べる、6位 (29人) みんな一緒にクリスマスに専攻の特徴がよく表れている。

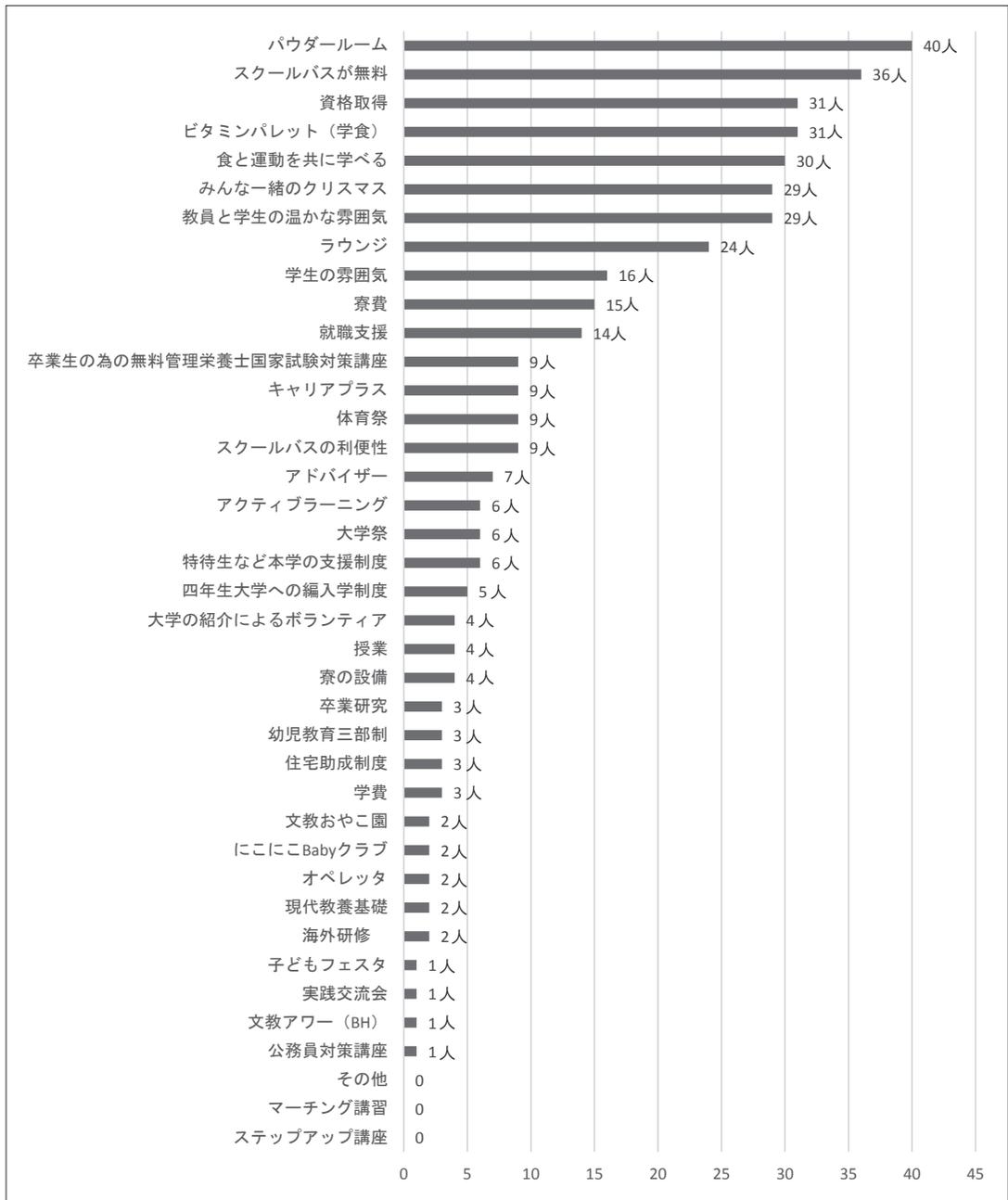


図32 食物栄養専攻の学生回答の本学の魅力

8-4. 生活文化専攻の学生

生活文化専攻の学生（gross215）は資格取得と無料スクールバスがトップ（32人）で、就職支援が4位（16人）であり、他の学科、専攻に比べ早期に始まる就職活動の影響が表れているものと思われる（図33）。

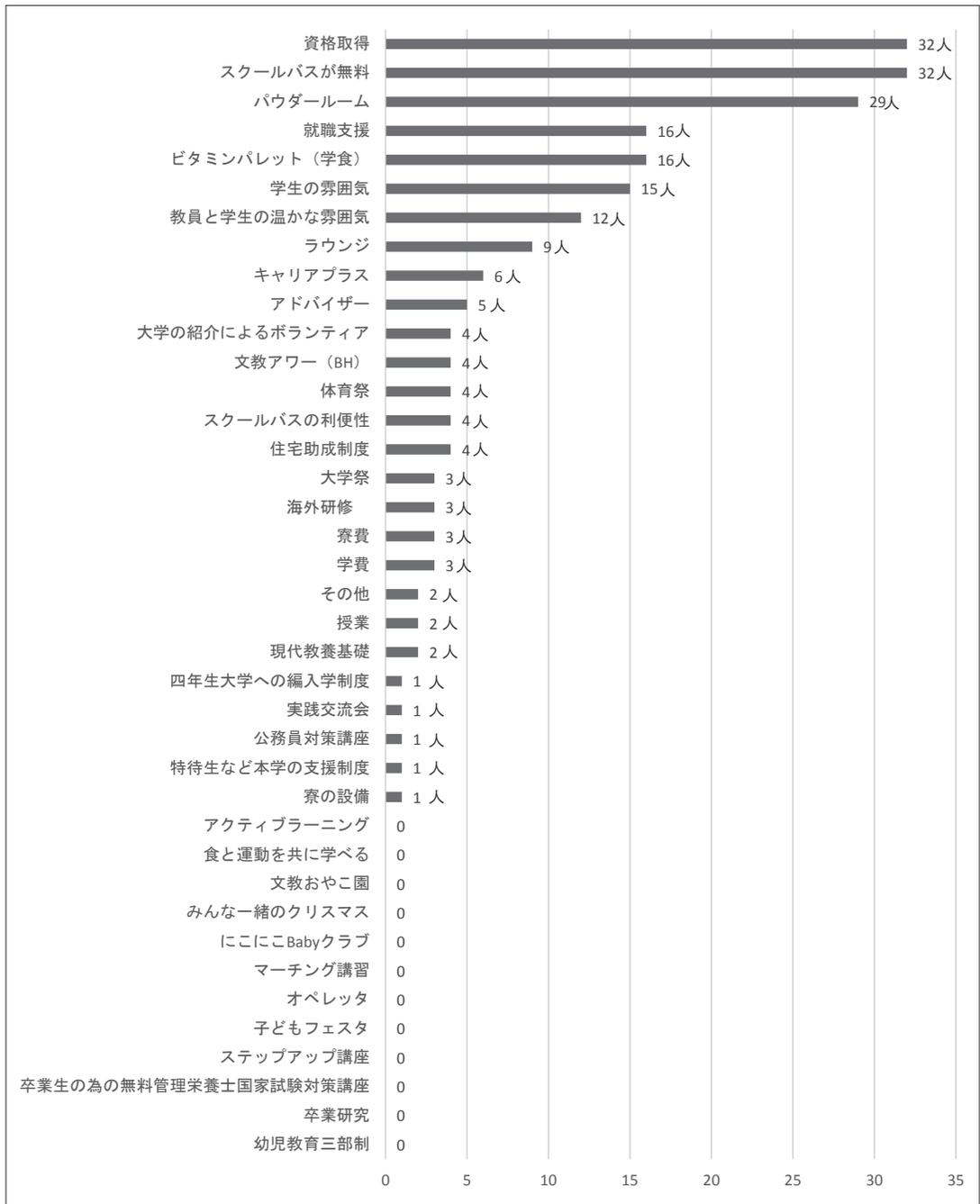


図33 生活文化専攻の学生回答の本学の魅力

9. 重視する取得資格

学生の重視する資格の全体 (gross1238) を見ると定員の多い学科専攻の取れる資格が当然上位に来ている (図34)。当然学科、専攻等により重視する資格は異なることが考えられるので、この項目もセグメントごとに集計した。

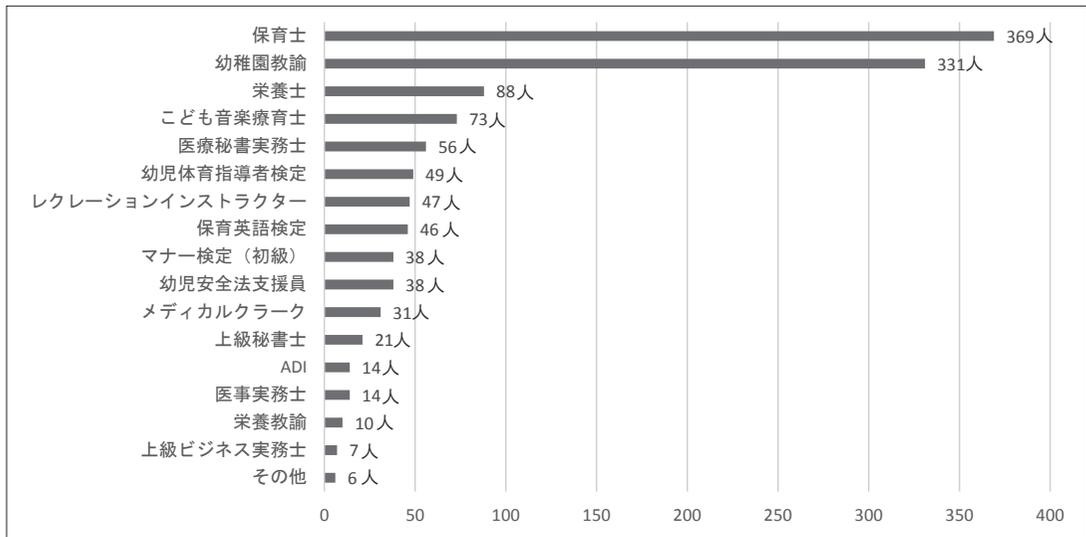


図34 本学学生が重視する資格

9-1. 幼児教育学科第1部の学生

1部の学生（gross481）は、保育士幼稚園教諭以外の資格では、こども音楽療育士が（67人）と多く、続いてレクリエーションインストラクター（45人）であった（図35）。

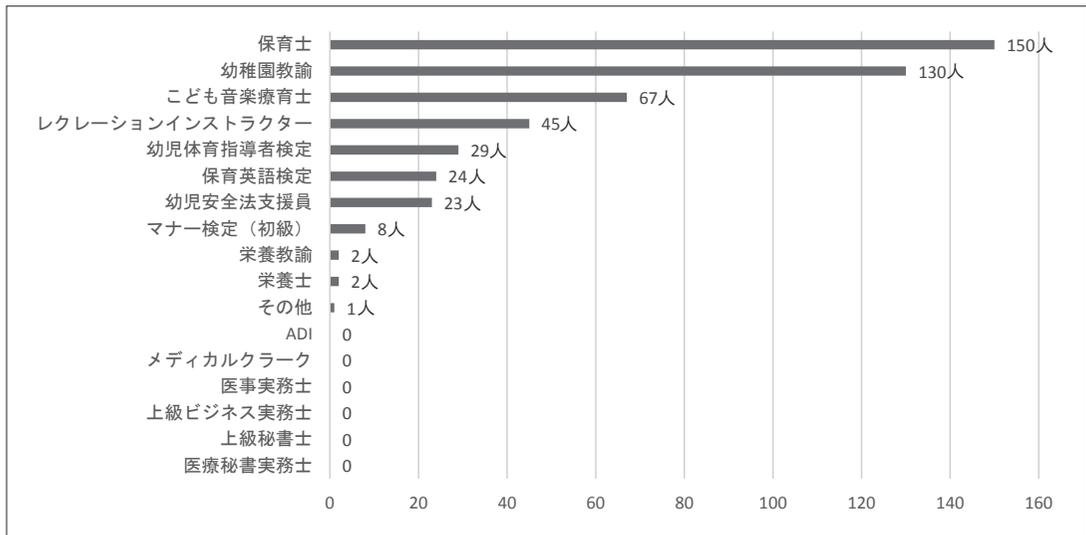


図35 幼児教育学科第1部学生の重視する資格

9-2. 幼児教育学科第3部の学生

3部の学生（gross498）は保育士と幼稚園教諭を除くと、保育英語検定（22人）、幼児体育指導者検定（20人）と続く。1部の学生が重視したこども音楽療育士と、レクリエーションインストラクター（45人）はカリキュラム上取れないことから上位には選ばれなかったようである（図36）。

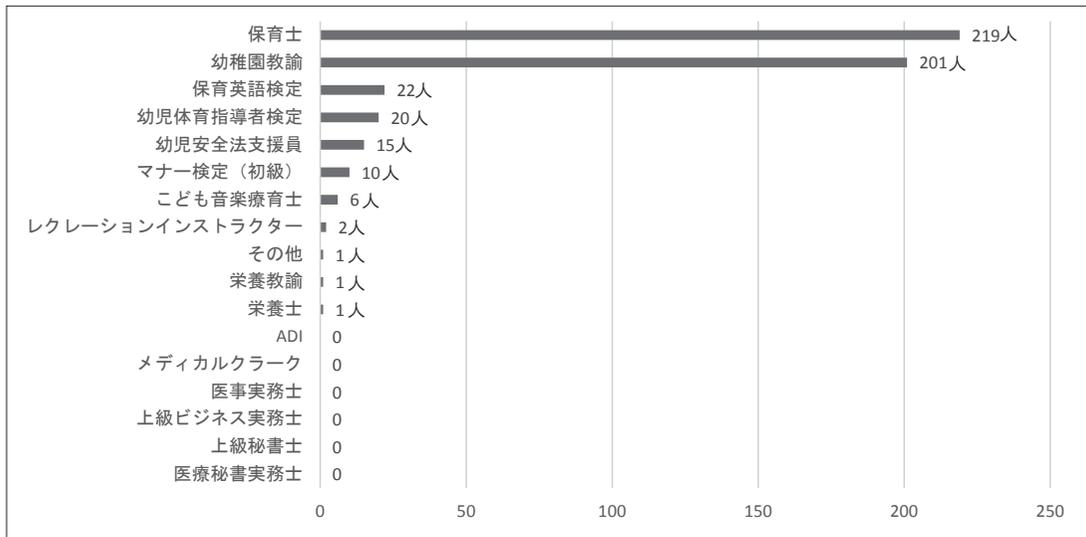


図36 幼児教育学科第3部学生の重視する資格

9-3. 食物栄養専攻の学生

図37に示すように、専攻の特徴通り栄養士の取得を(85人)最大視(85人)している結果が出た (gross128)。

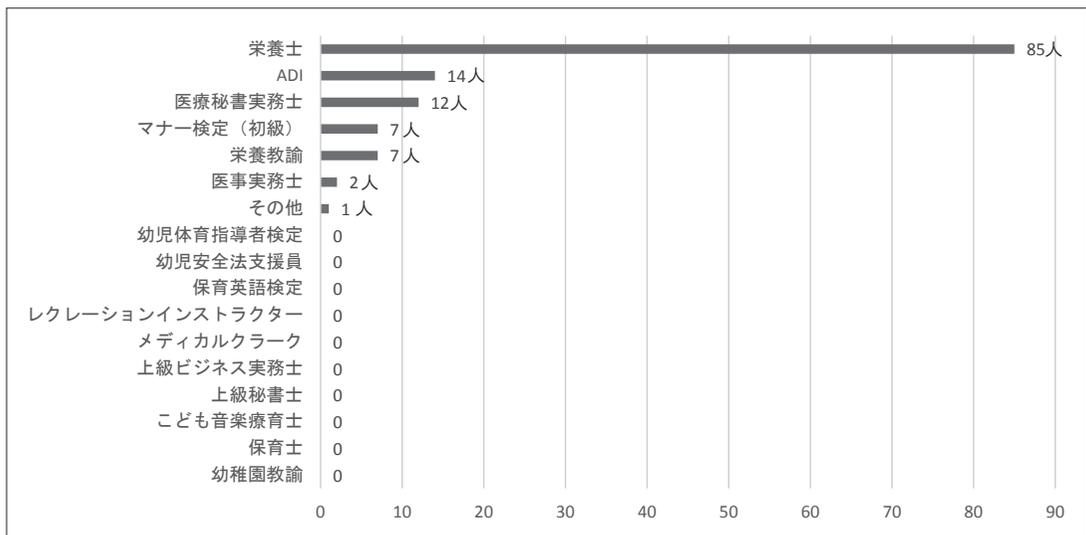


図37 食物栄養専攻学生の重視する資格

9-4. 生活文化専攻の学生

カリキュラム上、卒業時に取得できる資格である医療秘書実務士が44人、チャレンジ資格のメディカルクラークも31人いて専門性に対する意欲が示されている (gross131)。ビジネスコースの学生は全員が上級ビジネスコースと回答している (図38)。

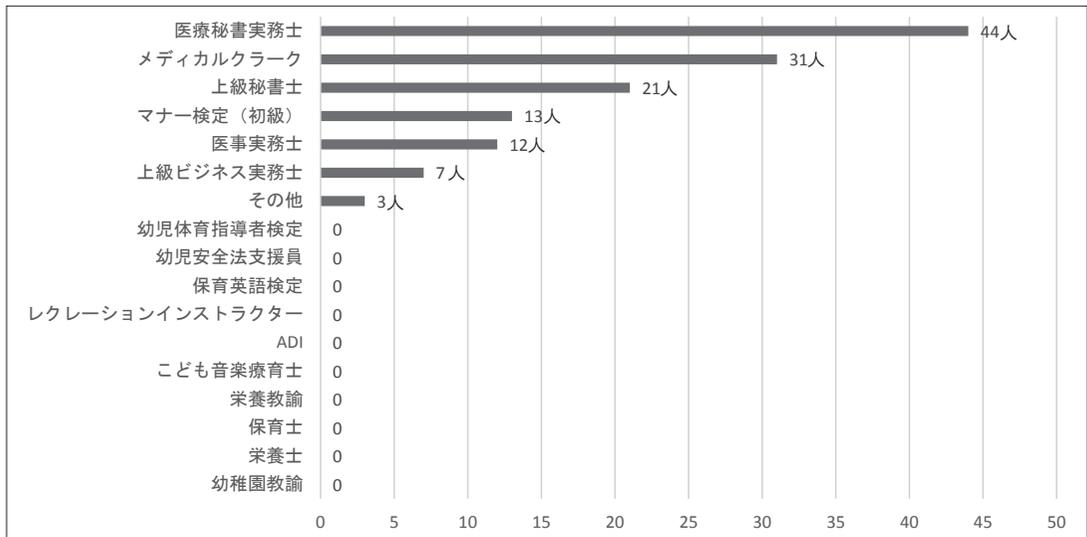


図38 生活文化専攻学生の重視する資格

10. まとめ

昨年に引き続き、学生実態調査を前期に行った。昨年度調査との比較や一部は全国短期大学基準協会の短期大学生に関する調査研究との比較も行った。さらに今年度は学生のセグメントごとの分析を行い、学科や専攻、学年ごとの差をより明確にすることができた。

本学学生の全体像としては、経済的な自立心が強いこと、資格取得などを目指し、多くの学生はまじめに学習に取り組む姿勢がみられる。また、昨年に比べて、学習時間も増加する傾向にあることが分かった。しかし、尋ねた「学習時間」とは宿題や課題など教員から課せられたものではないため、授業に伴う学習時間については別の質問項目を立てて問わなければ授業時以外の学習時間全体が把握できない。実際にはもっと多いものになるだろう。

学年が上がると体調不良が増加し、学習時間は減少している。

学生の雰囲気は毎年向上していることは教員の実感として話題にはなってきたが、このことは調査結果として数値上でも検証できた。一方で、困りごとの相談相手として教員を選ぶと回答した学生は昨年より減っている。

経営上は、学生から評価の高いパウダールームや無料スクールバス、本学の特徴である学生寮などに中長期的な資源の投入も重要と思われる。

参考文献

- 一般財団法人 短期大学基準協会 調査研究委員会 (2016) 短期大学生に関する調査研究—2016年調査 全体集計結果報告—
 リクルート (2015) 「仕事白書」 タウンワークマガジン

学生生活実態調査

キャンパスライフを支援し改善のために調査を行います。個人情報については、他の目的に使用することはありません。成績には関係ありません。ありのままをもれなく回答していただくよう、ご協力をお願いします。

*選択肢のあるものは、数字に○を付けて回答してください。

① 現在のお住まいは

- 1、実家 2、アパートや下宿 3、寮 4、その他 ()

② 主な通学方法 (最も長い通学時間) はなんですか

- 1、名鉄 2、JR 3、近鉄 4、自動車 5、バイク 6、自転車
7、徒歩 8、その他 ()

③ 通学所要時間はどの位ですか

- 1、30分未満 2、30～60分 3、60～90分 4、90～120分 5、120分以上

④ 睡眠時間は何時間程度ですか 約 () 時間 少数点以下四捨五入

⑤ 授業以外の自主的な学習 (ピアノの練習も含む) は平均すると1日どの程度になりますか。

- 0、全くしない 1、0～30分程度 2、30～60分程度 3、60～90分程度
4、90～120分程度 5、120～150分程度 6、150分以上

⑥ 読書 (電子書籍を含む、漫画は除く) 時間は、1週間で平均するとどの程度になりますか。

- 約 () 時間 少数点以下四捨五入

⑦ 現在アルバイトをしていますか 1、している 2、していない

⑧ 上の問いで1、と答えた人だけ、この問いに答えてください。どこでしていますか

- 1、コンビニやスーパー 2、ショップ 3、レストランや喫茶店
4、寿司やラーメン等食事が中心の飲食店 5、居酒屋など主にアルコールを扱う飲食店
6、児童館など子ども支援施設 7、薬局 8、その他 ()

⑨ 今後のアルバイトについて

- 1、今後アルバイトをするつもりはない 2、現在のバイトを継続してするつもりだ
3、新たにするつもり

⑩ アルバイトは1週間に何日ほど行っていますか (していない場合は 0 をお答えください)

- () 日 少数点以下四捨五入
- ⑪ アルバイトは1回何時間ほどですか (していない場合は 0 をお答えください)
() 時間 少数点以下四捨五入
- ⑫ アルバイトは学業に支障があると思いますか
1、無い 2、少しある 3、かなりある
- ⑬ 収入は、ひと月おおよそいくらぐらいですか
(夏休みなど長期休業中は除く、ない場合は 0 を回答)
() 万円 少数点以下四捨五入
- ⑭ アルバイト収入の用途の中で最も多額な支出を一つお答えください
1、授業料 2、生活費 (家賃・食費等) 3、趣味・娯楽 4、ファッション関係
5、化粧品等 6、交際費 7、交通費 8、携帯 9、その他 ()
- ⑮ 支出の中で2番目に大きなものを先ほどの⑭の選択肢の番号でお答えください
..... ()
- ⑯ 過去1年間の間で、体調不良はありましたか
1、よくあった 2、ときどきあった 3、あまりなかった 4、全くなかった
- ⑰ 現在の学生生活において最も困ったり、悩んでいることをひとつお答えください
1、学力や成績 2、友人関係 3、家族関係 4、将来の進路 5、経済状況
6、バイト先での問題 7、その他 () 8、特にない
..... 以下複数回答可
- ⑱ 困りごとは、誰に相談しますか (複数回答可)
1、家族 2、学生相談室 (医務室) 3、高校までの恩師 4、学内の友人
5、学外の友人 6、寮母さん 7、アドバイザー 8、アドバイザー以外の先生
9、本校の先生以外の職員 10、その他 () 11、特に相談しない
- ⑲ 本学に入学後、不審者や痴漢などから迷惑行為を受けたことはありますか (複数回答可)
1、学校や寮周辺である 2、自宅や居住地周辺である
3、学校や自宅周辺以外の通学途上である 4、JR の車両の中である
5、私鉄の車両の中である 6、鉄道の駅およびその付近である
7、その他 () 8、特にない

⑳ 迷惑行為の対応はどのようにしますか。被害経験のない方は自分の行動についての予想で選んでください (複数回答可)

- 1、その場で110番通報
- 2、駅員など周囲の大人に助けを求める
- 3、事後に警察に通報・相談
- 4、事後に友人に相談
- 5、事後に本学の先生に相談
- 6、事後に家族に相談
- 7、その他 ()
- 8、特にしない

㉑ インターネットで被害体験はありますか (複数回答可)

- 1、写真や個人情報や悪口を書き込まれた
- 2、ネットオークションでだまされた
- 3、大量の迷惑メールが届いた
- 4、タップやクリックしたら請求画面が現れた
- 5、金融情報 (クレジットカード番号、ID、パスワード等) を聞き出そうとするメールが届いた
- 6、覚えのない請求メールが届いた
- 7、その他 ()
- 8、特にない

㉒ あなたが本学の魅力と思うことはなんですか (複数回答可)

- 1、学費
- 2、寮費
- 3、寮の設備
- 4、住宅助成制度
- 5、特待生など本学の支援制度
- 6、ラウンジ
- 7、ビタミンパレット (学食)
- 8、パウダールーム
- 9、スクールバスが無料
- 10、スクールバスの利便性
- 11、資格取得
- 12、就職支援
- 13、海外研修
- 14、体育祭
- 15、大学祭
- 16、学生の雰囲気
- 17、教員と学生の温かな雰囲気
- 18、アドバイザー
- 19、幼児教育三部制
- 20、公務員対策講座
- 21、現代教養基礎
- 22、文教アワー (BH)
- 23、授業
- 24、卒業研究
- 25、キャリアプラス
- 26、実践交流会
- 27、卒業生の為の無料管理栄養士国家試験対策講座
- 28、ステップアップ講座
- 29、子どもフェスタ
- 30、オペレッタ
- 31、マーチング講習
- 32、にこにこ Baby クラブ
- 33、みんな一緒にのクリスマス
- 34、文教おやこ園
- 35、食と運動を共に学べる
- 36、アクティブラーニング
- 37、四年生大学への編入学制度
- 38、大学の紹介によるボランティア
- 39、その他 ()

㉓ あなたが本学で取れる資格として重視しているものは何ですか (複数回答可)

- 1、幼稚園教諭
- 2、栄養士
- 3、医療秘書実務士
- 4、保育士
- 5、栄養教諭
- 6、こども音楽療育士
- 7、上級秘書士
- 8、上級ビジネス実務士
- 9、医事実務士
- 10、メディカルクラーク
- 11、ADI
- 12、レクレーションインストラクター
- 13、保育英語検定
- 14、幼児安全法支援員
- 15、幼児体育指導者検定
- 16、マナー検定 (初級)
- 17、その他 ()

愛知文教女子短期大学研究紀要

第 38 号

平成 29 年 3 月 1 日 印刷

平成 29 年 3 月 31 日 発行

代 表 者 古山 敬子
編 集 委 員 渡辺 香織 笠井紀世史 加藤 智子
 柁宜佐統美

編 集 発 行 愛知文教女子短期大学
〒 492-8521
愛知県稲沢市稲葉 2 丁目 9 番 17 号
電話 〈0587〉 32-5169
FAX 〈0587〉 34-2870

印 刷 有限会社 三星印刷
電話 〈052〉 571-0796

CONTENTS

STUDY ARTICLE

- “Sensibility : capacity of perception or feeling” as qualities for nursery teachers
— what the sensibility of nursery teachers trainees should be — Asami Mashita·· 1

STUDY NOTES

- Summary of Australia training 2012 ~ 2016
The results of the student report and the questionnaire survey
..... Miki Ogawa, Shoko Ario, Etsuko Sukigara·· 19
- A Gap between Students' Images of Childcare Workers Before and
After Entering Preschool Teacher Training Facilities
— Based on the Results of the Questionnaire Survey Given to Final-year Students—
..... Satomi Negi, Saki Hattori, Michiru Matsuba··37
- The effects of mentoring and social skills on the evaluation of practice teaching
in the case of junior college students in early childhood education course
..... Hyun-jung Park, Hiromi Murakami, Mariko Kunito,
..... Hideki Hoshino, Hiroto Tamada, Kumiko Ito··49
- Survey of student life in Aichi Bunkyo Women's College Hisayasu Mizutani, Hyun-jung Park··57